

傷害致死ト殺人罪トノ區別

現場助勢ノ罪ヲ構成スルハ俗ニヤレハキヤレト云フニキヤレト云フニキヤレト云フニ

特別共犯ト總則ノ共犯トハ自ラ觀念ナシニス

本條ハ包括的規定ナルヲ以テ暴行カ他罪ノ構成要件ニテラサル場合ニ立ノヨ本罪ヲ成

刑法各論 第一篇 個人ノ法益ニ對スル罪 第二章 生命身體ニ對スル罪 第二節 傷害罪

打シテ創傷ヲ負ハシメ又ハ病毒ヲ感染セシムルカ如シ。

二 傷害致死罪(第二百五條)

傷害致死トハ傷害ノ結果トシテ被害者ヲ死ニ致シタルヲ謂フ。傷害致死ハ所謂結果犯ノ一種ニシテ死ノ結果ヲ認識サセル點ニ於テ殺人罪ト異ナリ暴行ヲ加フル意思アル點ニ於テ過失殺ト異ナル而シテ直系尊屬致死ハ加重罪ナリ。

三 現場助勢(第二百六條)

現場助勢トハ他人ノ傷害行為ニ關與シ其場ニ於テ行為者ニ加勢スルヲ謂フ。即チ單純ナル聲援ヲ與フルナリ所謂彌次馬的行動ナリ加勢ハ廣義ノ幫助ナリト雖モ從犯ノ要件ヲ爲ス幫助タラサルト同時ニ實行行為ノ一部タラサルコトヲ要ス何トナレハ若シ自ラ暴行ヲ爲シタルトキハ第二百七條ノ適用ヲ受クヘク從犯ノ要件タル幫助行為タルトキハ總則共犯ノ適用アルヘケレハナリ。

四 特別共犯(第二百七條)

即チ二人以上カ共同ノ認識ナクシテ暴行ヲ加ヘ傷害シタル場合ヲ謂フ。一般ノ原則ヨリスレハ共同ノ認識ナクシテ暴行ヲ爲シタルトキハ共犯ト認ムルヲ得サルカ故ニ各自ニ於テ自己ノ爲シタル結果ニ付テノミ責任ヲ負フヘキモノナリ然ルニ傷害ノ輕重又ハ其傷害ヲ生セシメタル者ヲ知ルコト能ハサルトキハ甚タ不都合ノ結果ヲ生スヘキヲ以テ法律ハ特別規定ヲ設ケテ共犯例ニ從テ處分スヘキモノト爲シタル所以ナリ。

五 單純暴行罪(第二百八條)

單純暴行トハ暴行ヲ加ヘタルモ人ヲ傷害スルニ至ラサル場合ナリ。縱令傷害ノ意思ヲ以テ暴行ヲ加フルモ傷害ノ結果ヲ生セサルトキハ本罪テリ。暴行ハ身體ニ對スルコトヲ要ス而シテ本罪ハ親告罪ナリ。

第三 刑罰 刑罰ハ懲役又ハ罰金若クハ科料ヲ擇一的ニ科ス場合ト懲役ヲ科ス場合トアリ詳細ハ前掲條文ヲ參照スヘシ

練習問題

(一) 傷害罪ノ構成要件ヲ説明スヘシ。

刑法各論 第一篇 個人ノ法益ニ對スル罪 第二章 生命身體ニ對スル罪 第二節 傷害罪

昭和十四年行政科試驗  
昭和十年行政科試驗  
大正十年行政科試驗



(解説) 本問ニ付テハ前第二節第一、傷害罪ノ意義ト題シ其構成要件ヲ説明セリ、而シテ本問ニ關シテ注意スヘキハ傷害ノ本質如何ニアリ、尙ホ本罪ノ故意ハ傷害ノ結果ニ付キ認識ノ有無ヲ問ハサル點ニアリ。

(二) 娼婦カ病毒アルコトヲ秘シテ客ニ傳染セシメタルトキノ責任如何。

(解説) 本問ハ之ヲ積極ニ解ス其理由ハ本文ノ説明ヲ參照スヘシ。

(三) 傷害致死ト過失殺トノ區別ヲ説明セヨ。昭和十三年第五十二號試驗  
大正九年判檢事試驗

(解説) 本問ハ暴行ノ意思ノ有無ニ因リテ別カル、詳細ハ本文ニ明カナリ。

### 第三節 過失傷害ノ罪

傷害罪ニハ故意ニ基ク傷害罪ト過失ニ因ル傷害罪トノ二種アルコトハ前節ニ述ヘタルカ如シ本節ニ於テハ過失ニ因ル傷害罪ヲ説明スルヲ目的トス。

#### 第二十八章 過失傷害ノ罪

第二百九條 過失ニ因リ人ヲ傷害シタル者ハ五百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス  
前項ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

過失傷害罪ト  
別傷二百四條ノ  
區

第二百十條 過失ニ因リ人ヲ死ニ致シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス  
第二百十一條 業務上必要ナル注意ヲ怠リ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ三年以下ノ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

右ノ規定ニ依レハ過失傷害ノ罪ニハ(一)過失ニ因ル傷害(二)過失致死(三)業務上ノ過失致死ノ體様アリ、以下之ヲ分説スヘシ。

#### 第一 過失傷害(第二百九條)

本罪ハ過失行爲ニ因テ他人ノ身體ヲ傷害シタルコトヲ要ス。本罪カ前第二百四條ノ傷害罪ト異ナル所ハ過失行爲ニ因リタルノ點ニアリ、詳言スレハ本罪ハ不注意ノ爲メ傷害ノ結果ヲ認識セサルコトヲ要スルハ勿論尙ホ他人ノ身體ニ對スル暴行ノ意思ナクシテ結果ノ發生シタルコトヲ要件ト爲ス、例ヘハ坂ニ於テ車ヲ走ラシメタル爲メ過テ人ヲ傷ケタルカ如キハ本罪ナリ、然レトモ若シ人ニ衝突セシメント欲シ、又ハ衝突スルコトヲ知リテ車ヲ走ラシメ因テ他人ヲ傷害シタルカ如キハ第二百四條ノ傷害罪ナリ、何トナレハ前ノ例ハ暴行ノ故意ナク、後ノ例ハ暴行ノ故意アレハナリ、而シテ本罪ハ親告罪ナルカ故ニ被害者ノ告訴ヲ待テ之ヲ處分ス。



過失致死トノ區別

第二 過失致死(第二百)

本罪モ亦暴行ノ意思ナク且ツ死ノ結果ノ認識ナクシテ單ニ過失行爲ノ結果人ヲ死ニ致シタル場合ヲ謂フ。例ヘハ馬ヲ走ラシメ過テ人ヲ殺シタルカ如シ若シ死ノ結果ヲ豫見シタルトキハ殺人罪ヲ成立ス。若シ暴行ノ故意アルトキハ第二百五條ノ犯罪ヲ成立セシム。

第三 業務上ノ過失殺傷(第二百)

本罪ハ一定ノ業務ヲ有スル者カ其業務上必要ナル注意ヲ怠リ因テ人ヲ死傷ニ致シタル場合ニ特ニ重ク罰セラルヘキ犯罪ナリ。茲ニ業務トハ公務タルト私務タルト將タ職業タルト營業タルトヲ問ハサルモ各個ノ行爲ハ其レ自體業務上ノ行爲タルヲ要スルヤ否ヤニ付テハ學者間議論ノ存スル所ナリ。予輩ハ文理解釋上其レ自體業務上ノ行爲タルヲ要スト解ス。而シテ注意ノ程度ハ其業務ノ性質ニ照シテ客觀的ニ判斷セサルヘカラスト雖モ若シ犯人ニ於テ此不注意ナル行爲ヨリ如何ナル結果ノ發生スルカヲ認識シ得サリシ場合ニハ本罪ノ成立ヲ認ムルコト能ハサルヘシ。(總則過失論參照)

過失ヲ要件トスルハ過失ノ有無ヲ如何ニ標準トシテ有罪ト無罪ト分ル

本罪ノ實例トシテハ醫師カ手術ヲ過テ患者ヲ殺シタルカ如キ電車又ハ自動車ノ運轉手カ通行人ヲ殺傷シタルカ如キ枚擧ニ違アラス。  
第四 刑罰 過失傷害罪ハ五百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ過失致死ハ千圓以下ノ罰金ニ業務上ノ過失殺傷ハ三年以下ノ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス。

第四節 墮胎ノ罪

墮胎罪ハ嬰兒殺ト同シク之カ養育ヲ免カレ或ハ不義ノ結果ヲ豫防シ又ハ糊口ノ困難ヲ排除セントスル動機ニ基クテ普通トス。元來墮胎ハ之ヲ處罰スヘキヤ否ヤニ付テハ古今ノ法制一致セス然レトモ文明ノ今日ニ於テハ一般ニ胎兒保護ノ必要ヲ認メ之ヲ處罰スル法制ヲ採用スルニ至レリ。  
墮胎罪ノ規定ヲ擧クレハ左ノ如シ。

第二十九章 墮胎ノ罪

第二百十二條 懷胎ノ婦女藥物ヲ用ヒ又ハ其他ノ方法ヲ以テ墮胎シタルトキハ一年以下ノ懲役ニ處ス

第二百十三條 婦女ノ囑託ヲ受ケ又ハ其承諾ヲ得テ墮胎セシメタル者ハ二年以

刑法各論 第一篇 個人ノ法益ニ對スル罪 第二章 生命身體ニ對スル罪 第四節 墮胎ノ罪



下ノ懲役ニ處ス因テ婦女ヲ死傷ニ致シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

第二百十四條 醫師、產婆、藥劑師又ハ藥種商婦女ノ囑託ヲ受ケ又ハ其承諾ヲ得テ墮胎セシメタルトキハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス因テ婦女ヲ死傷ニ致シタルトキハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス

第二百十五條 婦女ノ囑託ヲ受ケ又ハ其承諾ヲ得スシテ墮胎セシメタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス

前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第二百十六條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ婦女ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

右ノ規定ニ依レハ墮胎罪ニハ(一)懷胎ノ婦女自ラ犯ス場合(二)婦女ノ囑託又ハ承諾ニ基ク場合(三)全ク婦女ノ意思ニ反シテ爲ス場合トアリ然レトモ何レモ墮胎セシムル點ニ於テ同一ナリ故ニ予輩ハ各體様ヲ説明スルニ先チ墮胎罪ノ要件トシテ其共通ノ點ヲ述ヘントス

第一 墮胎罪トハ自然ノ分娩期ニ先チ人爲ヲ以テ胎兒ヲ母體外ニ排出スルニ因テ成立スル犯罪ナリ

墮胎罪トハ何

一 法益 本罪ノ法益ハ一面ニ於テ胎兒ナリ他ノ一面ニ於テ婦女ノ生命身體ナリ。胎兒トハ母體中ニ生活スル胚種ナリ故ニ胎兒ハ母體ノ一部ニシテ獨立ノ人格者ニ非ス然レトモ出生スルトキハ人格者ト爲ルモノナルカ故ニ法律ハ之ヲ保護スルノ必要アリ

二 行爲 行爲ハ胎兒ヲ母體外ニ排出スルニアリ即チ自然ノ分娩期ニ先チテ爲スコトヲ要ス。排出ノ手段ニ付テハ法律ハ藥物其他ノ方法ヲ以テト規定セルカ故ニ手段ノ如何ハ本罪ノ成立ニ關係ナシ墮胎罪ハ胎兒ヲ母體外ニ排出スルニ因テ既遂ト爲ル從テ胎兒カ母體外ニ於テ獨立呼吸ヲ爲シタル後之ヲ殺ストキハ墮胎罪ト殺人罪トノ二罪ヲ構成スヘシ

茲ニ一言スヘキハ母體內ニ於テ胎兒ヲ殺害スル場合ト既ニ死亡セルモノヲ排出スル場合トハ自ラ異ナル何トナレハ胎兒ハ母體中ニ於テ生活セル胚子ヲ謂フカ故ニ既ニ死亡セル者ハ母體中ニ在ルモ胎兒ニ非サレハナリ故ニ死亡セル者ニ對シテハ墮胎罪ヲ成立サルカ如シ此場合ニハ寧ロ母體ニ對スル傷害罪ヲ構成スヘシ

母體內ニ於テ  
既ニ死亡セル  
者ヲ排出スル  
爲メ墮胎手段  
ヲ爲スモ墮胎  
罪トナス







ヘキモ承諾アルトキハ第二百十三條又ハ第二百十四條ニ依テ輕ク處分セラレモノトス、然ルニ本問ハ承諾ナキニ拘ハラズ承諾アルモノト信シタリト謂フカ故ニ犯人ニ於テ承諾ノ有無ニ付キ錯誤アルモノナリ、從テ本問ハ刑法第三十八條第二項ヲ適用シテ第二百十四條ニ依リ處罰スヘキモノトス。

(三) 懐胎シ居ラサル婦女ニ對シ墮胎行爲ヲ爲シタル者ノ刑法上ノ責任如何。

(解説) 本問ニ付テハ不能犯ノ説明ヲ參照スヘシ。

### 第五節 遺棄ノ罪

遺棄罪ハ墮胎罪ト等シク人ノ生命身體ヲ危險ナラシムルモノナリ、凡ソ生命身體ニ對スル法益ヲ完全ニ保護セント欲セハ直接ニ生命身體ヲ害スル行爲ヲ罰スルヲ以テ足レリトセス一般ニ生命身體ニ危險ヲ及ホスヘキ行爲ヲモ處罰セサルヘカラス是レ刑法ニ於テ遺棄罪ヲ設ケタル所以ナリ。

#### 第三十章 遺棄ノ罪

第二百十七條 老幼、不具又ハ疾病ノ爲メ扶助ヲ要ス可キ者ヲ遺棄シタル者ハ一年以下ノ懲役ニ處ス

第二百十八條 老幼、幼者、不具者又ハ病者ヲ保護ス可キ責任アル者之ヲ遺棄シ又ハ其生存ニ必要ナル保護ヲ爲ササルトキハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス  
自己又ハ配偶者ノ直系尊屬ニ對シテ犯シタルトキハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス

第二百十九條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

#### 第一 遺棄罪ノ意義

遺棄罪トハ扶助ヲ要スヘキ老幼不具又ハ疾病者ヲ遺棄スルニ因テ成立スル犯罪ナリ 左ニ要件ヲ分説スヘシ。

一 客體 本罪ノ客體ハ扶助ヲ要スヘキ老幼不具又ハ疾病者ナリ、法律ハ右ノ三者ヲ列擧セルカ故ニ其以外ノ者ニ對シテハ本罪タラス、且ツ此等ノ者ト雖モ扶助ヲ要スヘキコトヲ條件ト爲ス。茲ニ扶助ヲ要スヘキ者トハ自ラ又ハ責任者ノ保護ニ因テ生活ヲ維持スルコト能ハサルノ虞アル状態

遺棄罪トハ何ソヤ



ニ在ル者ヲ謂フ、要スルニ如何ナル者カ老幼、不具、疾病者トシテ扶助ヲ要スルヤ否ヤハ各場合ニ付テ決スヘキ問題ナリ。

二 行爲 本罪ノ行爲ハ遺棄スルニアリ 遺棄トハ場所的ノ隔離ニ因リテ從來ノ扶助可能ノ状態ヲ變更スルヲ謂フ、單ニ場所的ノ隔離ト觀念スヘカラス即チ場所的ノ隔離ノ結果トシテ生命身體ニ危險ヲ生スル虞アル状態ヲ發生スルコトヲ要件トナス、乍併必スシモ寥閔無人ノ地ニ遺棄スルヲ要セス、場所的ノ隔離トハ被害者ヲ一定ノ場所ヨリ他ノ場所ニ轉置スル場合ト被害者ヲ從來ノ場所ニ置キ去リニスル場合トアリ、要ハ被隔離者ノ生命身體ニ危險ナル状態ヲ生シタルヤ否ヤニ在リ、從テ隔離行爲カ何等ノ危險状態ナキ場合例ヘハ夫カ妻ト、初生兒トヲ自家ニ置キ去リ踪跡ヲ暗マスモ其幼兒ハ妻ヨリ扶助セラルヘキカ故ニ遺棄罪ト爲ラサルカ如シ。

第二 遺棄罪ノ體様

一 單純遺棄(二十七條)

本罪ノ主體ハ保護スヘキ責任ナキ者ナリ、元來保護スヘキ責任ナキ者ハ單

遺棄ハ場所的  
ノ隔離ト危險  
状態ノ發生ト  
ヲ要件トス

加重遺棄ト單  
別遺棄トノ區

ニ保護ヲ與ヘストノ事實ノミニ因テ遺棄罪ヲ成立セス、例ヘハ路傍ニ棄兒アリ通行人之ヲ救助セサルモ本罪タラス是レ後段ノ加重遺棄ト異ナル所ナリ、故ニ本罪ノ成立ニハ被害者ヲ場所的ニ隔離シ因テ其者ヲシテ扶助可能ノ状態ヲ阻碍スル行爲ヲ爲スコトヲ必要トス例ヘハ病者タル同居人若クハ同行者等ヲ遺棄スルカ如ク既ニ一旦特別ノ關係ヲ存在セル者ニ付テノミ本罪ヲ構成ス、故ニ被拐取者ヲ遺棄スルカ如キモ亦本罪ヲ成立スヘシ。

二 加重遺棄(二十八條)

本罪ハ前段ノ罪ト異ナリ保護スヘキ責任者カ老幼、不具、疾病者ヲ遺棄シ又ハ其生存ニ必要ナル保護ヲ與ヘサルニ因テ成立ス、故ニ本罪ノ主體ハ保護責任者ナリ、行爲ハ遺棄ト其生存ニ必要ナル保護ヲ與ヘサルトニ在リ、保護ノ責任ハ法令又ハ契約ニ因テ發生スルヲ通例トス、例ヘハ民法上ノ扶養義務者又ハ契約上ノ看護者等ノ如キ是ナリ、唯茲ニ議論ノ存スルハ棄兒ヲ拾ヒテ養育ヲ始メタル者カ之ヲ遺棄スル場合ノ如キハ本條ノ遺棄罪ヲ構成スルヤ否ヤニアリ、予輩ハ積極說ヲ正當ト信ス。



自己又ハ配偶者ノ直系尊屬ニ對シテ本條ノ罪ヲ犯シタルトキハ最モ重ク處罰ス。

三 結果犯(第九條)

遺棄罪ヲ犯スニ因テ人ヲ死傷ニ致シタルトキハ結果犯トシテ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處罰セラル。

第三 刑罰 單純遺棄ハ一年以下加重遺棄ハ三月以上五年以下、又ハ六月以上七年以下トス。

練習問題

- (一) 養育院ノ門前ニ遺棄スルトキハ必ス養育院ヨリ扶助セラルルコトヲ豫期シテ棄兒シタルニ果シテ救助セラレタリ如何ナル犯罪ヲ構成スルヤ。
- (二) 遺棄トハ何ソヤ。

第三章 自由ニ對スル罪

凡ソ吾人ハ他人ヨリ強制セラレヌシテ自己ノ自由意思ニ基キ行動ヲ爲スニ因テ利益ヲ有スルモノナリ、故ニ不法ニ他人ノ自由ヲ侵害スル行爲ヲ處罰スルノ必要アリ是レ刑法第二篇第三十一章乃至第三十三章ニ於テ身體ノ自由ニ對スル罪ヲ規定セル所以ナリ、其他強盜、強姦、職權濫用ノ逮捕、監禁、住居ノ侵害、公務執行ノ妨害等ノ如キモ一面ニ於テ自由ニ對スル犯罪ナルモ他面ニ於テ他ノ法益ヲ侵害スルヲ以テ刑法ハ此等ヲ自由ニ對スル罪ト爲サスシテ他罪ヲ構成スルモノトセリ。要スルニ自由ニ對スル罪ハ止テ自由ノ侵害カ他罪ノ構成要件ヲ具備セサル場合ニ於テ成立スルモノトス。

第一節 逮捕及ヒ監禁ノ罪

憲法第二十三條ノ規定ニ依レハ日本臣民ハ法律ニ依ルニ非サレハ逮捕、監禁セラレサルノ自由ヲ有ス故ニ擅リニ人ヲ逮捕、監禁スルハ不法ナリ、是レ刑法カ本罪ヲ認メタル根據ナリ。

第三十一章 逮捕及ヒ監禁ノ罪



第二百二十條 不法ニ人ヲ逮捕又ハ監禁シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

自己又ハ配偶者ノ直系尊屬ニ對シテ犯シタルトキハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス

第二百二十一條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

### 第一 逮捕及ヒ監禁罪ノ意義

逮捕及ヒ監禁罪トハ何ソ

本罪ハ不法ニ他人ノ身體運動ノ自由ヲ侵害スルニ因テ成立ス。

刑法ハ人ヲ逮捕又ハ監禁シタル者ハ云々ト規定セルモ本來逮捕罪ト監禁罪トノ二個ノ犯罪ヲ規定シタルモノナリ、然レトモ共ニ人ノ身體運動ノ自由ヲ侵害スル犯罪タルノ點ニ於テ同一ニシテ唯侵害ノ方法ニ於テ異ナルニ過キス從テ便宜上同一條文ニ規定シタルモノトス。

逮捕及ヒ監禁罪ノ要件

一 被害者 本罪ニ於ケル被害者ハ自然人タルコト勿論ナルモ如何ナル者ヲ以テ被害者ト爲スヤハ學者間議論ノ存スル所ナリ、予輩ハ本罪ハ人ノ身

逮捕ト監禁トノ區別

體運動ノ自由ヲ侵害スルコトヲ以テ本質ト爲スモノト信スルカ故ニ自己ノ意思ニ因リテ運動ヲ爲シ得ル者ハ勿論自己ノ運動ヲ認識シ得ル能力アル者ハ縱令自ラ運動ヲ爲シ得サル者ト雖モ總テ被害者ナリト解ス、從テ自己ノ運動ヲ全然認識シ得ル能力ナキ幼兒ノ如キハ本罪ノ被害者タラス。

二 行爲 本罪ノ行爲ハ逮捕又ハ監禁ナリ。共ニ人ノ身體運動ノ自由ヲ侵害スルモノナリ唯兩者ハ手段ノ差異ニ過キス、即チ逮捕トハ有形無形ノ手段ニ依テ現實的支配ノ下ニ人ノ身體運動ノ自由ヲ拘束スルヲ謂ヒ、監禁トハ區劃サレタル一定ノ場所ニ人ノ身體ノ自由ヲ拘束スルヲ謂フ、例ヘハ或器具ヲ用ヒテ人ヲ制縛スルト單ニ暴力ヲ加ヘテ運動ノ自由ヲ拘束スルト刑事巡查ナリト詐稱シテ人ヲ引致スルカ如キハ逮捕ナリ、之ニ反シ一室ニ押込メ又ハ入湯中ノ婦人ノ着衣一切ヲ奪ヒ去リテ浴場ヨリ外出スル能ハサラシムルカ如キハ監禁ナリ。

逮捕監禁ハ共ニ繼續ノ觀念ナリ、故ニ例ヘハ人ノ手ヲ握ルト共ニ之ヲ放チ又ハ一室ニ押込メタルモ直ニ解放スルハ本罪ヲ構成セス。

逮捕監禁ハ繼續犯ナリ



三 故意 本罪ノ故意ハ犯罪事實ノ認識ノ外違法ノ知覺ヲ必要トス但後段ニ付テハ反對アリ。

第二 刑罰 普通ノ場合ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ自己又ハ配偶者ノ直系尊屬カ被害者ナルトキハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス、因テ死傷ノ結果ヲ生シタルトキハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷セラル。

練習問題

- (一) 逮捕ト監禁トノ區別ヲ説明スヘシ。
- (二) 逮捕及ヒ監禁罪ノ故意ニ違法ノ知覺ヲ要件トスルヤ。

第二節 脅迫ノ罪

刑法ハ第三十二章ニ脅迫ノ罪ト題シ單純脅迫罪ト強要罪トヲ規定ス、元來單純脅迫罪ハ住居及ヒ秘密ヲ害スル罪ト等シク法律上ノ安全ヲ害スル罪ノ範圍ニ屬シ自由ニ對スル罪ニ非サルカ故ニ或ハ強要罪ト區別シ住居及ヒ秘密ヲ害スル罪ト同時ニ説明スル者アリ、然レトモ予輩ハ講學ノ便ヲ圖リ法典ノ

順序ニ從ヒ茲ニ説明セント欲ス。

第三十二章 脅迫ノ罪

第二百二十二條 生命、身體、自由、名譽又ハ財產ニ對シ害ヲ加フ可キコトヲ以テ人ヲ脅迫シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

親族ノ生命、身體、自由、名譽又ハ財產ニ對シ害ヲ加フ可キコトヲ以テ人ヲ脅迫シタル者亦同シ

第二百二十三條 生命、身體、自由、名譽若クハ財產ニ對シ害ヲ加フ可キコトヲ以テ脅迫シ又ハ暴行ヲ用ヒ人ヲシテ義務ナキ事ヲ行ハシメ又ハ行フ可キ權利ヲ妨害シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

親族ノ生命、身體、自由、名譽又ハ財產ニ對シ害ヲ加フ可キコトヲ以テ脅迫シ人ヲシテ義務ナキ事ヲ行ハシメ又ハ行フ可キ權利ヲ妨害シタル者亦同シ  
前二項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第一 單純脅迫罪(第二百二十二條)

單純脅迫罪ハ被害者又ハ其親族ノ生命身體自由名譽財產ニ對シテ害ヲ加フヘキコトヲ通知シ以テ之ヲ威嚇スルニ因テ成立ス、即チ本罪ハ被害者ノ有スル權利カ安全ナリトノ信念ヲ破ルモノナリ。  
左ニ要件ヲ分説スヘシ。

第二百二十二條ノ要件ハ何等ノ目的ヲ以テハナリ



一 行爲 本罪ノ行爲ハ脅迫ナリ、脅迫トハ一定ノ害惡ヲ加フヘキコトヲ告知シテ他人ヲ威嚇スル行爲ナリ、本罪ニ於ケル脅迫ハ最モ廣義ニシテ他人ノ意思ノ反抗ヲ抑壓スルニ足ルヘキ程度ノモノタルヲ必要トセス、單ニ害惡ヲ加フヘキコトノ告知ヲ以テ充分トス、即チ實際ニ於テ被害者カ畏怖スルコトヲ必要トセス故ニ害惡ノ通知ノ形式ハ行爲者自身直接ニ口頭ヲ以テ爲スト書面ヲ以テ爲ストヲ問ハス被害者カ害惡ノ通知ヲ認知スルヤ否ヤ直ニ既遂トナル、但加害ノ種類ニ制限アリ、即チ被害者又ハ其親族ノ生命身體自由名譽又ハ財産ニ對シ加害行爲ヲ爲スノ告知ヲ必要トス、而シテ脅迫カ他ノ犯罪ノ要件タル場合ニ於テハ本罪ト他罪ノ著手トナルヤ否ヤニ付テハ異說アリト雖モ予輩ハ脅迫ノ罪ハ他ノ犯罪ノ構成ニ屬セサル場合ニ於テノミ成立スルモノト解ス。

二 故意 本罪ノ故意ハ脅迫行爲ヲ爲スノ認識ト其結果トシテ被脅迫者ニ於テ畏怖ノ念ヲ生スルコトノ認識アルヲ以テ足ル故ニ行爲者ニ於テ實際害ヲ加フルノ意思アルヲ要セサルハ勿論被脅迫者ヲ畏怖セシムヘキ目的

ノ存在モ必要ニアラス是レ強盜又ハ恐喝ノ場合ト異ナル所ナリ。

三 本罪ノ刑罰ハ一年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ナリ。

第二 強要罪(第二百三十三條)

強要罪トハ何

強要罪ノ要件

強要罪ハ脅迫又ハ暴行ヲ用ヒ他人ヲシテ義務ナキコトヲ行ハシメ又ハ行フ可キ權利ヲ妨害スルニ因テ成立ス。本罪ハ一名之ヲ強制罪トモ稱ス。本罪ハ暴行又ハ脅迫ニ依リテ他人ヲシテ作爲不作爲ヲ強要スルモノナルヲ以テ行爲ノ自由ヲ侵害スル犯罪ナルヤ明カナリ是レ單純脅迫罪ト性質ヲ異ニス。左ニ要件ヲ分説スヘシ。

一 法益 本罪ニ依リテ害セラル、法益ハ一定セル行爲ノ自由ナリ。凡ソ吾人ハ法律ノ範圍ニ於テ行動ノ自由ヲ有ス、從テ他人ヨリ義務ナキコトヲ強制セラレ又ハ行フコトヲ得ヘキ權利ヲ妨害セラル、ハ明カニ自由ノ侵害ナリ。

二 行爲 本罪ノ行爲ハ義務ナキ事ヲ行ハシメ又ハ行フヘキ權利ヲ妨害スルニ在リ其手段トシテ暴行又ハ脅迫ヲ加フルコトヲ要ス。暴行トハ不正



強要罪ニハ如何ナル程度ノ暴行脅迫ヲ要スルカ

ノ腕力ニシテ有形的ナリ脅迫ノ意義ニ付テハ前段ニ説明セリ、尙ホ脅迫ヲ以テスル場合ハ被害者自身ニ對スル脅迫ノミナラス被害者ノ親族ニ對シ害ヲ加フヘキ旨ノ脅迫モ亦本罪ノ手段タルコトヲ得。茲ニ注意スヘキハ所謂暴行脅迫ハ被害者ヲ畏怖セシムヘキ程度若クハ被害者ヲ強制スヘキ程度ノモノタルコトヲ要スルト同時ニ強盜罪ノ要件タル暴行脅迫ノ如ク被害者ノ反抗ヲ抑壓スル程度ノモノタルコトヲ必要トセス。要スルニ強要シタル行爲ト暴行脅迫トノ間ニ因果關係ヲ形成シ得ル程度ノモノタルヲ要件トナス。

斯ノ如ク本罪ハ暴行脅迫ヲ以テ他人ノ作爲不作爲ヲ強制スルニ因テ成立スルモノナリト雖モ若シ暴行脅迫ニ因テ被害者ヲシテ財産上ノ給付ヲ爲サシムルトキハ強盜又ハ恐喝ノ罪ヲ構成スヘク本罪トノ俱發タラス、而シテ本罪ノ行爲ハ被害者ヲシテ義務ナキ事ヲ行ハシメ又ハ權利行使ヲ妨クルコトヲ要件トナスカ故ニ暴行脅迫ヲ以テ義務ヲ履行セシメ又ハ妨害シタル行爲ニ付キ被害者ニ權利ナキトキハ單純暴行罪又ハ單純脅迫罪ヲ構

成シ得ヘキモ本罪タラス。

三 故意 本罪ノ故意ハ犯罪事實ノ認識ノ外特ニ違法ノ認識ヲ要件トス、從テ義務アル行爲ト誤信シテ義務ナキ行爲ヲ強要スルトキハ故意ヲ阻却スヘシ。

四 刑罰 本罪ノ刑罰ハ三年以下ノ懲役ナリ、而シテ本罪ノ未遂ハ之ヲ罰ス

練習問題

(一) 強盜罪ノ脅迫ト單純脅迫罪ノ脅迫トノ差異如何。

大正十一年辯護士試驗

(解説) 刑法ハ第二百二十二條ノ脅迫罪ニ於テハ生命身體自由名譽又ハ財産ニ對シ害ヲ加フヘキコトヲ以テ人ヲ脅迫シタル者ハ云々ト規定シ第百三十六條ノ強盜罪ニ於テハ暴行又ハ脅迫ヲ以テ他人ノ財物ヲ強取シタル者ハ云々ト規定セリ、元來脅迫トハ害惡ヲ加フルノ通知ニ依テ人ヲシテ威嚇スルコトヲ謂フ、故ニ兩者脅迫ノ本質ニ於テ異ナルコトナシ唯強盜罪ニ於テハ脅迫カ財物ヲ強取スルノ手段ナルヲ以テ被害者ノ反



自力救済ハ國  
家組織ノ完備  
シタル時代ニ  
於テハ原則ニ  
於テ之ヲ禁止  
ス

抗ヲ抑壓スルノ程度ニ於ケル威嚇ヲ必要トシ反之脅迫罪ニ於テハ一定ノ法益ニ對シテ害ヲ加フルコトノ通知ノミヲ以テ成立スルカ故ニ強盜ノ場合ノ如キ程度ノ威嚇ヲ要件トセス、要スルニ兩者ハ其被害者ヲ威嚇スル程度ニ於テ異ナルニ過キス。

(二) 債權者カ債務者ヲ脅迫シテ債務ヲ履行セシムルハ犯罪タルヤ、

(解説) 債務者カ債務ヲ履行セサルトキハ債權者ハ裁判上ノ手續ニ依リテ其履行ヲ強制スルコトヲ得ヘキモ自力ニ依テ之ヲ強制スルコトヲ得サルナリ、果シテ然ラハ本問ニ於ケル債權者ノ行為ハ明カニ違法ナリ然レトモ債權者ノ行為カ如何ナル犯罪ヲ構成スルヤハ別ニ考究スヘキ問題ナリ、第二百二十三條ハ脅迫ヲ用ヒテ義務ナキコトヲ行ハシムル場合ナルカ故ニ債權者ノ行為ハ本罪ノ要件ヲ充實セス然ルニ第二百二十二條ハ一定ノ害惡ヲ通知シテ人ヲ脅迫シタルトキハ如何ナル目的ニ出テタルヲ問ハス犯罪ヲ成立スルカ故ニ本問ニ於ケル債權者ノ行為ハ明カニ第二百二十二條ニ該當スルモノナリ因テ債權者ヲ第二百二十二條ニ照

シテ處分スヘキモノトス。

### 第三節 略取及ヒ誘拐ノ罪

略取及ヒ誘拐ノ罪ハ前述セル逮捕監禁罪又ハ強要罪ト同シク他人ノ自由ヲ侵害スル犯罪ナリ而シテ本罪ハ不法ニ他人ノ身體ヲ自己ノ支配内ニ移轉シ以テ其自由ヲ侵害スルヲ特質トナス、本罪ニ關スル刑法ノ規定ヲ示セハ左ノ如シ

第三十三章 略取及ヒ誘拐ノ罪

第二百二十四條 未成年者ヲ略取又ハ誘拐シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

第二百二十五條 營利、猥褻又ハ結婚ノ目的ヲ以テ人ヲ略取又ハ誘拐シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第二百二十六條 帝國外ニ移送スル目的ヲ以テ人ヲ略取又ハ誘拐シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス  
帝國外ニ移送スル目的ヲ以テ人ヲ賣買シ又ハ被拐取者若クハ被賣者ヲ帝國外ニ移送シタル者亦同シ











帝國外トハ外國ヲ謂フ。

(ハ) 帝國外ニ移送スル目的ヲ以テ人ヲ賣買シ又ハ被拐取者若クハ被賣者ヲ帝國外ニ移送スル行爲(第六條二百二十)

人身賣買ノ法律上無効ナルハ勿論ナルモ所謂人ヲ賣買スルトハ有償ニテ人ヲ第三者ニ交付シ其對價ヲ得ルヲ謂フ。人身賣買ハ外國ニ移送スル目的ニ出テタルコトヲ要スルハ明カナリ、而シテ被拐取者若クハ被賣者ヲ外國ニ移送シタル時ハ目的ノ有無ヲ問ハス常ニ本罪ヲ構成ス。

三 事後幫助罪(第二百二十七條)

本罪ハ拐取賣買又ハ移送ノ罪ヲ犯シタル者ヲ幫助スル目的ヲ以テ被拐取者又ハ被賣買ヲ收受、藏匿、隱避セシムルニ因テ成立ス。而シテ營利猥褻ノ目的ヲ以テ收受シタルトキハ加重ノ罪ト爲ルヘシ、次ニ本罪ハ事後ニ於テ幫助ノ目的ヲ以テ又ハ營利又ハ猥褻ノ目的ヲ以テ一定ノ行爲ヲ爲スコトヲ要ス、若シ主タル犯罪ノ行ハルル前ニ於テ右幫助ノ行爲ヲ約シテ主タル犯罪ヲ容易ナラシメタルトキハ總則ノ從犯タリ、收受藏匿隱避ノ意義ニ付

テハ前述セル贓物ニ關スル罪ノ說明ヲ參照スヘシ。

第三 本罪ノ未遂ハ總テ之ヲ處罰ス、本罪ハ他人ヲ自己ノ實力的支配内ニ措キタル時ヲ以テ既遂トナリ犯人カ營利其他ノ目的ヲ達スルト否トハ何等ノ關係ナキモノトス(大正三年大審院判決)

第四 刑罰 本罪ノ刑罰ハ何レモ懲役刑ニシテ被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論スル場合ト否ラサル場合トアリ、且被拐取者又ハ被賣者カ犯人ト婚姻ヲ爲シタルトキハ婚姻ノ無効又ハ取消ノ判決確定シタル後ニ非サレハ告訴ノ效ナシトセリ(前掲條文參照)

練習問題

(一) 略取誘拐ノ差異ヲ辨シ例ヲ擧ケテ之ヲ說明スヘシ。

大正三年茨城縣警部試驗問題

(解說) 本節第一ノ說明參照

(二) 略取罪ト逮捕罪トノ異同ヲ論ス。

大正六年高等文試官驗  
明治四十三年高等文官試驗

(解說) 略取罪ト逮捕罪トハ共ニ他人ノ身體ノ自由ヲ侵害スル點ニ於テ同

刑法各論 第一篇 個人ノ法益ニ對スル罪

第三章 自由ニ對スル罪  
第三節 略取及ヒ誘拐ノ罪



一ナルモ略取ト逮捕トハ、手段ヲ異ニスルカ故ニ兩者ノ間ニ種々ノ差異ヲ生ス。即チ逮捕トハ現實的支配ノ下ニ人ノ身體ノ自由ヲ拘束スルコトヲ本質トスルカ故ニ場所ノ移轉ヲ必要トセス反之略取トハ被害者ノ意思ニ反シテ人ヲ自己ノ實力の支配ノ下ニ移轉シ因テ以テ自由ヲ侵害スルモノナルカ故ニ場所ノ移轉ヲ要件トナス、從テ逮捕其モノハ必スシモ違法ニアラス何トナレハ職務ノ執行上、又ハ保護ノ必要上逮捕スル場合アレハナリ故ニ逮捕カ犯罪トナルニハ違法ナルコトヲ要件トス、反之略取ハ常ニ違法ナル行爲ナリ、而シテ逮捕罪ノ故意ニハ特ニ違法ノ認識ヲ必要トスル點ニ於テ略取ト異ナル、逮捕ト略取トハ斯ク性質ヲ異ニスルヲ以テ略取ノ手段トシテ逮捕シ又ハ略取シタル後逮捕スルトキハ第五十四條ノ適用アルモノトス。

- (三) 臺灣ニ於テ娼妓ヲ營マシムル目的ヲ以テ内地ニ於ケル成年ノ婦女ヲ拐取シ之ヲ賣買シタル者ノ刑法上ノ責任如何。
- (四) 監督者ナキ未成年者例ヘハ不良ノ少年又ハ棄兒ヲ自己ノ支配内ニ收

容シテ保護スルハ第二百二十四條ノ罪ヲ構成セサルヤ。

(解説) 刑法第二百二十四條ノ罪ハ未成年者ヲ略取又ハ誘拐スルニ因テ成立ス、而シテ本罪ハ目的の罪ニアラサルカ故ニ目的ノ善惡ハ法ノ關スル所ニ非ス、故ニ問題ノ焦點ハ略取又ハ誘拐ノ事實アリヤ否ヤノ點ニ在リ、按スルニ本問棄兒ニ付テハ拐取ノ事實ヲ認ムルコト能ハサルカ故ニ本罪タラス不良ノ少年ニ付テハ場合ヲ分テ論スルヲ要ス即チ略取又ハ誘拐ノ結果トシテ收容シタルトキハ本罪ヲ構成シ否ラサル場合ハ無罪タリ

#### 第四章 名譽信用及ヒ業務ニ對スル罪

凡ソ名譽信用及ヒ業務ハ吾人ノ社會的生存上ニ於テ重要ナル法益ニシテ他人ヨリ之ヲ侵害セラレシカ之ヲ回復スルノ困難ナルノミナラス爲メニ社會的活動ノ地位ヲ失ヒ遂ニハ糊口ニ窮スルノ悲境ニ陥ルノ結果ヲ來ス場合アルカ故ニ刑法ハ第三十四條及ヒ第三十五章ニ於テ此等ノ犯罪ヲ規定シタル所以ナリ。

本罪ヲ認メタル理由



### 第一節 名譽ニ對スル罪

刑法ハ第三十四章ニ名譽ニ對スル罪ト題シ(一)名譽毀損罪ト(二)侮辱罪トヲ規定セリ、即チ左ノ如シ。

#### 第三十四章 名譽ニ對スル罪

第二百三十條 公然事實ヲ摘示シ人ノ名譽ヲ毀損シタル者ハ其ノ事實ノ有無ヲ問ハス一年以下ノ懲役若クハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

死者ノ名譽ヲ毀損シタル者ハ誣罔ニ出ツルニ非サレハ之ヲ罰セス

第二百三十一條 事實ヲ摘示セスト雖モ公然人ヲ侮辱シタル者ハ拘留又ハ科料ニ處ス

第二百三十二條 本章ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

#### 第一 名譽毀損罪(第二百三十條)

本罪ハ公然事實ヲ摘示シ以テ他人ノ名譽ヲ毀損スルニ因テ成立ス。

本罪ノ要件ヲ分説スレハ左ノ如シ。

一 法益 本罪ノ法益ハ他人ノ名譽ナリ。名譽トハ何ソ普通ノ意味ニ於ケ

名譽毀損罪ノ  
憲義及ヒ要件

名譽トハ何ソ

ル名譽トハ特定ノ人カ或職業若クハ身分地位ヲ有スルカ爲メニ世人ヨリ尊敬セララルル價值ヲ謂フ、故ニ此意義ニ於テハ一般ニ社會ヨリ排斥セララルル性行アル者ハ名譽ナシ。然レトモ凡ソ人ハ生レナカラニシテ法律上人タルノ品位即チ人格ヲ有スルモノナリ是レ人トシテノ社會上ノ價值ナリ故ニ何人ト雖モ其社會上ノ價值ニ關シテ他人ヨリ貶侮セラレサルノ權利ヲ有スルモノナリ、是レ所謂名譽權ナリ從テ人ハ總テ貴賤貧富長幼其他職業ノ區別ナク此名譽權ヲ有スルモノナリ、果シテ然ラハ他人ニ對シテ普通ノ意味ニ於ケル名譽又ハ人格ニ關シテ世人ノ判斷ヲ誤ラシムルカ如キ行爲ヲ爲スハ明カニ他人ノ名譽ヲ侵害スルモノナリ。

要スルニ所謂名譽トハ普通ノ意味ニ於ケル名譽及ヒ名譽權ヲ總稱スルモノト解スヘキモノナリ。

二 行爲 行爲ハ(一)公然事實ヲ摘示スルコトヲ要ス。公然トハ不定多數人ニ認知セラレ得ル状態ナリ。事實ヲ摘示スルトハ或事實ヲ表示スルノ意ニ外ナラス、摘示セララルル事實ハ惡事醜行其他名譽ヲ毀損スルニ足ルヘキ



一切ノ事實ヲ包含シ其事實ノ眞實ナルト虚偽ナルトヲ問ハス又其事實カ被害者ノ行爲ニ關スルコトヲモ要セス單ニ被害者ノ名譽ヲ毀損スルニ足ルヘキ事實タルヲ以テ充分トス尙ホ其事實ノ摘示ハ如何ナル方法ヲ以テスルヲ問ハス即チ言語文章等ニ依ルモ雜劇偶像ヲ作爲スルモ亦タ可ナリ

(二) 人ノ名譽ヲ毀損シタルコトヲ要件トス。名譽ヲ毀損スルトハノノ社會的價值ヲ侵害スルヲ謂フ換言スレハ人ノ人格ヲ傷クル虞アル事實ヲ公然表示スル以上ハ世人カ具體的ニ被害者ニ對シテ不利益ノ判斷ヲ爲スニ至リタルト否トヲ問ハス本罪ヲ構成ス。

(三) 行爲ハ特定ノ人ニ對スルコトヲ要ス然レトモ被害者ヲ個々ニ指名スルヲ要セス要スルニ毀損セラレ、者ノ何人ナルヤヲ推知シ得ヘキヲ以テ充分トス故ニ集合的ノ表示例ヘハ某學校ノ教師連某警察署ノ巡查連某町ノ米商ノ如キモ妨ケナシ、

(四) 死者ノ名譽ノ毀損ニ付テハ誣罔ニ出テタルコトヲ要件トス。誣罔トハ事實相異ノ事ヲ虚構シテ表示スルヲ謂フ故ニ摘示セル事實カ眞實ナルトキハ如何ナル場合ト雖モ本罪ヲ構成セス蓋此制限ヲ設ケタル理由ハ若シ眞實ノ事

誣罔トハ何ソ

實ヲモ罰スルトセハ歴史ハ眞實ヲ要ストノ公益ニ反スルニ至ルヘケレハナリ是レ死者ノ名譽毀損ト生者ノ名譽毀損ト異ナル要點ナリ。

三 故意 本罪ノ故意ハ公然事實ヲ摘示スルコトノ認識及ヒ其結果人ノ名譽ヲ毀損スルコトノ認識アルコトヲ必要トス但新聞紙又ハ文書圖書ノ出版ニ依リテ人ノ名譽ヲ毀損シタル場合ニ於テハ其事實カ私行ニ涉ルトキハ常ニ處罰セラレ、コトヲ注意スヘシ(詳細ハ出版法第三十一條及ヒ新聞紙法第四十五條參照)

第二 侮辱罪(第二百三十一條)

本罪ハ公然人ヲ侮辱スルニ因テ成立ス。

左ニ要件ヲ説明スヘシ。

一 本罪ノ行爲ハ公然人ヲ侮辱スルニ在リ。公然ノ意義ニ付テハ前段ニ説明セリ。侮辱トハ罵詈訾弄其他ノ行爲ニ依リテ人ヲ輕蔑スルヲ謂フ換言スレハ他人ノ名譽即チ體面ヲ蹂躪スルヲ謂フ而シテ侮辱行爲ノ方法ニ付テハ法律上何等ノ制限ナキヲ以テ形容ヲ以テスルト言語又ハ文章ヲ以テ

侮辱罪ノ意義及ヒ要件

侮辱トハ何ソ



或行為カ侮辱  
ト爲ルヤ否ヤ  
ハ各場合ニ付  
テ決スヘキモ  
ノナリ

侮辱ト名譽毀  
損トノ區別

スルトヲ問ハス、要ハ被害者ノ體面ヲ蹂躪スルニ足ルヘキ事實アリヤ否ヤニ在リ、故ニ一定ノ行為カ甲ニ對シテハ侮辱ト爲ルモ乙ニ對シテハ侮辱ト爲ラサル場合アリ、之ヲ判斷スルニハ須ラク被害者及ヒ加害者ノ身分地位職業親疎其他ノ事情ヲ斟酌セサルヘカラス、例ヘハ「貴公」「貴様」ナル語カ親子友人間又ハ主僕ノ間ニ於テハ侮辱ト爲ラサルモ貴顯ノ人ニ對シテハ侮辱ト爲ルカ如シ。次ニ本罪ハ事實ノ摘示ヲ要件トセサルナリ、何トナレハ名譽毀損ノ場合ハ第三者ニシテ被害者ノ社會的地位ニ關シ不利益ナル判斷ヲ爲サシメ以テ被害者ノ名譽ヲ毀損スルニ在ルモ侮辱ハ加害者自身被害者ノ體面ヲ凌辱スルニ在ルカ故ニ名譽毀損罪ノ如ク敢テ事實ノ摘示ヲ必要トセス是レ法律ニ事實ヲ摘示セスト雖モ云々ト規定シ其意義ヲ明カニセル所以ナリ、是レ名譽毀損罪ト區別スヘキ主要ナル點ナリ、然レトモ事實ノ摘示ニ依ル侮辱罪ノ成立ヲ否定スルモノニアラス唯事實ヲ摘示シ公然人ヲ侮辱スルトキハ當然名譽毀損罪ヲ構成スヘキカ故ニ侮辱罪トシテ罰セサルノミ、其理由ハ該侮辱ハ名譽毀損罪ニ吸收セラルルモノト認

ムルニ因ルナリ。

二 故意 本罪ノ故意ハ公然人ヲ輕蔑スルノ舉動ヲ認識スルニ在リ、其動機ノ如何ハ故意ノ成否ニ關係ナシ。

第三 刑罰 名譽毀損罪ハ一年以下ノ懲役若クハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ侮辱罪ハ拘留又ハ科料ニ處ス、而シテ何レモ親告罪ナルカ故ニ被害者又ハ代理人ノ告訴アルニ非サレハ處罰スルヲ得ス。

練習問題

(一) 名譽毀損罪ヲ説明スヘシ。  
大正十五年行政科試験  
大正十三年第五十二號試験  
大正十四年外交科試験

(二) 死者ノ名譽ヲ毀損スル罪ノ成立ヲ論ス。大正二年辯護士試験

(解説) 左ニ要件ヲ分説スヘシ。

一 法益及ヒ被害者 本罪ニ於ケル法益及被害者ハ何人ナルカ刑法ハ死者ノ名譽ヲ毀損シタル者ハ云々ト規定スルモ元來死者ハ人格者ニ



アラス故ニ名譽權ノ主體タルヲ得ス果シテ然ラハ所謂死者ノ名譽ヲ毀損スルトハ何ソ此點ニ付テハ學說ノ岐カルル所ナルモ予輩ハ本罪ハ死者ノ生前ニ於ケル名譽ヲ毀損シ延テ遺族ノ死者ニ對スル宗教的感情ヲ侵害スルモノト解スルヲ以テ本罪ノ被害者ハ遺族ナリ從テ遺族ナキ死者ニ對スル名譽毀損ハ本罪ヲ構成セス。

二 行爲 本罪ノ行爲ハ公然事實ヲ摘示スルコトヲ要スルハ勿論ナリモ尙ホ誣罔ニ出テタルコトヲ要件トス、誣罔トハ虛偽ノ事實ヲ摘示スルヲ謂フカ故ニ眞實ノ事實ヲ摘示スルトキハ本罪ヲ成立セス。要之本罪ハ一般名譽毀損罪ノ要件ノ外誣罔ニ出テタルコトヲ以テ條件トス。

(二) 名譽毀損罪ト侮辱罪トノ區別ヲ説明スヘシ。  
明治三十五年判檢事試驗  
大正四年警官練習所試驗

(解説) 本問ニ付テハ前第一節ノ第二侮辱罪ノ説明中ニ詳説セルヲ以テ參

照スヘシ。

(三) 甲ノ妻タル乙カ丙ト姦通セリト公衆ノ面前ニテ表示スルトキハ甲ニ對シテ名譽毀損罪ヲ構成スルヤ。

(解説) 本問ハ甲ヲ名譽毀損罪ノ被害者ト見ルコトヲ得ルヤ否ヤニ因テ結論ヲ異ニスヘシ如何ナル決定ヲ爲テテ適當トスヘキヤハ本文ノ説明ヨリ類推スヘシ。

(四) 某警察署ノ秃頭ノ巡查カ收賄セリト公表スルトキハ名譽毀損罪ヲ構成スルヤ。

(解説) 本問ハ秃頭ノ巡查ナル語カ被害者ノ表示トシテ適當セルヤ否ヤニ因テ結論ヲ異ニス如何ナル決定ヲ與フヘキヤハ本文ノ説明ヨリ類推スヘシ。

(五) 公衆ノ面前ニテ債務者ニ對シ履行ヲ催促スル時ハ侮辱罪ヲ構成スルヤ。  
(解説) 單純ナル催促ハ侮辱罪ヲ構成セサルモ人身攻撃ニ涉ル事項ヲ附加スルトキハ侮辱トナルヘシ。



### 第二節 信用及ヒ業務ニ對スル罪

本罪ヲ認メタル理由

信用及ヒ業務ハ吾人ノ經濟的活動ノ基礎ニシテ兩者互ニ車ノ兩輪鳥ノ兩翼ノ如キ密接ノ關係ヲ有シ信用ノ増加ハ業務ノ發展ヲ來シ業務ノ不振ハ信用ヲ失墜スルノ結果ヲ生スルカ故ニ刑法ハ特ニ本罪ヲ設ケテ吾人ノ經濟的生

活ノ安全ヲ保護セル所以ナリ。

第三十五章 信用及ヒ業務ニ對スル罪  
第二百三十三條 虛偽ノ風説ヲ流布シ又ハ偽計ヲ用ヒ人ノ信用ヲ毀損シ若クハ其業務ヲ妨害シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス  
第二百三十四條 威力ヲ用ヒ人ノ業務ヲ妨害シタル者亦前條ノ例ニ同シ

右ノ規定ニ依レハ本罪ハ(一)信用毀損罪(二)業務妨害罪トヲ包含ス便宜上分テ之ヲ論セン。

#### 第一 信用毀損罪(第三十三條)

本罪ハ虛偽ノ風説ヲ流布シ又ハ偽計ヲ用ヒ人ノ信用ヲ毀損スルニ因テ成立ス。

信用毀損罪ノ意義及ヒ要件

信用トハ何ソ

左ニ要件ヲ分説スヘシ。

一 法益 本罪ノ法益ハ人ノ信用ナリ。信用トハ人ノ經濟的方面ニ於ケル名譽ナリ、換言スレハ人ノ財産上ノ義務ノ履行ニ付テノ評價ナリ、尙ホ平易ニ言ヘハ人カ金一圓ノ債務ヲ履行シ得ルト世人ヨリ判斷セラルレハ其人ハ一圓ノ信用アリ、十圓ノ債務ノ履行ニ差支ナシト評價セラルレハ其人ハ十圓ノ信用アリ百圓千圓萬圓等信用ノ程度ニ差アリ故ニ予輩カ信用ハ一種ノ名譽ナリト謂フ所以ナリ。

二 行爲 行爲ハ信用ノ毀損ナリ。即チ手段トシテ虛偽ノ風説ヲ流布シ又ハ偽計ヲ用ヒタルコトヲ要ス。虛偽ノ風説ヲ流布ストハ事實無根ノ風評ヲ多數人ノ間ニ傳播スルヲ謂フ、例ヘハ某米商ハ南京米ヲ混合ス、某銀行ノ重役ハ大金ヲ消費セリト説クカ如シ。偽計トハ人心ヲ誘惑スルニ足ルヘキ權謀術數ヲ謂フ、故ニ詐欺ノ計略ハ偽計タルモ單純ナル詐言ヲ包含セス、偽計ノ結果トシテ必スシモ人ヲ欺罔スルコトヲ要セス從テ贈與約束ノ如キ方法モ亦人ヲ眩惑スルニ足ルトキハ偽計ナリ、例ヘハ商店ノ番當ニ金ヲ



本罪ハ所謂  
動犯ニシテ  
果犯ニシテ  
カ故ニ非サ  
損ノ結果ヲ  
トナサルモ  
トナサルモ  
トナサルモ

業務妨害罪ノ  
憲義及ヒ要件

所謂業務中ニ  
ハ公務ヲ除外  
ス

刑法各論 第一篇 個人ノ法益ニ對スル罪 第四章 名譽信用及ヒ業務ニ對スル罪 第二節 信用及ヒ業務ニ對スル罪

與ヘテ其店ヲ去ラシメ營業停止ノ已ムナキニ至ラシムルカ如キモ偽計ナリ、尙ホ名譽毀損罪ト同シク特定ノ人ニ對スルコトヲ要ス。而シテ本罪ノ成立ニハ人ノ信用ヲ害スル虞アル虛偽ノ風説ヲ流布シ又ハ偽計ヲ用フルコトヲ必要トスルモ具體的ニ信用毀損ノ結果ヲ生シタルコトヲ必要トセス。

三 故意 本罪ノ故意ハ虛偽ノ風説ヲ流布又ハ偽計ヲ用フルノ認識及ヒ其結果信用ヲ毀損スルノ認識アルコトヲ要ス。即チ虛偽ノ風説ノ流布又ハ偽計ノ使用ト信用毀損トノ間ニ因果關係ノ認識アルコトヲ要ス。

第二 業務妨害罪(第二百三十三條後段)

本罪ハ虛偽ノ風説ヲ流布シ若クハ偽計威力ヲ用ヒテ人ノ業務ヲ妨害スルニ因テ成立ス。

一 法益 本罪ノ法益ハ人ノ業務ナリ。業務トハ農工商ヲ始メトシテ苟モ人カ屢々繰返シテ行フ事務ノ一切ヲ包含ス然レトモ公務ノ執行ヲ妨害スル行爲ハ別種ノ犯罪ヲ構成スルカ故ニ公務員ノ業務ハ茲ニ所謂業務ヨリ

除外スヘキモノトス。

二 行爲 本罪ノ行爲ハ業務執行ノ妨害ナリ。即チ其妨害ノ手段トシテ虛偽ノ風説ヲ流布シ、偽計又ハ威力ヲ使用スルコトヲ要ス、前二者ニ付テハ既ニ説明セルカ故ニ茲ニ贅セス。所謂威力トハ人ノ意思ヲ抑壓シ得ヘキ勢力ナリ有形タルト無形タルトヲ問ハス故ニ暴行、脅迫、恐喝、權力ノ濫用等苟モ人ヲシテ意思ノ自由ヲ抑壓スルニ足ルヘキモノハ茲ニ所謂威力ナリ、而シテ右三種ノ手段ヲ用ヒテ業務ヲ妨害シタルコトヲ要ス。業務ヲ妨害スルトハ業務ノ執行ヲ妨止スルノミナラス業務ノ發展上障害ト爲ルヘキ行爲ヲ總稱ス、故ニ例ヘハ某銀行ハ破産ニ瀕セリトノ流言ヲ放チテ預金者ヲシテ一時ニ取付ヲ爲サシメ又ハ舊主人カ其地位ヲ惡用シテ營業ニ支障ヲ生セシムルカ如キ場合ヲモ包含スヘシ。

終リニ一言スヘキハ本罪ノ行爲ハ勿論違法ナルコトヲ要スルカ故ニ法律上適法ニ爲シ得ル行爲ナルトキハ業務妨害ノ結果ヲ生スルモ本罪ヲ構成セス、從テ例ヘハ執達吏カ強制執行ヲ爲シテ商品ヲ差押ヘタルカ爲メ營業

業務ノ妨害ト  
ハ何ゾ

刑法各論 第一篇 個人ノ法益ニ對スル罪 第四章 名譽信用及ヒ業務ニ對スル罪 第二節 信用及ヒ業務ニ對スル罪



妨害ノ結果ヲ來シタルカ如シ

### 第三 刑罰 本罪ノ刑罰ハ三年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ナリ。

#### 練習問題

(一) 名譽毀損罪ト信用毀損罪トノ區別如何。 大正九年辯護士試驗

(解説) 兩者ノ區別ハ第一法益ヲ異ニス即チ一ハ廣ク名譽ト謂ヒ他ハ信用ト稱ス信用ハ名譽ノ一種ナリト雖モ信用ハ人ノ經濟的方面ニ於ケル名譽ナリ第二ニ行爲ヲ異ニス即チ手段トシテ表示スル事實カ眞實タルト否トヲ問ハス公然指示スルトハ名譽毀損罪ヲ構成スルモ信用毀損罪ハ虛偽ノ風説ヲ流布シ又ハ偽計ヲ用フルコトヲ要ス以上要スルニ兩者ハ法益及ヒ行爲ニ因テ區別スヘキモノト是レ根本的ノ差異ナリ其他些細ノ點ニ於テ差異ナキニ非サルモ特ニ掲クルノ價值ナキヲ以テ省略ス。

(二) 同盟罷工ハ信用毀損又ハ業務妨害罪ヲ構成スルヤ。

明治四十三年中央大學試驗  
明治四十四年早稻田大學試驗

(解説) 本問ハ一概ニ之ヲ論スルコトヲ得ス何トナレハ信用毀損又ハ業務

妨害罪ノ成立ニハ行爲ノ違法ナルコトヲ要スルハ勿論ナルカ故ニ法律上適法ニ爲シ得ル行爲ナルトキハ信用毀損又ハ業務妨害ノ結果ヲ生スルモ本罪ヲ構成セス。按スルニ彼ノ同盟罷工ノ如キモ日々ノ勞務ニ對シテ賃銀ヲ受クル者ノ如ク何時ニテモ從業スルト將タ休業スルトカ本人ノ隨意ニ屬スルトキハ縱令數人共同シテ休業スルモ必スシモ違法ナリト謂フヲ得ス然レトモ暴行又ハ脅迫ノ手段ヲ用ヒテ同盟罷工ヲ爲シタルトキハ業務妨害罪ノ要件ヲ具備スルコト疑ナシト雖モ同盟罷工ニ付テハ治安警察法ニ特別ノ罰則アルカ故ニ刑法ノ適用ナキモノト解スヘキナリ反對說ハ刑法上ノ罪ヲ構成スト論スルモ正當ナラス。

## 第五章 住居及ヒ秘密ヲ侵スノ罪

住居及ヒ秘密ヲ侵スノ罪ハ前第三章第二節ニ說明セル單純脅迫罪ト共ニ個人ノ權利カ國家ノ保護ニ因テ安全ナリトノ信念ヲ破ルモノニシテ所謂法律上ノ平穩ヲ害スル罪ノ範圍ニ屬ス故ニ公共ノ安寧ニ對スル罪ト謂ハンヨリ



ハ寧ロ個人ノ法益ヲ侵害スル罪ト認ムルヲ穩當ナリトス而シテ單純脅迫罪  
ハ既ニ説明セルヲ以テ茲ニハ住居及ヒ秘密ヲ侵スノ罪ニ付テ説明スヘシ。

### 第一節 住居ヲ侵スノ罪

凡ソ吾人ハ自己ノ住居及ヒ適法ニ看守スル場所ニ於テ自己ノ意思ニ反シ不  
法ニ侵入セラレサルノ權利ヲ有ス是レ憲法ノ保障スル所ニシテ住居不可侵  
權又ハ家宅支配權ト稱ス(憲法第二十五條第二)故ニ刑法ニ於テモ特ニ本罪ヲ設ケテ之ヲ  
保護セル所以ナリ。

#### 第十二章 住居ヲ侵ス罪

##### 第三十條

故ナク人ノ住居又ハ人ノ看守スル邸宅建造物若クハ艦船ニ侵入シ  
又ハ要求ヲ受ケテ其場所ヨリ退去セサル者ハ三年以下ノ懲役又ハ五十圓以下  
ノ罰金ニ處ス

##### 第三十一條

故ナク皇居、禁苑、離宮又ハ行在所ニ侵入シタル者ハ三月以上五年  
以下ノ懲役ニ處ス

神宮又ハ皇陵ニ侵入シタル者亦同シ

##### 第三十二條

本章ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

住居ヲ侵スノ  
罪ハ一名家宅  
侵入罪トモ稱  
ス

右ノ規定ニ依レハ本罪ニハ(一)普通ノ侵入罪ト(二)皇居禁苑等神聖ナル場所ニ  
侵入スル罪トアリ、予輩ハ便宜上一括シテ本罪ニ關スル規定ヲ説明スヘシ。  
先ツ本罪ヲ定義ヲ示セハ左ノ如シ。

本罪ハ不當ニ他人ノ家宅支配權ヲ侵害スルニ因テ成立スル犯罪ナリ。

#### 第一 本罪ノ要件

一 法益及ヒ客體 本罪ノ法益ハ家宅ノ支配權或ハ家宅ノ平穩權ナリ、客體

ハ之ヲ二種ニ區別ス。其一ハ人ノ住居又ハ人ノ看守スル邸宅建造物若ク

ハ艦船ナリ。人ノ住居トハ何ソ學說ノ岐カルル所ナレトモ予輩ハ廣ク人

ノ日常寢食ノ休安ヲ享受スル爲メ區劃サレタル一切ノ場所ヲ意味スルモ

ノト解ス、故ニ土窖岩窟假小屋タルト普通ノ建物タルトヲ問ハス、其他旅人

宿下宿屋ノ客室等ヲモ包含ス、而シテ時ノ長短ハ何等ノ關係ナシ。人ノ看

守スル邸宅建造物艦船ハ人ノ住居タラサル場合ニ於テ住居ト同様ノ保護

ヲ享クルモノトス。所謂看守トハ保管ノ意義ニ非スシテ人ノ直接看守ト

解スヘキナリ、但看守スル方法ハ現ニ看守者アルト其他ノ方法例ヘハ鎖鑰

家宅侵入罪ノ  
要件

人ノ住居トハ  
何ソ



ヲ以テ閉鎖スル場合タルトヲ問ハス、邸宅トハ家屋及ヒ之ニ屬スル圍繞地ヲ包括スルナリ。建造物トハ邸宅ニ屬スル家屋ヲ除キタル以外ノ建物ヲ指スモノト解ス例ヘハ學校圖書館等ノ如シ。艦船トハ軍艦及ヒ其他ノ船舶ヲ總稱ス。其二ハ皇居禁苑離宮又ハ行在所神宮皇陵ナリ、此等ノ意義ニ付テハ明カナルカ故ニ敢テ説明セス。

二 行爲 本罪ノ行爲ハ侵入若クハ要求ヲ受ケテ其場所ヨリ退去セサルコトヲ要ス。侵入トハ不當ニ法律上保護セラレタル場所ニ入ルヲ謂フ、法律ハ故ナク入ルコトヲ要件トス。故ナクトハ家宅ヲ主宰スル者ノ意思ニ反シタルヲ謂フ、不當ト同意義ナリ、但侵入カ不法タルコトヲ要スルハ一般原則ノ適用上當然ニシテ不法ナラサル場合ニ罪ヲ構成セサルハ「故ナク」ト謂フ特別要件ヲ缺クカ爲メニ非サルナリ。故ニ不法ナラサルトキ例ヘハ豫審判事ノ爲ス家宅搜索ノ如キハ家宅主宰者ノ意思ニ反スルモ本罪ヲ構成セス。要求ヲ受ケテ退去セストハ初メ承諾ヲ得テ入りタル者カ退去ノ命ヲ受ケナカラ其場所ニ留マルヲ謂フ、舊刑法ハ不退去ノ場合ノ規定ナクシ

故ナクトハ不當ト同意義ニシテ不法ナル

如何ナル場合ニ家宅侵入ノ未遂トナルカ

テ不都合ナリシヲ以テ新刑法ハ之ヲ補充セリ、從テ例ヘハ債權者カ債務者ヨリ退去ノ要求ヲ受ケナカラ居催促ヲ爲スカ如キハ本罪ヲ構成スヘシ。次ニ本罪ノ物體中、皇居禁苑等ヲ侵ス罪ニ付テハ其侵入ノミヲ罰シ不退去ヲ罰セス、是レ其必要ナキニ由ルナリ。

三 故意 本罪ノ故意ハ犯罪事實ノ認識ノ外不當ニ侵入スルコトノ觀念アルコトヲ必要トス、從テ意思ニ反セサルコトヲ觀念スルトキハ故意ヲ阻却スルカ故ニ本罪ヲ構成セス、而シテ侵入及ヒ不退去ノ目的如何ハ本罪ノ成否ニ關係ナシ。

第二 本罪ノ未遂ハ之ヲ罰ス。然ラハ本罪ハ犯人ニ於テ如何ナル舉動アリタルトキハ著手ト爲ルヤニ付キ一言スヘシ、即チ行爲者ニ於テ家宅支配權ヲ侵害スル舉動アリタルトキハ直チニ本罪ノ著手トナリテ未遂罪ヲ構成ス。

第三 刑罰 普通ノ侵入罪ハ三年以下ノ懲役又ハ五十圓以下ノ罰金ニ皇居禁苑其他ノ侵入罪ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

練習問題



(一) 竊盜ノ目的ヲ以テ門戸ヲ踰越シ人ノ邸内ニ侵入シ正ニ家宅ニ入ラントシタル際家人ニ逮捕セラレタリ犯人ノ處分如何。

大正四年日本大學模範試驗

(解説) 本問ニ付テハ(一)家宅侵入罪ト竊盜ノ未遂トヲ認メ第五十四條ノ後段ヲ適用シテ處分スヘシトノ説ト(二)竊盜ノ未遂ノミヲ以テ處分セントスル説ト(三)家宅侵入罪ノミヲ以テ處分セントスル説トヲ想像スルヲ得ヘシ予輩ノ所信ニ依レハ家宅ニ侵入シテ竊盜ヲ爲ス場合ニハ家宅侵入ハ竊盜罪ノ要素ニ屬セスシテ而モ竊盜ノ手段タル行爲ナルカ故ニ竊盜行爲カ其著手以上ニ發展シタルトキハ第五十四條ヲ適用シテ處分スルヲ相當ト信ス然ルニ本問ヲ按スルニ竊盜ノ目的ヲ以テ家宅ニ入ラントスル際家人ニ逮捕セラレタリトアルカ故ニ犯人ノ行爲ハ竊盜ノ豫備ノ階段ニ屬シ未タ以テ竊盜ノ著手ト爲ラサルカ故ニ竊盜罪ヲ構成セス然レトモ犯人ハ門戸ヲ踰越シ人ノ邸内ニ侵入シタルカ故ニ明カニ家宅侵入罪ノ要件ヲ具備スルモノトス依テ本問ハ家宅侵入ノ一罪ヲ以テ處分

スルヲ相當トス。

(二) 債權者カ債務ノ履行ヲ催告スルニハ債務者ノ意思ニ反シ其邸宅ニ入ルモ正當ナリト信シテ入りタルトキハ本罪ヲ成立セサルカ。

(解説) 本問ハ前掲故意ノ説明ヨリ類推スルニ因テ明瞭ナルカ故ニ特ニ決定ヲ與ヘス。

### 第二節 秘密ヲ侵ス罪

本罪ハ他人ノ秘密ヲ害スル罪ニシテ前節ニ述ヘタル住居ヲ侵ス罪ト相並ヒテ内事不可侵權ニ對スル犯罪ナリ。凡ソ吾人ハ自己ノ内事ヲ他人ヨリ暴露セラルルコトナク之ヲ平和ニ處理スルニ於テ利益(内事不可侵ノ利益)ヲ有ス殊ニ信書ノ秘密ハ憲法ノ保障スル權利ナリ(憲法第二十六條第二)是レ刑法ニ於テ本罪ヲ規定セル所以ナリ。

本罪ヲ認メタル立法上ノ理由

#### 第十三章 秘密ヲ侵ス罪

第三百三十三條 故ナク封緘シタル信書ヲ開披シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ二

刑法各論 第一篇 個人ノ法益ニ對スル罪 第五章 住居及ヒ秘密ヲ侵スル罪

第二節 秘密ヲ侵ス罪



百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百三十四條 醫師、藥劑師、藥種商、產婆、辯護士、辯護人、公證人又ハ此等ノ職ニ在リシ者故ナク其業務上取扱ヒタルコトニ付キ知得タル人ノ秘密ヲ漏泄シタルトキハ六月以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス  
宗教若クハ禱祀ノ職ニ在ル者又ハ此等ノ職ニ在リシ者故ナク其業務上取扱ヒタルコトニ付キ知得タル人ノ秘密ヲ漏泄シタルトキ亦同シ  
百三十五條 本章ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

右ノ規定ニ依レハ本罪ハ(一)信書ノ秘密ヲ侵ス罪ト(二)陰私漏泄ノ罪トノ二ニ分ツコトヲ得ヘシ

第一 信書ノ秘密ヲ侵ス罪(第三百三條)

信書ノ秘密ヲ侵ス罪

本罪ハ故ナク封緘シタル他人ノ信書ヲ開披スルニ由テ成立ス。左ニ要件ヲ分説スヘシ。

一 物體 本罪ノ物體ハ封緘シタル他人ノ信書ナリ。信書トハ特定ノ人ヨリ特定ノ人ニ對シテ意思ヲ傳達スル爲メ使用セラルル文書ヲ謂フ、換言スレハ信書トハ通信文書ナリ、故ニ通信文書タル以上ハ其内容ノ如何ヲ問ハス、即チ普通ノ音信文タルト情郎情婦間ニ用フル艶文ノ如キモノタルトヲ

問ハス、而シテ信書ニハ封緘セルモノト然ラサルモノ(如シ書ノ)トノ區別アリト雖モ本罪ノ物體タルモノハ封緘セルモノニ限ル。封緘シタル信書トハ信書ニ特別ノ裝置ヲ爲シ之ヲ除去スルニ非サレハ外部ヨリ其内容ヲ閱覽スルコト能ハサルモノヲ謂フ、封緘ノ方法ニ付テハ法律上何等ノ制限ナキカ故ニ糊又ハ蠟ヲ以テ、封シタルト絲ヲ以テ縫ヒタルトヲ問ハス然レトモ單ニ封紙ヲ折り曲クルニ止マルトキハ封緘アリタルモノト謂フヲ得ス又封緘シタル物ナリト雖モ信書ニ非サル小包郵便物ノ如キハ本罪ノ物體タラス、次ニ郵便官署ノ取扱中ニ屬スル信書ハ郵便法ニ於テ保護セラルルモノニシテ本罪ノ物體タラス。

二 行爲 行爲ハ故ナク開披スルニアリ。開披トハ内容ヲ閱覽スルコトヲ得ル程度ニ於テ封緘ヲ除去スルヲ謂フ。本罪ハ開披ノ行爲アルトキハ假令信書ノ秘密ヲ害スルニ至ラサルモ本罪ノ構成ヲ妨ケサルト同時ニ開披ノ行爲ナキトキハ假令信書ノ秘密ヲ害スルモ(例ハ透視)尙ホ本罪ヲ構成スルモノニ非ス、是レ法文ニ於テ開披ノ行爲ヲ以テ犯罪構成ノ要件ト爲シ

實際ニ於テ信書ノ内容ヲ知ルコトハ本罪ノ要件ニ非ス



秘密侵害ノ結果ヲ以テ要件ト爲ササレハナリ、換言スレハ刑法ハ封緘シタル信書ヲ以テ秘密ニ屬スルモノト看做シ之ヲ開披スル行爲ヲ處罰スルナリ、而シテ開披ハ故ナキコトヲ要ス故ナシトハ權利者ノ意思ニ反スルノ義ナリ、信書ノ到達前ハ發信者到達後ハ受信者ヲ以テ權利者ト爲スヲ通説トス。

三、故意 本罪ノ故意ハ目的物カ封緘シタル信書タルコトヲ認識スルノ外開披カ不當ナルコトノ觀念ヲ必要トス。

第二 秘密ヲ漏泄スル罪(第四百三十四條)

秘密ヲ漏泄スル罪

本罪ハ特定ノ業務ニ在ル者又ハ之ニ在リシ者カ其職務上知り得タル他人ノ秘密ヲ漏泄スルニ因テ成立ス。故ニ本罪ノ主體ハ醫師、藥劑師、藥師、商、產婆、辯護士、辯護人、公證人、宗教若クハ禱祀ノ職ニ在ル者又ハ是等ノ職ニ在リシ者ニ限ル、故ニ右列記以外ノ者ハ本罪ノ主體タルヲ得ス。

左ニ本罪ノ要件ヲ説明スヘシ。

一 法益 本罪ノ法益ハ一人ノ秘密ナリ、秘密トハ一人又ハ僅少ノ人ノミカ

秘密トハ何ソ

知り得タル事項ニシテ之ヲ他ニ知ラシメサルヲ利益ナリトスルモノナリ。故ニ一般ノ人カ秘密ナランコトヲ欲シ且同時ニ其ノ本人ニ於テ之ヲ他ニ知ラシメサルヲ利益ナリトスル事項ナルコトヲ要ス。而シテ茲ニ所謂秘密ハ業務上知り得タルモノタルヲ必要トス、其業務上知り得タル事項ナル以上ハ本人ヨリ告ケラレタルト將タ業務上ノ鑑識ニ依リ知り得タルトヲ區別セス。

二 行爲 行爲ハ故ナク他人ノ秘密ヲ漏泄スルニアリ。漏泄トハ他人ノ秘密ヲ御三者ニ告クルヲ謂フ、其ノ要件トシテ(一)其事項カ未タ世ニ知レサルコト(二)未タ知ラサル人ニ向ヒテ之ヲ告クルコトヲ要ス、又其方法ノ如何ヲ問ハス、故ニ文書又ハ言語ヲ以テスルト將タ容態ヲ以テスルトニ制限ナシ、故ナクトハ本人又ハ監督者ノ意思ニ反シテノ義ナリ、他人ノ秘密ヲ告クルコトカ適法ナルトキハ一般ノ原則上犯罪ヲ構成セサルコト明白ナリ。例ヘハ醫師カ法律上ノ義務トシテ傳染病者ヲ官廳ニ届出ツル場合ノ如シ。

三 故意 本罪ノ故意ハ他人ノ秘密ヲ漏泄スルコトノ認識アル外其漏泄カ



本人ノ意思ニ反スルコトノ觀念ヲ必要トス、從テ行爲者カ秘密タル事情ヲ知ラス又本人ノ承諾アリタルモノト誤信シテ告クルモ本罪ヲ構成セス。

**第三 刑罰** 刑罰ハ信書ノ秘密ヲ侵ス罪ハ一年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處シ他人ノ秘密ヲ漏泄スルノ罪ハ六月以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス、而シテ本章ノ罪ハ親告罪ナルカ故ニ被害者ノ告訴ヲ待テ之ヲ論ス蓋シ本罪ヲ親告罪ト爲シタルハ場合ニ依リテハ訴追ノ爲メ被害者ハ犯罪ニ依リ蒙リタル損害ヨリモ更ニ大ナル損害ヲ受クルコトアルヘキニ因ル。

**練習問題**

(一) 封緘シタル他人ノ信書ヲ公然開披シテ人ノ名譽ヲ毀損シタル者ノ刑法上ノ責任如何。

(解説) 本問ハ信書開披罪ト名譽毀損罪トノ二ツノ構成要件ヲ具備スルカ故ニ論者或ハ信書開披罪ヲ以テ處分スヘシト説明シ或ハ名譽毀損罪ノミヲ以テ處分スヘシト論スル者アリ、然レトモ予輩ハ本問ノ如キハ明カニ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸ルルモノナルヲ以テ刑法第五十四

條ヲ適用シテ其最モ重キ刑ヲ以テ處斷スヘキモノト信ス、因テ第三百三十三條ト第二百三十條トノ規定ヲ比照スルニ第二百三十條ヲ以テ重シト爲スヘキカ故ニ第二百三十條ニ依リ處斷スヘキモノトス。

(二) 父兄カ自己ノ子女又ハ妹ヨリ發シ又ハ之ニ宛テタル信書ヲ開披シタルトキノ刑法上ノ責任如何。

(解説) 父兄カ自己ノ子女又ハ妹ノ信書ヲ其者ノ承諾ナクシテ開披スルハ刑法ノ條文ヨリ見ルトキハ信書開披罪ノ構成要件ヲ具備スルカ如シト雖モ元來本罪ハ一般ノ原則上違法ナルコトヲ要スルカ故ニ父兄カ自己ノ子女又ハ妹ニ對スル監督權又ハ懲戒權ノ行使トシテ其行書ヲ開披スルハ適法ニシテ行爲ノ違法性ヲ阻却スルカ故ニ犯罪ヲ成立セス、依テ本問ハ之ヲ無罪ト解スルヲ正當ト信ス。

(三) 醫師又ハ產婆等カ他人ノ秘密ヲ漏泄スルニアラサレハ自己カ刑事上ノ訴追ヲ受クルノ虞アル場合ニ於テモ他人ノ秘密ヲ漏泄スルトキハ秘密漏泄罪ヲ構成スルヤ。



(解説) 蓋シ秘密漏泄罪ノ成立ニハ醫師產婆等カ業務上知り得タル他人ノ秘密ヲ故ナク漏泄シタルコトヲ要ス。從テ其秘密ヲ漏泄スルニ付キ正當ノ理由アルトキハ本罪ヲ成立セス、果シテ然ラハ醫師產婆等カ其取扱ヒタル業務ニ關シ刑事上ノ訴追ヲ受クル虞アル場合ナレハ其他人ノ秘密ヲ漏泄スルニ付正當ノ理由アリト云フヲ得ヘカ故ニ秘密漏泄罪ヲ構成セスト解ス、若シ然ラサル場合ニハ本罪ヲ成立スヘシ。

(四) 封緘シタル他人ノ權利義務ニ關スル信書ヲ開披シ之ヲ毀棄シ且隱匿シタル者ノ處分如何。

(解説) 前示信書ノ開披、毀棄、隱匿ノ行爲ヲ獨立シタル別個ノ行爲ト見ルカ將タ手段又ハ結果タル行爲ト看做スヘキヤ、尙如何ナル法條ヲ適用ス可キカ、是レ研究上興味アル問題ナルカ故ニ著者ハ特ニ解答ヲ與ヘス讀者ノ宿題トナス。(第三百三十三條、第二百五十九條、第二百六十三條總則及第九章併合罪ノ規定參照)

## 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪

### 第一章 公共ノ安寧ヲ害スル罪

法典第八章騷擾ノ罪第九章放火及ヒ失火ノ罪第十章溢水及ヒ水利ニ關スル罪第十一章往來ヲ妨害スル罪ハ何レモ公共ノ安寧ヲ害スル點ニ於テ共通ノ性質ヲ有ス就中騷擾罪ハ主トシテ公共ノ秩序ヲ害スルコトヲ以テ特質トシ放火及ヒ失火ノ罪、溢水及ヒ水利ニ關スル罪往來ヲ妨害スル罪ハ不定多數人ノ生命身體若クハ財産ヲ危險ナラシムルヲ以テ特質ト爲ス、然レトモ何レモ公共ノ安寧ト謂フ一般公共ノ法益ヲ害スルヲ以テ本質トスルカ故ニ具體的ニ侵害セラル、生命身體財産等ノ個數ハ右ノ犯罪ニ於ケル罪數ヲ決定スルノ標準タラス是レ個人ノ法益ニ對スル犯罪ト異ナルコトヲ注意スヘシ。

### 第一節 騷擾ノ罪

騷擾ノ罪ハ舊刑法ノ兇徒聚衆罪ニ該當スルモノニシテ公共ノ秩序ヲ害スル



ヲ以テ其本質ト爲ス、新刑法カ其罪目ヲ改メタル所以ハ本罪ハ固ト多數人聚合シテ騷擾ヲ爲シ以テ社會ノ秩序ヲ害スル行爲ヲ罰スルニアルカ故ニ兇徒聚衆ト謂フキハ特ニ兇徒ト稱スヘキ種類ノ惡漢ヲ嘯聚スルカ如キ誤解ヲ來シ不當ナレハナリ、本罪ニ關スル刑法ノ規定ヲ示セハ左ノ如シ。

第八章 騷擾ノ罪

第百六條 多衆聚合シテ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ騷擾ノ罪ト爲シ左ノ區別ニ從テ處斷ス

- 一 首魁ハ一年以上十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス
- 二 他人ヲ指揮シ又ハ他人ニ率先シテ勢ヲ助ケタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス
- 三 附和隨行シタル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百七條 暴行又ハ脅迫ヲ爲ス爲メ多衆聚合シ當該公務員ヨリ解散ノ命令ヲ受ケルコト三回以上ニ及フモ仍ホ解散セサルトキハ首魁ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其他ノ者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

騷擾ノ罪ハ多衆聚合シテ暴行脅迫ヲ爲ス罪ト多衆解散不應罪トノ二種ニ區別ス。

多衆暴行脅迫罪ノ意義及ヒ要件

第一 多衆聚合シテ暴行脅迫ヲ爲スノ罪(第百六條)

本罪ハ多衆聚合シテ暴行又ハ脅迫ヲ爲スニ因テ成立ス。

左ニ要件ヲ説明スヘシ。

一 多衆聚合シタルコトヲ要ス。本罪ハ多衆ノ聚合ヲ要スル點ニ於テ單純脅迫罪ト異ナル。所謂多衆トハ多クノ人數ヲ意味ス、如何ナル人數ヲ以テ多衆ト解スヘキヤ、法律ハ特ニ人數ヲ規定セサルカ故ニ裁判官ハ騷擾ヲ惹起スル程度ノ暴行脅迫ヲ爲スニ適當ナル人數アリヤ否ヤヲ標準トシテ各場合ノ狀況ニ因リテ決スヘキモノトス。

二 暴行又ハ脅迫ヲ爲シタルコトヲ要ス。暴行トハ不正ノ腕力ニシテ人ニ對スルト物ニ對スルトヲ區別ス、脅迫ハ害惡ノ通知ニ因テ人ヲシテ畏怖ノ念ヲ生セシムルコトヲ謂フ、而シテ本罪ハ暴行脅迫ヲ受クル者ニ制限ナキカ故ニ個人ニ對スルト或ハ官廳ニ喧鬧シ若クハ官吏ニ強逼スルトヲ區別セス、尙ホ本罪ノ行爲中ニハ殺人放火傷害致死其他財物ノ竊取強取等ヲ包含セサル故ニ若シ斯カル結果ヲ生シタル場合ニハ刑法第五十四條ニ

騷擾罪ニハ殺人放火等ノ行爲ヲ伴フ







ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス、第七條ノ罪ハ首魁ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ其他ノ者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス。

練習問題

(一) 騷擾罪ノ構成要件ヲ説明スヘシ。

明治三十九年判例、大正三十九年愛媛縣警部試験

(二) 多衆解散不應罪ノ成立要件ヲ詳説スヘシ。

明治四十五年警官練習所試験、大正二十二年日本大學試験

(解説) 本問ニ付テハ前第一節第二ニ於テ其成立要件ヲ説明セルカ故ニ就テ参照スヘシ。

第二節 放火及ヒ失火ノ罪

放火及ヒ失火ノ罪ハ溢水及ヒ水利ニ關スル罪其他往來ヲ妨害スル罪ト共ニ公共ノ生命身體及ヒ財産ニ危險ヲ及ホスヲ以テ本質トナス、故ニ所謂公共危險罪ノ範圍ニ屬ス舊刑法ハ放火及ヒ失火ノ罪ヲ財産罪ノ一種ト看做シタリ

放火及ヒ失火ノ罪ノ概念

ト雖モ毀棄罪ニ比シテ之ヲ重ク處罰シ又自己ノ家屋ヲ燒燬スル場合ヲモ處罰スル點ヨリ觀察スルトキハ本罪ハ單純ニ財産ニ對スル罪ト謂ハンヨリハ寧ロ公共危險罪ト爲スヲ正當トス、而シテ公共危險ハ抽象的危險ヲ以テ充分トスル場合ト具體的危險ノ發生ヲ俟ツテ始メテ之ヲ罰ス可キ場合トアリ、各正條ニ於テ之ヲ明カニス。

第九章 放火及ヒ失火ノ罪

第八條 火ヲ放テ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、汽車、電車、艦

船若クハ鐵坑ヲ燒燬シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ五年以上ノ懲役ニ處ス

第九條 火ヲ放テ現ニ人ノ住居ニ使用セス又ハ人ノ現在セサル建造物、艦船若

クハ鐵坑ヲ燒燬シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

前項ノ物自己ノ所有ニ係ルトキハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス但公共ノ危險ヲ生

前項ノ物自己ノ所有ニ係ルトキハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

前項ノ物自己ノ所有ニ係ルトキハ一年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第九條第一項ニ記載シタル物ニ延燒シタルトキハ三月以上十年以下ノ懲役ニ處



前條第二項ノ罪ヲ犯シ因テ前條第一項ニ記載シタル物ニ延燒シタルトキハ三年以下ノ懲役ニ處ス

第一百十二條 第八條及ヒ第九條第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第一百十三條 第八條又ハ第九條第一項ノ罪ヲ犯ス目的ヲ以テ其豫備ヲ爲シタル者ハ二年以下ノ懲役ニ處ス但情狀ニ因リ其刑ヲ免除スルコトヲ得

第一百十四條 火災ノ際鎮火用ノ物ヲ隠匿又ハ損壞シ若クハ其他ノ方法ヲ以テ鎮火ヲ妨害シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第一百十五條 第九條第一項及ヒ第十條第一項ニ記載シタル物自己ノ所有ニ係ルト雖モ差押ヲ受ケ物權ヲ負擔シ又ハ賃貸シ若クハ保險ニ付シタルモノヲ燒燬シタルトキハ他人ノ物ヲ燒燬シタル者ノ例ニ同シ

第一百十六條 火ヲ失シテ第八條ニ記載シタル物又ハ他人ノ所有ニ係ル第九條ニ記載シタル物ヲ燒燬シタル者ハ一千圓以下ノ罰金ニ處ス

火ヲ失シテ自己ノ所有ニ係ル第九條ニ記載シタル物又ハ第九條ニ記載シタル物ヲ燒燬シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者亦同シ

第一百十七條 火藥、汽罐其他激發ス可キ物ヲ破裂セシメテ第八條ニ記載シタル物又ハ他人ノ所有ニ係ル第九條ニ記載シタル物ヲ損壞シタル者ハ放火ノ例ニ同シ自己ノ所有ニ係ル第九條ニ記載シタル物又ハ第十條ニ記載シタル

物ヲ損壞シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者亦同シ

前項ノ行爲過失ニ出テタルトキハ失火ノ例ニ同シ

第一百十七條ノ二 第六十六條又ハ前條第一項ノ行爲カ業務上必要ナル注意ヲ怠リタルニ因ルトキ又ハ重大ナル過失ニ出テタルトキハ三年以下ノ禁錮又ハ三

千圓以下ノ罰金ニ處ス

第一百十八條 瓦斯、電氣又ハ蒸氣ヲ漏出若クハ流出セシメ又ハ之ヲ遮斷シ因テ人ノ生命、身體又ハ財産ニ危險ヲ生セシメタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

瓦斯、電氣又ハ蒸氣ヲ漏出若クハ流出セシメ又ハ之ヲ遮斷シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

右ノ規定ニ依リ放火及ヒ失火ノ罪ヲ分類スルトキハ(一)放火罪(二)鎮火妨害罪

(三)失火罪(四)準放火準失火罪(五)加重失火罪及準失火罪(六)放遮罪ト爲ス。

第一 放火罪(第八條乃至第十條及ヒ第十五條)

放火罪トハ火ヲ放テ一定ノ目的物ヲ燒燬スルニ因テ成立スル犯罪ナリ。

一 目的物 本罪ノ目的物ハ分テ三種トナス。即チ第一種ハ現ニ人ノ住居

ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、汽車、電車、艦船、若クハ鑛坑ナリ(第八條)第二

種ハ現ニ人ノ住居ニ使用セス又ハ人ノ現在セサル建造物、艦船若クハ鑛坑

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪 第一章 公共ノ安寧ヲ害スル罪 第二節 放火及ヒ失火ノ罪 四三三

放火罪ノ意義及ヒ要件



差押テ受クルトハ民事訴訟法ニ依リ差押ヘタルヲ謂フ  
物權ヲ負擔シトハ質物又ハ抵當ニ供シタルカ如キヲ謂フ

ナリ(第九條)第三種ハ第一種第二種ニ屬セサル物ナリ(第十條)人ノ住居ニ使用スルトハ犯人以外ノ者ノ寢食ノ常用ニ供セラルル場合ヲ謂フ。又人ノ現在スルトハ放火ノ當時人ノ存在スルヲ謂フ、故ニ空家ノ如キハ現ニ人ノ住居ニ使用セラルル物ニ非サルト同時ニ修繕其他ノ理由ニテ人ノ現在スル間ハ所謂人ノ現在スル物ナリ。第三種ノ物ハ第一種第二種ニ屬セサル一切ノ物ヲ包含スルモ其燒燬ニ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタルコトヲ以テ犯罪構成ノ要件トナスカ故ニ或程度ノ大サヲ備フル物ニ非サレハ本罪ノ目的物ト爲ルヲ得ス。例ヘハ細少ナル紙片絲屑ノ如キ而シテ第一種ノ物ハ自己ノ所有ナルト他人ノ所有タルトヲ區別セスト雖モ第二種第三種ノ物ハ自己ノ所有ナルト否トニ因テ刑罰ヲ異ニス。尙ホ第二種第三種ニ屬スル物ハ自己ノ所有ニ係ルトキト雖モ差押ヲ受ケ物權ヲ負擔シ又ハ賃貸シ若クハ保險ニ付シタル物ヲ燒燬スルトキハ他人ノ物ヲ燒燬シタルト同一ニ取扱ハルルモノトス。(第五條)

二 行爲 行爲ハ火ヲ放テ一定ノ物ヲ燒燬スルニアリ、即チ放火ノ手段ニ因

放火ノ著手ト豫備トノ限界

放火ノ既遂ノ時期如何ニ付テハ學說分ル

テ一定ノ目的物ヲ燒燬スルノ結果ヲ生スルコトヲ要ス。火ヲ放ツトハ故意ニ物ノ燃燒ヲ惹起スル行爲ヲ謂フ、如何ナル行爲ヲ以テ放火ノ著手ト認ムヘキヤ、目的物ニ火ヲ移ス爲メ燃料ヲ備付クルカ如キハ豫備ニシテ未タ以テ放火ノ著手ニ非ス更ニ進テ點火行爲ヲ始ムルニ於テ著手トナル、大審院カ放火ノ手段カ家屋ニ傳火シ得ヘキモノナルコト物理上明白ナル以上ハ未タ家屋ノ一部ニ傳火セサルモ放火ノ著手アリタルモノトス。ト判示セラルハ正當ナリ(大正三年判決錄一七八九頁)燒燬トハ火力ヲ以テ物ヲ毀損スルヲ謂フ、如何ナル程度ノ毀損ヲ以テ燒燬ノ既遂トナルカ換言スレハ放火ノ既遂ノ時期如何ニ付テハ學說一致セス。或ハ(一)目的物カ燃燒シ始メタル時ヲ以テ既遂ナリトシ、或ハ(二)目的物ニ燃移リタル火力犯人ノ使用シタル燃料ノ火力ヲ藉ラス獨立シテ燃燒作用ヲ繼續シ得ヘキ程度ニ達シタル時ヲ以テ既遂ナリトシ、或ハ(三)目的物カ其用法上ノ效能ヲ失フニ至リタル時ヲ以テ既遂ナリト論ス。

以上ノ三說中現行法ノ解釋トシテ何レノ說ヲ以テ正當ナリトスヘキヤ蓋



シ第二説ハ專ラ放燃罪カ公共危險罪ナリトノ理由ヨリ論スルモノニシテ相當ノ理由アルカ故ニ一概ニ排斥スルヲ得スト雖モ現行法カ放火罪ノ既遂ト未遂トヲ區別シテ之ヲ處罰スル理由ヨリ推考スルトキハ第三説ヲ採用スルヲ以テ正鵠ヲ得タルモノト信ス。

三 故意 本罪ノ故意ハ(一)目的物ノ認識(二)放火行爲ノ認識(三)放火ト燒燬トノ間ニ於ケル因果關係ノ認識ヲ必要トス。

四 放火ノ未遂及豫備罪 刑法ハ第百八條及ヒ第百九條第一項ノ未遂罪ヲ處罰シ(第百十條)尙ホ第百八條及ヒ第百九條第一項ノ罪ヲ犯ス目的ヲ以テ其豫備ヲ爲シタル者ノ處罰ヲ認メ但情狀ニ因リテ其刑ヲ免除スルコトヲ得セシム(第百十條)刑法カ此等ノ犯罪ノ豫備又ハ未遂ヲ認メタルハ放火ノ行爲タル危害重大ナルヲ以テナリ豫備罪ニ付キ但書ヲ認メタルハ憫諒スヘキ情狀ニ因ル場合アリテ而カモ未タ實害ナケレハナリ。

五 刑罰 放火罪ノ刑罰ハ死刑又ハ懲役若クハ罰金ナリ。其科スヘキ刑ノ種類範圍ニ付テハ目的物ノ種類其他犯罪ノ既遂未遂豫備等ニ因テ異ナル。

鎮火妨害罪トハ即チ消防ヲ妨害スル犯罪ナリ

(詳細ハ前掲條文參照)

第二 鎮火妨害罪(第百十條)

本罪ハ火災ノ際鎮火ノ妨害ト爲ルヘキ行爲ヲ爲スニ因テ成立ス。

一 火災ノ際タルコトヲ要ス。火災トハ放火失火ニ基クト又ハ其他ノ偶然ノ原因ニ基クトヲ問ハス然レトモ本罪ヲ認メタル理由ハ放火ト等シク公共危險ヲ生シ又ハ之ヲ生スルノ虞アルニ因ルモノナルヲ以テ現ニ物ノ燃燒作用ヲ開始シ其程度稍ヤ大ニシテ普通火災ト謂ヒ得ル狀態ニ達シタル場合ヲ指スヘキモノトス。

二 鎮火ヲ妨害シタルコトヲ要ス。即チ本罪ノ行爲ハ積極的ニ火災ヲ惹起スルニ非スシテ他人ノ鎮火ヲ妨害スルニ在リ故ニ燒燃ノ結果ニ對シテ一ノ原因ヲ與ヘタルモノト謂ハサルヘカラス。鎮火ヲ妨害スルトハ火災消防ノ障礙ト爲ルヘキ一切ノ行爲ヲ指ス。法文ニ鎮火用ノ物ヲ隱匿又ハ損壞シトアルハ妨害ノ方法ヲ例示シタルニ過キサレナリ而シテ鎮火用ノ物カ自己ノ所有ニ屬スル場合ト雖モ一定ノ條件ノ下ニ本罪ヲ構成スヘシ。



三 本罪ハ故意犯ナルカ故ニ過失ニ基ク鎮火妨害ハ罪トナラス。

第三 失火罪(第六十)

失火罪ハ過失ニ基キ法定ノ目的物ヲ燒燬スルニ因テ成立ス。

本罪ノ要件ヲ示セハ左ノ如シ。

一 本罪ハ過失ニ基クコトヲ要ス。刑法ハ火ヲ失シト謂ヒテ過失ニ因ルコトヲ明カニセリ、如何ナル場合ニ過失アリト謂フヲ得ルカハ曩ニ總則ニ於テ説明セルヲ以テ就テ參照スヘシ。

二 失火罪ハ失火ノ結果燒燬シタル目的物ノ異ナルニ從ヒ刑罰ヲ異ニス。即チ失火ノ結果第一種ノ目的物又ハ他人ノ所有ニ係ル第二種ノ目的物ヲ燒燬シタル時ハ公共ノ危險ヲ生シタルト否トニ論ナク一千圓以下ノ罰金ニ處ス、反之自己ノ所有ニ係ル第二種ノ目的物又ハ第三種ノ目的物ヲ燒燬シタルトキハ其結果トシテ公共危險ヲ生シタル場合ニ限り右ト同様ニ處罰ス。

第四 準放火及ヒ準失火罪(第七十)

本罪ハ故意又ハ過失ニ因リ火藥汽罐其他激發ス可キ物ヲ破裂セシメテ放火ノ目的物ヲ損壞スルニ因テ成立ス。激發物ヲ破裂セシムルニ因ル物ノ損壞ハ放火又ハ失火ニ因ル物ノ燒燬ト其觀念ヲ異ニスト雖モ其危險殆ト放火又失火ト選フ所ナキカ故ニ法律ハ其目的物又ハ其處分ニ於テ放火罪若クハ失火罪ニ準シタルナリ。

本條ニ所謂激發物トハ點火ニ因リ急激ナル膨脹力ヲ惹起シ以テ其容器ヲ粉碎スル物ヲ總稱ス、損壞ノ意義ニ付テハ毀棄罪ニ於テ説明セル所ト同様ナリ、本罪カ放火罪及ヒ失火罪ト異ナル所ハ手段ヲ異ニスル點ニアリ故ニ其他ノ點ニ付テハ放火罪失火罪ノ説明ヲ引用スルヲ得ヘシ。

第五 加重失火罪及ヒ加重準失火罪(第七十七)

本罪ハ第十六條ノ失火罪及ヒ第十七條第二項ノ所謂準失火罪ニ犯人ノ特別ナル事情ノ加ハルニ因テ刑罰ヲ加重セラレル犯罪ナリ。所謂特別ナル事情トハ犯人ノ業務上必要ナル注意ヲ怠リ又ハ重大ナル過失ニ因リテ結果ノ發生シタルコトヲ意味ス。



本罪ノ要件ヲ分説スレハ左ノ如シ。

一 本罪ハ第十六條ノ失火罪及ヒ第十七條ノ準失火罪ト異ナリ犯人ノ業務上必要ナル注意ヲ怠リタルニ因リ又ハ重大ナル過失ニ出テタル爲メ法定ノ目的物即チ第十六條ノ失火罪ノ目的物又ハ第十七條第一項ノ目的物ヲ燒燬又ハ損壞スルニ至リタルコトヲ要件トス、所謂業務上必要ナル注意ヲ怠リトハ公務タルト私務タルト將タ職業タルト營業タルトヲ問ハス一定ノ業務ヲ有スル者カ其業務ノ性質ニ照シ客觀的ニ判斷シテ爲スヘキ必要ナル程度ノ注意ノ缺キタルニ因リ法定結果ヲ發生シタル場合ヲ云フ。次ニ重大ナル過失ニ出テタルトハ犯人ニ於テ著シキ不注意ノ爲メ結果ノ發生ヲ認識セサル場合ヲ謂フ。著シキ不注意アリタルヤ否ヤハ各場合ニ於テ具體的ニ裁判官カ之ヲ決定スヘキ問題ナリ。

(註) 業務關係者ノ犯シタル場合ハ業務上必要ナル注意ヲ怠リタルト云フタケテ重過失ノ有無ニ係ラス罪責ヲ負擔ス、業務關係者以外ノ者ノ犯シタル場合ハ重過失ヲ要件ト爲ス、何トナレハ業務關係者ノ注意義務ノ怠慢ハ重大ナル過失ト殆ント撰フ所ナキヲ以テナリ。

二 本罪ノ目的物及犯罪ノ手段並ニ加罰ノ條件タル公共危險ノ要否等ニ付テハ曩ノ失火罪及準失火罪ノ場合ト同一ナルカ故ニ之ヲ引用スヘシ。

三 刑罰 本罪ノ刑罰ハ第十六條ノ失火罪及第十七條第二項ノ準失火罪カ千圓以下ノ罰金刑ナルニ比シ重キ三年以下ノ禁錮又ハ三千圓以下ノ罰金ヲ科ス。法律カ特ニ業務關係者ニ注意義務ヲ要求シ又ハ重過失ノ責任ヲ重要視シタルハ蓋シ本罪カ專ラ公共的危險性タルノ實情ニ鑑ミ其被害ノ及フ所重大ナルニ由ル。

(註) 失火ト重大ナル過失ノ有無ニ付テハ從來ハ被害者ニ對スル損害賠償責任ノ範圍ニ限ラレ(失火ノ責任ニ關スル件 明治三十二年法律第四十號)タルモ今回ノ改正法ハ單リ私訴ニ限ラス失火罪及準失火罪ノ加重條件ト爲シタルカ故ニ特ニ刑ノ適用上過失ノ輕重ヲ審査スルノ必要アリ。

(註) 失火ノ場合ニ第十七條ノ二ヲ適用シテ重キ禁錮刑ヲ科スル場合ハ重過失ニ因リ失火ノ被害カ大ナル場合ニシテ輕過失ノ結果失火ノ被害ノ大ナル場合ニハ本條ノ適用ナシト解ス。



第六 放遮罪(第一百十條)

本罪ハ瓦斯電氣又ハ蒸氣ヲ漏出若クハ流出セシメ又ハ之ヲ遮斷シ因テ以テ人ノ生命身體又ハ財産ニ危險ヲ生セシムル犯罪ヲ謂フ。

本罪ハ人ノ生命身體又ハ財産ニ危險ヲ生スルコトヲ要件トナスカ故ニ此危險ナキ場合ハ罪トナラス、若シ其行爲ニ因テ人ヲ死傷ニ致シタルトキハ結果犯トシテ傷害ノ罪ト比較シ重キニ從テ處斷スヘキモノトス。

第七 刑罰 刑罰ハ三年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ナリ。

練習問題

(一) 放火罪ノ觀念ヲ説明セヨ。

明治四十一年東京帝國大學試驗  
大正八年文官高等試驗  
大正十年度辯護士試驗

(解説) 本問ニ付テハ前第二節第一ノ説明ヲ參照スヘシ。

(二) 火ヲ放チ無權利者ノ住居シタル自己ノ家屋ヲ燒燬シタル者ノ處分如何

明治四十年判檢事辯護士試驗

(解説) 刑法第八八條ニハ火ヲ放テ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物云々ヲ燒燬シタル者ハトアリ而シテ本條ハ現ニ人ノ住居ニ使

用シ又ハ人ノ現在スル建造物其他ノ物ナル以上ハ目的物カ自己ノ所有タルト否ヲ問ハス、要ハ目的物カ現ニ人ノ住居ニ使用スルカ又ハ人ノ現在スルヤノ點ニアリ、是レ本罪カ公共危險罪タル性質ヨリ生スル當然ノ結果ナリ、因テ按スルニ本問ハ無權利者ノ住居シタル家屋ト謂フ、然ラハ無權利者ノ住居シタル家屋ハ第八八條ニ所謂現ニ人ノ住居ニ使用スル物ト謂フヲ得ヘキヤ否ヤ是レ本問ノ焦點ナリ。民法上ヨリ言ヘハ無權利者ハ縱令自ラ住居ト稱スルモ其家屋ハ住居ニアラス然レトモ刑法ノ見地ヨリ論スレハ無權利者ト雖トモ苟モ人ノ寢食ノ常用ニ供スル物ハ之ヲ住居ト稱スルヲ正當トナスヘキカ故ニ本問ニ於ケル放火者ノ行爲ハ明カニ第八八條ノ要件ヲ具備スルモノトス、因テ犯人ノ行爲ハ刑法第百八條ヲ適用シテ處分スルヲ相當トス。

(三) 交番所ヲ破壊シ其材料ヲ燒燬シタル者ノ處分如何。

明治四十一年東京帝國大學試驗

(解説) 本問ハ第二百六十條ノ毀棄罪ト第一百十條ノ放火罪トノ併合罪トシ



テ處斷スルヲ以テ正當ト信ス。何トナレハ刑法第二百六十條ハ他人ノ建造物ヲ損壞シタル者ハ五年以下ノ懲役ニ處スト規定セリ、又第一百十條ニハ火ヲ放テ前二條ニ記載シタル以外ノ物ヲ燒燬シ因テ公共ノ危險ヲ生シタル者ハ云々トアリ、因テ按スルニ本問ハ交番所ヲ破壞シ其材料ヲ燒燬シタリトアリ而シテ交番所ハ國家ノ建造物ナルヲ以テ第二百六十條ニ所謂他人ノ建造物ニ該當ス故ニ犯人ノ行爲カ毀棄罪ヲ構成スルヤ明カナリ、又第一百十條ハ第八條第九條以外ノ物ノ燒燬ヲ罰スル規定ナルカ故ニ本問ニ所謂其材料ノ燒燬ハ第一百十條ノ目的物ニ該當スルモノトス、因テ前述ノ如ク處斷スル所以ナリ。

(四) 自己ノ所有物タル第二種又ハ第三種ノ目的物ニ放火シ因テ第一百十五條ノ目的物ニ延燒シタルトキハ犯人ヲ如何ニ處分スヘキカ。

大正十四年第五十二號試驗

(解説) 本問ハ前提トシテ第一百十五條ニ所謂差押ヲ受ケ物權ヲ負擔シ又ハ賃貸シ若クハ保險ニ付シタル物ヲ燒燬シタルトキハ他人ノ物ヲ燒燬シ

タル者ノ例ニ同シトノ規定ノ趣旨カ本章ノ罪ニ付テ此種ノ物ヲ他人ノ所有ト看做スニ在ルヤ否ヤノ解釋如何ニ依テ結論ヲ異ニス、按スルニ予輩ハ本章ノ罪ニ付テハ此種ノ物ヲ他人ノ物ト看做ス(第二百四十條參照)ニ非スシテ故意ニ之ヲ燒燬シタル場合ニ限り他人ノ物ヲ燒燬シタルト同一ニ處分スルノ趣旨ナリト解スルカ故ニ本問ノ如キ目的物ニ放火シ因テ第一百十五條ノ目的物ニ延燒スルコトアルモ第一百一條ノ規定ヲ適用シテ處斷スルコトヲ得ス、因テ本問ニ於ケル犯人ノ行爲ハ第一百十條第二項ヲ適用シテ一年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處スルヲ相當トス。

(五) 失火罪ノ成立要素ヲ説明スヘシ、  
大正元年青森縣警部試驗

(解説) 本問ニ付テハ前第二節ノ第三ニ説明セルヲ以テ茲ニ贅セス。

### 第三節 溢水及ヒ水利ニ關スル罪

本罪ハ放火及ヒ失火ノ罪ト等シク公共危險罪タルノ性質ヲ有ス、兩者ハ單ニ公共ノ危險ヲ生セシムル手段ノ異ナルニ過キス即チ放火及ヒ失火罪ハ火力



ニ依リ物ヲ燒燬シ本罪ハ溢水ニ依リテ物ヲ浸害ス其結果共ニ公共ノ危險ヲ生スルモノナリ故ニ本罪ニ於ケル物體及ヒ處分ノ如キモ亦放火及ヒ失火罪ト相類似ス試ニ本罪ノ規定ヲ左ニ示サン。

第十章 溢水及ヒ水利ニ關スル罪

第一百九條 溢水セシメテ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、汽車

電車若クハ鑛坑ヲ浸害シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ三年以上ノ懲役ニ處ス

第二百十條 溢水セシメテ前條ニ記載シタル以外ノ物ヲ浸害シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

浸害シタル物自己ノ所有ニ係ルトキハ差押ヲ受ケ、物權ヲ負擔シ又ハ貸貸シ若クハ保險ニ付シタル場合ニ限り前項ノ例ニ依ル

第二百十一條 水害ノ際防水用ノ物ヲ隱匿又ハ損壞シ若クハ其他ノ方法ヲ以テ水防ヲ妨害シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第二百十二條 過失ニ因リ溢水セシメテ第九條ニ記載シタル物ヲ浸害シタル者又ハ第九條ニ記載シタル物ヲ浸害シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百十三條 堤防ヲ決潰シ、水閘ヲ破壞シ其他水利ノ妨害ト爲ル可キ行爲又ハ溢水セシム可キ行爲ヲ爲シタル者ハ二年以下ノ懲役若クハ禁錮又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

右ノ規定ニ依レハ本罪ニハ(一)溢水罪(二)水防妨害罪(三)過失溢水罪(四)水利妨害罪ノ體様アリ左ニ之ヲ分説スヘシ。

溢水罪ノ要件及ヒ要件

第一 溢水罪(百二十九條 第一)

溢水罪ハ故意ニ溢水セシメテ一定ノ目的物ヲ浸害スルニ因テ成立スル犯罪ナリ。

左ニ要件ヲ分説スヘシ、

- 一 目的物 本罪ノ目的物ニ二種アリ即チ第一種ハ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、汽車、電車若クハ鑛坑ナリ、第二種ハ右ニ記載シタル以外ノ物ナリ、而シテ第二種ノ目的物ハ具體的ニ危險ヲ發生シタル場合ニ限り犯罪ヲ構成ス。

- 二 行爲 本罪ノ行爲ハ溢水セシメテ目的物ヲ浸害スルニアリ。溢水トハ河川、湖沼等ノ水ノ自然力ヲシテ自由ナラシメ以テ地上ニ氾濫セシムルヲ謂フ、法律ハ溢水ノ手段ヲ限定セサルカ故ニ堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シ又ハ其他ノ手段ヲ用ヒタルトヲ問ハス、浸害トハ水力ニ依テ一定ノ目的物

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪 第一章 公共ノ安寧ヲ害スル罪 第三節 溢水及ヒ水利ニ關スル罪

溢水ト浸害トハ行爲ノ内容トナリ



如何ナル場合  
ニ溢水罪ノ既  
送アリトナス

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪 第一章 公共ノ安寧ヲ害スル罪 第三節 溢水及ヒ水利ニ關スル罪

四四六

ヲ害スルヲ謂フ、如何ナル程度ヲ以テ浸害アリト認ムヘキヤ換言スレハ溢水罪ノ既遂ノ時期如何ニ付テハ學說區々ニシテ一定セス、大別シテ(一)物ニ浸害ヲ及ホシタルヤ否ヤヲ標準トシテ決スヘシト爲ス説ト(二)人ノ生命身體財產等ニ危險ヲ生シタルヤ否ヤヲ標準トシテ決セントスル説トアリ、予輩ノ所信ニ依レハ立法者カ本罪ヲ規定シタル理由ハ溢水ニ因ル物ノ浸害カ公共ノ生命身體財產ニ危險アリトシテ認メタルニ由ルモノナリト雖モ放火、失火罪ニ於ケル物ノ燒燬ト等シク刑法ハ所謂浸害トハ物ニ對シテ立言シタルヲ以テ其浸害ノ有無ハ物ヲ標準トシテ決スルヲ正當トス故ニ水力ニ依リテ物ノ全部ノ存在又ハ效用ヲ失ハシメタル場合ハ勿論一部ノ存在又ハ效用ヲ失ハシメタル場合ニ於テモ溢水罪ノ既遂ト爲ルモノトス。

三 故意 本罪ノ故意ハ目的物ノ性質ヲ認識スルノ外舉動並ニ結果ノ認識アルコトヲ要ス、若シ結果ノ認識ナキトキハ過失溢水罪ヲ構成ススヘシ、但公共危險ヲ生スルコトノ認識ハ故意ノ内容タラス。

四 刑罰 刑罰ハ第一種第二種ノ目的物ニ因テ異ナル(法文參照)

水防妨害罪

第二 水防妨害罪(第一百一條)

本罪ハ水害ノ際防水用ノ物ヲ隱匿、損壞其他ノ方法ヲ以テ水防ヲ妨害スルニ因テ成立ス、要件ノ説明ニ付テハ鎮火妨害罪ノ説明ヲ參照スヘシ。

過失溢水罪

第三 過失溢水罪(第一百二條)

本罪カ前段ノ溢水罪ト異ナルハ本罪ハ過失ニ因ルノ點ニアリ、例ヘハ不注意ノ爲メ堤防ノ決潰ヲ知ラスシテ人ノ住家ニ浸水セシムルカ如シ。

第四 水利妨害罪並ニ溢水危險罪(第一百三條)

第二百二十三條前段ハ水利妨害ノ行爲ヲ後段ハ溢水危險ノ行爲ヲ處罰スヘキコトヲ規定ス。

水利妨害罪

一 水利妨害罪ハ水ノ利用ヲ妨害スヘキ行爲ヲ爲スニ因テ成立ス。例ヘハ灌溉牧畜等農業上ノ目的ノ爲メニ流水ヲ利用スル便益ヲ妨害スルカ如シ、其手段ノ如何ハ敢テ法ノ問フ所ニ非ス。堤防ノ決潰等ハ一ノ例示ニ過キス。妨害行爲ハ不法ナルコトヲ要スルハ勿論ナルカ故ニ例ヘハ規約又ハ慣習上上流地ノ人民カ水流ヲ利用シタルカ爲メ下流地ノ人民ノ水利ノ妨

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪

第一章 公共ノ安寧ヲ害スル罪 第三節 溢水及ヒ水利ニ關スル罪

四四七



刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪 第一章 公共ノ安寧ヲ害スル罪 第四節 往來ヲ妨害スル罪

害ト爲ルカ如キハ本罪ヲ構成セス。

二 溢水危険罪ハ堤防ヲ決潰シ水閘ヲ破壊スル等溢水スヘキ行爲ヲ爲スニ因テ成立ス。本罪ハ第一百十九條第百二十條ノ未遂ノ性質ヲ有スルモ特ニ獨立罪トシテ規定シタリ。

練習問題

(一) 放火罪ト溢水罪ノ區別如何。

大正元年日本大學試験

(解説) 本問ハ唯其手段ノ差異ニ過キササルコトハ既ニ説明セリ、就テ參照スヘシ。

(二) 溢水罪ノ既遂ノ時期如何。

(解説) 本問ニ付テハ前第三節第一ノ二行爲ノ説明ヲ參照スヘシ。

### 第四節 往來ヲ妨害スル罪

往來ヲ妨害スルノ罪ハ公共危険罪ノ一種ナルコトハ既ニ説明セルカ如シ。抑モ人類ハ社交的動物ナルカ故ニ互ニ相往來スルハ共同生存上ニ於ケル自

然的ノ要件ナリ、故ニ國家ハ此往來ノ安全ヲ維持スルカ爲メ之カ妨害ト爲ルヘキ行爲ヲ處罰スルコトヲ規定セリ。

#### 第十一章 往來ヲ妨害スル罪

第二百二十四條 鐵路、水路又ハ橋梁ヲ損壞又ハ壅塞シテ往來ノ妨害ヲ生セシメタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

第二百二十五條 鐵道又ハ其標識ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ汽車又ハ電車ノ往來ノ危険ヲ生セシメタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

燈臺又ハ浮標ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ艦船ノ往來ノ危険ヲ生セシメタル者亦同シ

第二百二十六條 人ノ現在スル汽車又ハ電車ヲ顛覆又ハ破壊シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス

人ノ現在スル艦船ヲ覆没又ハ破壊シタル者亦同シ  
前二項ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス

第二百二十七條 第二百二十五條ノ罪ヲ犯シ因テ汽車又ハ電車ノ顛覆若クハ破壊又ハ艦船ノ覆没若クハ破壊ヲ致シタル者亦前條ノ例ニ同シ

第二百二十八條 第二百二十四條第一項、第二百二十五條及ヒ第二百二十六條第一項、第二

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪 第一章 公共ノ安寧ヲ害スル罪 第四節 往來ヲ妨害スル罪



項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス  
第二百二十九條 過失ニ因リ汽車、電車又ハ艦船ノ往來ノ危險ヲ生セシメ又ハ汽車、電車ノ顛覆若クハ破壊又ハ艦船ノ覆没若クハ破壊ヲ致シタル者ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス  
其業務ニ從事スル者前項ノ罪ヲ犯シタルトキハ三年以下ノ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

刑法ノ規定ニ依レハ往來妨害罪ハ之ヲ分テ一般往來妨害罪ト特別往來妨害罪トニ大別スルヲ得ヘシ。

第一 一般往來妨害罪(第四百二條)

本罪ハ陸路水路橋梁ヲ損壞又ハ壅塞シテ往來ノ妨害ヲ生セシムルニ因テ成立ス。

左ニ要件ヲ分説スヘシ。

- 一 目的物 本罪ノ目的物ハ陸路水路橋梁ナリ。法律ハ右ノ三者ヲ限リタルヲ以テ其以外ノ物例ヘハ渡舟ヲ破壊スルカ如キハ本罪ヲ構成セス。陸路トハ陸上ノ道路ニシテ水路トハ水上ノ通路ナリ水上ト雖モ一定ノ通路

一般往來妨害罪ノ意義及ヒ要件

本罪ノ目的物ハ法律ニ限定ス

本罪ノ行為ハ二個ノ方法ニ限ル

アリ只陸路ノ如ク表面ニ現ハレサルノミ橋梁ニハ所謂棧橋ヲ含ムモノト解ス、陸路ニハ鐵道ヲ除外ス何トナレハ鐵道ニ付テハ別罪ヲ認メタレハナリ、右三個ノ目的物ハ本罪ノ性質上公衆交通ノ用ニ供スルモノナラサルヘカラス從テ單一一個人ノ私用ニ供スル物ハ本罪ノ物體タラス然レトモ其所有者ノ私人ニ屬スルヤ否ヤハ本罪ノ構成ニ關係ナシ。

二 行為 本罪ノ行為ハ損壞又ハ壅塞ナリ。損壞トハ物ノ實質ヲ毀損スルノ謂ニシテ例ヘハ道路ヲ破壊シ又ハ橋梁ヲ毀壞スルカ如シ。壅塞トハ交通ノ障害トナルヘキ物ヲ置クコトニシテ例ヘハ木石ヲ横フルカ、如シ、法律ハ右二個ノ方法ニ限定スルカ故ニ其以外ノ方法例ヘハ往來止又ハ車馬通行止ノ制札ヲ立ツカ如キハ本罪タラス、而シテ法律ハ往來妨害ノ結果ヲ生セシムルコトヲ要件トスルカ故ニ損壞又ハ壅塞ノ舉動ト往來妨害ノ結果ノ障害ト爲ルヘキ状態ヲ生セシムルコトヲ意味ス、必スシモ實際ニ於テ通行スル人カ往來ヲ阻止サル事實ノ存スルコトヲ必要トセス。



三 犯意 本罪ノ犯意ハ目的物ノ性質並ニ行爲タル往來妨害ノ結果ヲ生セシムルコトヲ認識スルヲ要ス。此犯罪ヲ犯スニ因テ人ノ死傷ヲ惹起シタルトキハ結果犯トシテ傷害罪ト比較シ重キニ從テ處斷セラル。若シ夫レ殺人又ハ傷害ノ結果ヲ豫見シタルトキハ第五十四條ノ適用アルヤ明カナリ。

特別往來妨害罪

四 刑罰 刑罰ハ二年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ナリ。

第二 特別往來妨害罪(第二百二十五條、第二百二十六條)

特別往來妨害罪トハ汽車、電車又ハ艦船ノ往來ヲ妨害スルニ因テ成立スル犯罪ヲ謂フ。分テ故意ニ因ル場合ト過失ニ因ル場合トニ區別ス、過失ニ因ル場合ハ後段ニ説明スヘキカ故ニ茲ニハ故意ニ因ル場合ノミヲ説明スヘシ。

故意ニ因ル場合ヲ更ニ分テ(一)危險罪ト(二)實害罪トナス。

一 危險罪(第二百五條)

本罪ハ汽車、電車、艦船ノ往來ニ危險ヲ與フルニ因テ成立ス。

此等ノ物ハ現代ニ於テノ交通機關中重要ナル地位ヲ占ムルモノナルヲ以テ特別規定ヲ爲シタルナリ。

故意ニ因ル特別往來妨害罪危險罪

(イ) 目的物 本罪ノ目的物ハ汽車、電車及ヒ艦船ナリ。艦船トハ廣ク水上ヲ航行スル船舶軍艦ヲ總稱スルカ故ニ主トシテ棹櫓ヲ以テ運行スル端舟ヲモ包含ス。

(ロ) 行爲 行爲ハ右三種ノ目的物ノ往來ニ危險ヲ與フルニ在リ。法律ハ其手段トシテ汽車、電車ニ付テハ鐵道又ハ其標識ヲ損壞シ、艦船ニ付テハ燈臺又ハ浮標ヲ損壞シト例示シ且ツ其他ノ方法ヲ以テト規定セルカ故ニ例ヘハ鐵道ニ木石ヲ横ヘ、水路ニ水雷ヲ布設スル等其他如何ナル方法ヲ問ハス苟モ其結果トシテ往來ノ危險ヲ生セシメタルトキハ常ニ本罪ヲ構成ス、往來ノ危險ヲ生セシメタルトハ是等ノ交通機關カ往來スルニ當リ衝突顛覆脱線若クハ沈沒等ノ災害ヲ受クヘキ虞アル状態ヲ生セシムルノ義ナリ。

(ハ) 犯意 犯意ハ目的物ノ認識及ヒ自己ノ行爲ニ因リ往來ノ危險ヲ生セシムルコトノ認識アルコトヲ要ス。

(ニ) 刑罰 刑罰ハ二年以上ノ有期懲役ナリ、而シテ此犯罪ヲ犯スニ因テ汽



車又ハ電車ヲ顛覆シ若クハ破壊シ又ハ艦船ヲ覆没若クハ破壊シタルトキハ結果犯トシテ第二百二十六條ノ例ニ依テ處罰スヘキモノトス。(第一百七條)

實害罪

二 實害罪(第一百六條)

本罪ハ人ノ現在スル汽車、電車又ハ艦船ヲ顛覆、覆没又ハ破壊スルニ因テ成立ス。

- (イ) 目的物 目的物ハ人ノ現在スル汽車、電車、艦船ナリ。人ノ現在スルトハ行爲當時ニ於テ人ノ存在スルノ義ナリ。
- (ロ) 行爲 行爲ハ汽車、電車ニ付テハ顛覆破壊ナリ、艦船ニ付テハ特ニ覆没ト謂フ、覆没トハ顛覆ト沈没トノ二者ヲ指ス。
- (ハ) 犯意 本罪ノ故意ハ目的物及ヒ行爲ノ認識ノ外特ニ人ノ現在スルコトノ認識ヲ要件トス。

(ニ) 刑罰 本罪ノ刑罰ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ナリ、本罪ヲ犯スニ因テ人ヲ死ニ致シタルトキハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス。

第三 過失ニ因ル往來妨害罪(第一百九條)

過失ニ因ル往來妨害罪

本罪ハ過失ニ因リ汽車、電車、艦船ノ往來ニ危險ヲ生セシメ又ハ汽車電車ノ顛覆若クハ破壊又ハ艦船ノ覆没若クハ破壊ヲ致スニ因テ成立ス。刑法カ特ニ本罪ノ場合ニ限り過失犯ヲ認タル所以ハ危險ノ重大ニ因ルモノトス、若シ夫レ其業務ニ従事スル者カ本罪ヲ犯ストキハ特ニ重ク處罰セラル、前掲條文及ヒ總則過失犯ノ説明並ニ失火罪ノ説明ヲ參照スヘシ。

第四 未遂罪 往來妨害罪ハ其一般ナルト特別ナルトヲ問ハス未遂罪ヲ處罰

ス(第一百八條)

練習問題

(一) 不作爲ニ因テ往來妨害罪ヲ犯スコトヲ得ル場合ヲ説明スヘシ。

明治四十四年明治大學試験

(解説) 不作爲トハ意思ニ基ク身體ノ靜止ナルヲ以テ法律上一定ノ行爲ヲ爲スヘキ事ヲ命セラレタル場合ニ之ニ違背シテ行動ヲ爲ササルニ因テ成立スルヲ普通トス、然レトモ法律上直接ニ一定ノ行爲ヲ爲スコトヲ命セサルモ或ル行爲ヲ爲スヘキ義務ヲ有スル者カ其義務ニ違反シテ刑法



上要求スル結果ヲ惹起シタルトキハ義務者ノ義務違反行爲ハ普通人カ作爲ニ因テ犯罪ヲ犯シタル場合ト同一ニ處分スルヲ相當トス例ヘハ鐵道ノ番人カ鐵道ニ障害物ノ横ハレルコトヲ知リナカラ、其物ヲ故意ニ排除セサルカ爲メ汽車又ハ電車カ顛覆シタル場合ノ如キ是ナリ(總則不作爲犯ノ説明參照)

### 第二章 公衆ノ衛生ニ關スル罪

本章ハ法典第十四章阿片煙ニ關スル罪及ヒ第十五章飲料水ニ關スル罪ニ付キ説明スルヲ目的トス、抑モ此二罪ハ公衆ノ衛生ニ危害ヲ及ホス犯罪ナル點ニ於テ共通ノ性質ヲ有ス左ニ節ヲ分テ之ヲ論述スヘシ。

#### 第一節 阿片煙ニ關スル罪

刑法カ本罪ヲ認メタル所以ハ阿片煙吸食ノ結果中毒作用ヲ惹起シ大ニ人身ノ健康ヲ害シ延テ國家ノ衰頹ヲ來スノ虞アルニ基因スルモノトス、抑モ阿片

阿片煙ニ關スル罪ヲ認メタル根據

煙ハ劇藥タルもるひねヲ以テ主成分トスル麻醉劑ナルカ故ニ之ヲ吸食スルニ因テ精神恍惚トシテ快境ニ入ラシメ一度此快感ヲ覺エタルトキハ容易ニ吸食ノ慣習ヲ成シ遂ニ中毒ニ陥リ一日モ之ヲ廢スルコト能ハサルニ至ルノ性質ヲ有スルモノナリ、故ニ若シ斯カル惡風社會ノ各層ニ傳播センカ遂ニ國家ヲ亡ホスニ至ルヘシ、是レ法律カ此恐ルヘキ結果ヲ未發ニ防カンカ爲メ特ニ本罪ヲ設ケタルモノトス。

#### 第十四章 阿片煙ニ關スル罪

第三十六條 阿片煙ヲ輸入、製造又ハ販賣シ若クハ販賣ノ目的ヲ以テ之ヲ所持シタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス

第三十七條 阿片煙ヲ吸入スル器具ヲ輸入、製造又ハ販賣シ若クハ販賣ノ目的ヲ以テ之ヲ所持シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

第三十八條 稅關官吏阿片煙又ハ阿片煙吸食ノ器具ヲ輸入シ又ハ其輸入ヲ許シタルトキハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第三十九條 阿片煙ヲ吸食シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス  
阿片煙ヲ吸食スル爲メ房屋ヲ給與シテ利ヲ圖リタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス



第四百十條 阿片煙又ハ阿片煙吸食ノ器具ヲ所持シタル者ハ一年以下ノ懲役ニ處ス

第四百十一條 本章ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

刑法ノ規定ニ依レハ本罪ニハ左ノ體様アリ、

第一 阿片煙並ニ吸食器具ノ準備罪(第三百三十六條 第三百三十七條)

本罪ハ阿片煙並ニ吸食器具ヲ輸入製造販賣シ又ハ之ヲ所持スルニ因テ成立ス。

一 物體 物體ハ阿片煙並ニ吸食器具ナリ。

二 行爲 本罪ノ行爲ハ(イ)輸入(ロ)製造(ハ)販賣(ニ)所持ナリ。輸入トハ物ヲ外國ヨリ内國ニ運輸スルヲ謂フ、輸入ノ既遂ノ時期ニ付テハ議論アリト雖モ陸揚ノ時ト解スルヲ正當ト信ス、製造、販賣ニ付テハ特ニ説明ヲ要セス、所持ニハ單純ノ所持ト販賣ノ目的ヲ以テスル所持トニ因テ其刑ヲ異ニス。

三 犯意 本罪ノ犯意ハ目的物並ニ行爲ノ認識ノ外、第三百三十六條及ヒ第三百三十七條ノ所持罪ニハ特ニ販賣ノ目的アルコトヲ要件トス。

三十七條ノ所持罪ニハ特ニ販賣ノ目的アルコトヲ要件トス。

阿片煙ノ吸食並ニ房屋給與罪

第二 阿片煙ノ吸食並ニ房屋給與罪(第三百三十九條)

本罪ハ阿片煙ヲ吸食シ又ハ之ヲ吸食スル爲メ房屋ヲ給與シテ利益ヲ圖ルニ因テ成立ス。

本罪ニ付キ特ニ説明スヘキハ房屋給與ハ吸食罪ノ從犯タルヘキ性質ヲ有スルモ危險ノ重大ナル點ヨリ觀察シテ一ノ獨立罪ト爲シタリ、然レトモ營利ノ目的ニ出テサル房屋給與ハ吸食罪ノ從犯トシテ處分スルコトヲ注意スヘシ

第三 本罪ノ未遂ハ總テ之ヲ處罰ス。

其罰スヘキ理由ハ特ニ本罪ノ危險カ重大ナレハナリ。

第四 刑罰 本罪ノ刑罰ハ總テ懲役刑ナリ、而シテ稅關官吏ノ犯罪ニ付テハ重ク處罰スル旨ヲ規定セリ、其理由ハ敢テ説明ヲ要セス。

### 第二節 飲料水ニ關スル罪

凡ソ飲料ニ供スヘキ淨水ハ吾人ノ生存上一日モ缺クヘカラサル必要品ナルヲ以テ公衆ノ用ニ供スル飲料水ニ關スル危害行爲ハ特ニ處罰スルノ必要アリ

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪

第二章 公衆ノ衛生ニ關スル罪  
第二節 飲料水ニ關スル罪



リ、故ニ法律カ阿片煙ニ關スル罪ト共ニ公衆ノ衛生ニ關スル犯罪ノ一種トシテ規定セル所以ナリ。

第十五章 飲料水ニ關スル罪

第四百二十二條 人ノ飲料ニ供スル淨水ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルコト能ハサルニ至ラシメル者ハ六月以下ノ懲役又ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百二十三條 水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料ノ淨水又ハ其水源ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス

第四百二十四條 人ノ飲料ニ供スル淨水ニ毒物其他ノ健康ヲ害ス可キ物ヲ混入シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

第四百二十五條 前三條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

第四百二十六條 水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料ノ淨水又ハ其水源ニ毒物其他ノ健康ヲ害ス可キ物ヲ混入シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ五年以上ノ懲役ニ處ス

第四百二十七條 公衆ノ飲料ニ供スル淨水ノ水道ヲ損壞又ハ壅塞シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

右ノ規定ニ依レハ本罪ハ(一)飲料水ヲ汚穢スル罪(二)健康ヲ害スヘキ物ヲ混入

淨水ヲ汚穢スル罪

所謂飲料淨水トハ日常使用スヘキ飲料水ニシテ、ナリ故ニ一ニ付テハ本罪ノ適用ナシト解スヘシ

健康危害物混入罪

スル罪(三)水道ヲ損壞又ハ壅塞スル罪トニ分類スルヲ得ヘシ

第一 淨水ヲ汚穢スル罪(第四百二十三條)

本罪ハ人ノ飲料ノ用ニ供スル淨水又ハ水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料ノ淨水又ハ其水源ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルコト能ハサラシムルニ因テ成立ス。

汚穢トハ淨水ヲ不潔ナラシムヘキ一切ノ行爲ヲ謂フ例ハ泥土塵芥ヲ投入シ又ハ水底ヲ攪亂スルカ如シ、水道ニ由リ公衆ニ供給スル淨水又ハ其水源ニ關スル場合ハ其他ノ場合ヨリ其刑重シ、蓋シ水道ハ其供給ノ範圍頗ル廣ク其害ノ及フ所亦重大ナルニ因ルナリ。

而シテ本罪ハ所謂結果犯ナルヲ以テ汚穢ニ因テ之ヲ用フルコト能ハサル程度ニ至ルコトヲ要件ト爲ス、但犯人ニ於テ其結果ノ認識ヲ必要トセス。

第二 健康危害物混入罪(第四百二十四條)

本罪ハ毒物其他健康ヲ害スヘキ物ヲ混入スルコトヲ要件トスル點ニ於テ前段ノ罪ト異ナル。健康ヲ害スヘキ物トハ身體ノ健康ヲ害スヘキ性質ヲ有スル物ヲ謂フ、毒物ハ一例示ニ過キス、毒物トハ化學作用ニ由リ健康ヲ害スヘ



キ無機物ヲ謂フ、健康ニ害アル物ナリヤ否ヤハ物ノ性質ニ因テ判斷スヘキモノトス。

水道ヲ損壞塞スル罪

第三 水道ヲ損壞塞スル罪(第一百七四條)

本罪ハ公衆ノ飲料ノ用ニ供スル淨水ノ水道ヲ損壞又ハ壅塞スルニ因テ成立ス。壅塞トハ木石砂礫ノ類ヲ填充シテ因テ水ノ流通ヲ阻碍スルヲ謂フ、損壞ノ何タルヤハ既ニ説ケリ。

第四 刑罰ハ概シテ嚴重ナリ之カ量定ニ付テハ前掲法文ヲ參照スレハ自ラ明瞭ナルヲ以テ茲ニ贅セス。

第三章 偽造罪

偽造ヲ認メタル立法上ノ根據

本章ハ法典第十六章通貨偽造ノ罪、第十七章文書偽造ノ罪、第十八章有價證券偽造ノ罪、第十九章印章偽造ノ罪ヲ説明スルヲ以テ目的トス、而シテ此等ノ犯罪ハ何レモ公ノ信用ヲ害スルノ性質ヲ有ス、抑モ吾人人類ノ共同生活ニ於テ有無相通シ長短相濟ヒ以テ圓滿ナル生存ヲ爲スコトヲ得ル所以ノモノハ社

會ノ交通取引ニ於ケル信用ノ存スルカ故ナリ、若シ夫レ社會ノ交通取引ニ於ケル信用ナカラシカ吾人ハ一日モ安ンシテ取引ヲ爲スヲ得スシテ遂ニ圓滿ナル共同生活ヲ完フスルコト能ハサルヘシ、左レハ國家ハ社會ニ於ケル交通取引ノ信用ヲ維持スルカ爲メ厚ク之ヲ保護シ斯カル違反行爲ヲ處罰スルノ必要アリ是レ刑法カ特ニ是等ノ犯罪ヲ規定シタル所以ナリ。

第一節 通貨偽造ノ罪

本罪ハ通貨ノ取引上ニ於ケル信用ヲ害スル犯罪ナルコトハ前段ノ説明ニ依リ明カナリ、本罪ニ關スル刑法ノ規定ヲ示セハ左ノ如シ。

第十六章 通貨偽造ノ罪

第四百十八條 行使ノ目的ヲ以テ通用ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ偽造又ハ變造シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス

偽造、變造ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シ若クハ輸入シタル者亦同シ

第四百十九條 行使ノ目的ヲ以テ内國ニ流通スル外國ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ偽造又ハ變造シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス



偽造、變造ノ外國ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シ若クハ輸入シタ者亦同シ

第五十條 行使ノ目的ヲ以テ偽造變造ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ收得シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

第五十一條 前三條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第五十二條 貨幣紙幣又ハ銀行券ヲ收得シタル後其偽造又ハ變造ナルコトヲ知テ之ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シタル者ハ其名價三倍以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス但一圓以下ニ降スコトヲ得ス

第五十三條 貨幣、紙幣又ハ銀行券ノ偽造又ハ變造ノ用ニ供スル目的ヲ以テ器械又ハ原料ヲ準備シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

法律ハ通貨偽造ノ罪ト題スルモ偽造ノ外變造、行使、交付、輸入、收得及ヒ準備ヲモ處罰ス。左ニ本罪ノ構成要件ヲ説明スヘシ。

第一 物體 本罪ノ物體ハ通貨ナリ。通貨ノ意義ニ付テハ學者間議論ノ存スル所ナリト雖モ予輩ハ「通貨トハ價格ノ標準ニシテ國家ノ公認ニ依リ一般取引上交換ノ手段トシテ通用スルモノヲ謂フ」ト定義スルヲ正當ト信ス。故ニ通貨ハ一般取引上ニ於ケル交換手段トシテ通用スヘキモノナルト同時ニ通

通貨偽造罪ノ構成要件

通貨トハ何ソ

通貨ノ種類

用ヲ國家カ公認セルモノタルコトヲ要件ト爲ス。從テ通用期限ノ前後ハ通貨ニ非ス、又事實上ニ於テ交換ノ手段ニ供セラルルモ、國家ノ公認セサルモノハ通貨ニ非ス、反之苟モ國家ノ公認アル以上ハ外國ニ於テ發行セラルル通貨モ亦本罪ノ物體タリ故ニ第四百十九條ニ所謂內國流通ノ外國貨幣トハ國家ノ通用ヲ公認セルモノト解スヘキナリ。(反對說アリ)

本罪ノ物體タル通貨ハ之ヲ分テ貨幣紙幣及ヒ銀行券ノ三種ト爲ス。

一 貨幣 貨幣トハ所謂硬貨ニシテ現行貨幣法ニ依ルトキハ金貨、銀貨、白銅貨及ヒ青銅貨ノ四トナス、貨幣發行權ハ政府ニ屬ス。

二 紙幣 紙幣トハ貨幣ノ代用トシテ發行セラルル證券ナリ、現今我國ニ於テハ五拾圓紙幣ノミナリ。

三 銀行券 銀行券トハ政府ノ認許ニ依リ銀行ヨリ發行スル證券ナリ、強制通用力ヲ有シ銀行券ノ所持者ハ何時ニテモ發行銀行ニ對シ法貨ト引換ヲ請求シ得ルモノナリ(兌換銀行券條例第(四)條第六條參照)現今ニ於テハ日本銀行ニ於テ發行權ヲ有ス、但朝鮮銀行、臺灣銀行モ或制限ノ下ニ銀行券ヲ發行ス、次ニ橫濱正



金銀行ハ關東州及ヒ支那ニ於ケル銀行券ヲ發行スト雖モ唯此銀行券ハ刑法ノ保護ノ物體タラス(明治三十八年法律第六十六號參照)

本罪ノ物體タル通貨ハ國內ニ於テ通用スルモノニ限り(第四百四十九條)外國ニ於テノミ流通スルモノハ明治三十八年法律第六十六號ノ適用ヲ受クヘキモノトス。

第二 行爲 本罪ノ行爲ハ偽造、變造、行使、交付、輸入、收得及ヒ準備是ナリ。

一 偽造 通貨ノ偽造トハ無權利者カ真正ナル通貨ニ模擬セル物品ヲ新製スルヲ謂フ 故ニ偽造ハ無權利者ナルコト及ヒ模擬セル物品ヲ新製スルコトヲ要件トスルカ故ニ權利者ノ爲ス行爲ハ犯罪タラサルハ勿論、眞價ト全然酷似セサル物品ヲ製スルモ亦偽造ニ非ス、反對說ハ模擬セラレタル眞價ノ存在ハ通貨偽造ノ觀念ニ必要ナラスト(形式主義)論スルモ予輩ハ通貨ノ如ク一般ニ流通スルモノハ其品種及ヒ形式ニ於テ眞價ニ酷似スルモノニ非サレハ通貨ニ對スル公ノ信用ヲ害スルニ足ラサルヲ以テ偽造罪ヲ構成セサルモノト解ス(實質主義)故ニ例ヘハ二百圓ノ紙幣又ハ五圓ノ銀貨ヲ新製スル

通貨ノ偽造トハ何ゾ

偽造ノ意義ニ關シテ形式主義ト實質主義トノ二說アリ

通貨ノ變造トハ何ゾヤ

通貨ノ行使ト交付トノ區別

カ如キハ偽造罪トナラス。

- 二 變造 通貨ノ變造トハ不正ニ眞貨ノ一部ニ變更ヲ加ヘテ他ノ眞價ニ模擬スルヲ謂フ、例ヘハ十錢銀貨ノ十ヲ變更シテ二十錢銀貨ト爲シ又ハ金貨ノ周邊ヲ削リ其實價ヲ損スルカ如シ、其他銅貨ニ鍍銀シテ五十錢銀貨ニ模擬スルカ如キモ亦變造ナリ、或ハ眞價ヲ基礎トシ他種類ノ通貨ニ酷似スル物ト爲スハ變造ニ非スシテ偽造ナリト説明スル者ナキニアラスト雖モ予輩之ヲ探ラス。
- 三 行使 行使トハ偽貨ヲ真正ナル通貨トシテ流通セシムヘキ状態ニ置クヲ謂フ、例ヘハ偽貨ヲ他人ニ贈與シ又ハ支拂ニ供スルカ如シ。
- 四 交付 交付トハ偽貨タルノ實ヲ告ケテ他人ニ移付スルヲ謂フ、偽貨タルノ實ヲ告クル點ニ於テ行使ト異ナル。
- 五 輸入 輸入トハ偽貨ヲ外國ヨリ內國ニ運輸スルヲ謂フ、輸入ハ陸揚ノ時ヲ以テ既遂トナス。
- 六 收得 收得トハ偽貨ノ所持ヲ取得スル行爲ナリ、知情ノ收得ト善意ノ收



得トアリ、後ノ場合ハ之ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ他人ニ交付スルニ因テ犯罪ト爲ル。

七 準備 茲ニ準備トハ通貨ノ偽造變造ニ使用スル爲メ器械又ハ原料ヲ準備スルヲ謂フ。例ヘハ器械原料ノ買入製造藥品ノ調合等ノ如シ。

第三 故意 本罪ノ故意ハ目的物並ニ行爲ノ認識ノ外行使罪ヲ除クノ外總テ一定ノ目的ヲ以テスルコトヲ要件トス、故ニ此目的ナキトキハ犯罪タラス。

第四 刑罰 刑罰ハ行爲ノ體様ニ依リテ輕重アリ(前掲法文參照尙ホ第四百零八條乃至第五百十條ノ未遂罪ハ之ヲ處罰ス(第一百五條))

練習問題

(一) 通貨偽造罪ノ構成要件ヲ説明スヘシ。

昭和六年第五十二號試驗  
昭和二年司法科試驗  
明治四十三年福島縣文官試驗  
大正二年警視廳警部試驗

(解説) 刑法第四百十八條ニハ行使ノ目的ヲ以テ通用ノ貨幣紙幣銀行券ヲ偽造シタル者云々ト規定セリ故ニ本罪ハ行使ノ目的ヲ以テ通貨ヲ偽造スルニ因テ成立ス、故ニ第一本罪ノ目的物ハ通貨ナルコト、第二行爲ハ偽造ナルコト、第三故意ハ目的物ノ認識ノ外行使ノ目的ニ出テタルコトヲ

通貨偽造ノ罪  
ハ行使罪ノ外  
ハ總テ目的  
ナリ

要件トナスコト等ニ分類シテ解答スヘシ。

(二) 真正ノ貨幣ヲ基礎トシ之ニ工作ヲ加ヘテ別種ノ貨幣タル外觀ヲ有セシムル行爲ハ變造ナリヤ將タ偽造ナリヤ。大正三年日本大學模擬試驗

(解説) 本問ニ付テハ學者ノ見解一致セサル所ニシテ一説ニハ通貨ノ變造トハ既存ノ通貨ノ實價若クハ銘貨ニ變更ヲ加ヘ同種ノ偽貨ヲ作製スルヲ謂フカ故ニ本問ノ如ク既存ノ貨幣ヲ基礎トシ之ニ工作ヲ加ヘ別種ノ貨幣タルノ外觀ヲ有セシムル行爲ハ貨幣ノ變造ニ非スシテ眞價ヲ材料トシテ偽貨ヲ製造スル行爲即チ偽造ナリ、其理由トシテ若シ之ヲ變造ナリトセンカ例ヘハ五厘銅貨ニ鍍金シテ十圓金貨ノ如ク模擬スルカ如キハ之ヲ銅貨ノ變造ト稱スヘキヤ將タ金貨ノ變造ト解スヘキヤノ新ナル疑問ヲ生スルカ故ニ正當ナラスト、然レトモ予輩ハ前例ノ如キ何レノ變造ニ在ルヤハ須ラク本人ノ意思ト社會取引上ニ於ケル一般觀念トニ因テ判斷スルコトヲ得ルカ故ニ論者ノ説ク所ハ一ノ杞憂ニ過キスト信ス、且ツ偽造ハ無權利者カ真正ナル通貨ニ模擬セル物品ヲ新ニ作製スルヲ



謂ヒ反之變造ハ眞價ヲ基礎トシテ他ノ眞貨ニ變更スル一切ノ場合ヲ謂フト解スルヲ以テ變造ノ主旨ニ適合スルモノト信ス、因テ本問ハ之ヲ通貨ノ變造ト斷定ス。

(三) 信用ヲ得ル爲メ偽貨ヲ金庫ニ入レ之ヲ他人ニ示スハ偽貨行使罪ヲ構成スルヤ。

(解説) 本問ノ場合ハ之ヲ以テ行使ト謂フコトヲ得ルヤ否ヤノ解釋如何ニ因テ結論ヲ異ニス、宜シク前述セル行使ノ意義ヨリ類推シテ解答スヘシ

### 第二節 文書偽造ノ罪

第一 本罪ハ文書ニ關スル公ノ信用ヲ害スル罪ナリ、故ニ本罪ノ法益ハ公ノ信用ナリ、此點ハ他ノ偽造罪ニ共通ノ觀念ナルコト既ニ説明セルカ如シ、然レトモ本罪ノ行爲カ一面個人若クハ國家ノ利益ニ關係ヲ有スルト共ニ他面ニ於テ多數ノ場合ニ財産罪ノ一タル詐欺罪ト關聯スルカ故ニ其結果第五十四條ヲ適用セラルル場合少ナカラス、乍併本罪ノ性質ヲ以テ財産的の方面ニ求ムル

文書偽造罪ノ概念

ハ正當ナラス、本罪ニ關スル刑法ノ規定ヲ示セハ左ノ如シ。

#### 第十七章 文書偽造ノ罪

第一百五十四條 行使ノ目的ヲ以テ御璽、國璽若クハ御名ヲ使用シテ詔書其他ノ文書ヲ偽造シ又ハ偽造シタル御璽、國璽若クハ御名ヲ使用シテ詔書其他ノ文書ヲ偽造シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス

御璽、國璽ヲ押捺シ又ハ御名ヲ署シタル詔書其他ノ文書ヲ變造シタル者亦同シ  
第一百五十五條 行使ノ目的ヲ以テ公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ヲ使用シテ公務所又ハ公務員ノ作ル可キ文書若クハ圖畫ヲ偽造シ又ハ偽造シタル公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ヲ使用シテ公務所又ハ公務員ノ作ル可キ文書若クハ圖畫ヲ偽造シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス  
公務所又ハ公務員ノ捺印若クハ署名シタル文書若クハ圖畫ヲ變造シタル者亦同シ

前二項ノ外公務所又ハ公務員ノ作ル可キ文書若クハ圖畫ヲ偽造シ又ハ公務所又ハ公務員ノ作リタル文書若クハ圖畫ヲ變造シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第一百五十六條 公務員其職務ニ關シ行使ノ目的ヲ以テ虛偽ノ文書若クハ圖畫ヲ作リ又ハ文書若クハ圖畫ヲ變造シタルトキハ印章、署名ノ有無ヲ區別シ前二條ノ例ニ依ル



第一百五十七條 公務員ニ對シ虚偽ノ申立ヲ爲シ權利義務ニ關スル公正證書ノ原本ニ不實ノ記載ヲ爲サシメタル者ハ五年以下ノ懲役又ハ十圓以下ノ罰金ニ處ス

公務員ニ對シ虚偽ノ申立ヲ爲シ免狀、鑑札又ハ旅券ニ不實ノ記載ヲ爲サシメタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス  
前二項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第一百五十八條 前四條ニ記載シタル文書又ハ圖畫ヲ行使シタル者ハ其文書又ハ圖畫ヲ偽造若クハ變造シ又ハ虚偽ノ文書若クハ圖畫ヲ作り又ハ不實ノ記載ヲ爲サシメタル者ト同一ノ刑ニ處ス  
前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第一百五十九條 行使ノ目的ヲ以テ他人ノ印章若クハ署名ヲ使用シテ權利、義務又ハ事實證明ニ關スル文書若クハ圖畫ヲ偽造シ又ハ偽造シタル他人ノ印章若クハ署名ヲ使用シテ權利、義務又ハ事實證明ニ關スル文書若クハ圖畫ヲ偽造シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス  
他人ノ印章ヲ押捺シ若クハ他人ノ署名シタル權利、義務又ハ事實證明ニ關スル文書若クハ圖畫ヲ變造ルタル者亦同シ  
前二項ノ外權利、義務又ハ事實證明ニ關スル文書若クハ圖畫ヲ偽造又ハ變造シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第一百六十條 醫師公務所ニ提出ス可キ診斷書、檢案書又ハ死亡證書ニ虚偽ノ記載ヲ爲シタルトキハ三年以下ノ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第一百六十一條 前二條ニ記載シタル文書又ハ圖畫ヲ行使シタル者ハ其文書又ハ圖畫ヲ偽造若クハ變造シ又ハ虚偽ノ記載ヲ爲シタル者ト同一ノ刑ニ處ス  
前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

右ニ掲ケタル文書偽造罪ノ規定中ニハ文書及ヒ圖畫ノ偽造變造又ハ偽造變造ニ係ル文書圖畫ノ行使ヲ處罰スル規定アルヲ知ルヘシ、而シテ予輩ハ本罪ノ要件ヲ説明スルニ先チ文書偽造罪ニ關スル根本觀念ヲ論述セント欲ス、是レ文書偽造罪ニ付テハ特ニ學者間議論ノ存スル所ニシテ畢竟其採ル所ノ主義ニ因テ結論ヲ異ニスルノミナラス、其根本觀念ヲ知ルニアラスンハ本罪ノ適用範圍ヲ知ルコトヲ得サレハナリ。

## 第二 文書偽造罪ニ關スル根本觀念

文書偽造罪ノ觀念ヲ定ムルニ付テ二説アリ即チ形式主義及ヒ實質主義是ナリ(一)形式主義ハ文書偽造罪ノ規定ヲ以テ文書ノ形式ノ真正ヲ保護スルモノニシテ文書ノ内容ノ虚偽ナル場合ハ勿論縱令其内容カ眞實ニ符合スルモ苟

文書偽造罪ノ  
根本觀念



文書ノ形式ハ他  
 人ヲ作ルハ義  
 人トシテ名義  
 例ハハ甲ヲ以  
 ノ名ヲ以テカ  
 書ヲ作ルカ如  
 如カ文乙フ書

形式主義ヲ採  
 ルトシテ實主  
 ナルヲ生ズル  
 果テ生ズル結

モ其形式ヲ偽ハルトキハ文書偽造罪ヲ以テ論スルニ缺クル所ナシ、換言スレ  
 ハ真正ノ名義人以外ノ者カ作製スルトキハ内容ノ眞實ナルト否トヲ問ハス  
 常ニ文書ノ偽造ナリト(二)實質主義ハ文書偽造罪ノ規定ヲ以テ文書ニ因リ表  
 示セラルル事實又ハ思想ノ眞正ヲ保護スルモノト解スルモノニシテ文書ノ  
 形式ニ偽リアル場合ト雖モ其内容ニ偽リナキトハ文書偽造罪ヲ構成セス換  
 言スレハ文書ノ内容自體カ眞實ト符合セサル場合ニ於テノミ文書ノ偽造ナ  
 リト。

右兩說ヨリ生スル結果ノ差異ヲ示セハ大略左ノ如シ。

- 一 形式主義ニ依レハ文書ノ偽造ニハ(イ)形式ヲ偽ハル場合、即チ作成名義人ニ偽リアル場合(例ヘハ甲カ乙ノ名義ヲ騙リテ文書ヲ作ルカ如シト) (ロ)實質即チ内容ヲ偽ハル場合(例ヘハ借用證ヲ贈與證ト書クカ如シト)アリ、實質ヲ偽ハル場合ハ作成名義人自ラ爲ス場合ヲ普通トナスモ作成者名義人以外ノ者ノ爲ス場合ヲモ想像スルヲ得ヘシ、後ノ場合ハ當然形式ニモ偽ハリアルモノトス、而シテ學問上文書ノ形式ニ偽リアル場合ヲ有形偽造ト謂ヒ實

質ヲ偽ハル場合即チ虛偽ノ記載アル場合ヲ無形偽造ト稱ス、其ニ文書偽造罪ノ觀念ヲ缺カス、尙ホ文書ノ形式ヲ偽ハル場合ニ其他人ハ實在人タルコトヲ要スルヤ將タ虛無人ニテモ可ナリヤニ付テモ議論アリ、予輩ハ本罪ノ性質カ公ノ信用ヲ害スルニアルヲ以テ苟モ世間一般人ヲシテ其者カ實在セルモノト誤認セシムルニ足ル場合ハ虛無人ニテモ可ナリト解ス。

二 實質主義ニ依レハ文書自體ノ内容ニ偽ハリ場合ニノミ文書偽造罪ヲ成立スルカ故ニ專ラ其内容ノミヲ觀察シテ偽造ノ有無ヲ判斷ス、而シテ文書ノ内容ニ偽ハリアル場合トハ即チ虛偽ノ記載ニ外ナラス、故ニ此主義ニ於テハ所謂有形偽造ナルモノヲ認ムルヲ得スシテ唯無形偽造ノミ文書偽造罪ナリ、文書ノ内容ヲ偽ハル場合ハ作成名義人自ラ爲ス場合ヲ普通トナスモ其以外ノ者ノ爲ス場合ヲモ想像シ得ルハ形式主義ト同一ナリ、尙ホ此主義ニ於テハ實在人ヲ標準トシテ論スルモノナルコト明カナリ、何トナレハ證書ノ名義人カ實在人ニアラサルトキハ其證書ノ内容自體モ當然虛偽ナルヲ以テ其内容ノ眞偽ヲ判斷スルノ必要ナケレハナリ。



兩主義ノ中何  
レカ可ナルヤ

形式主義ノ正  
當ナル理由

文書偽造罪ノ  
構成要件

廣義ノ文書ニ  
ハ狹義ノ文書  
及ヒ圖畫ヲ包  
含ス

右二說中何レノ說ヲ以テ我刑法ノ解釋上正當ナリヤ。實質主義ノ理由ヲ聞クニ曰ク文書偽造罪ヲ罰スルノ趣旨ハ偽造ノ文書ニ依テ眞實ナラサル事實カ眞實ナリトノ證據ヲ得以テ事實ノ真相ヲ害スルノ虞アレハナリ、從テ文書カ事實ノ眞正ト合一スルトキハ文書偽造當然ノ實害ヲ生スル虞ナキモノナルカ故ニ之ヲ犯罪トスヘキモノト非スト、然レトモ予輩ハ此說ニ服スルヲ得ス、何トナレハ我刑法ハ文書其モノノ眞正ヲ維持シ文書ニ對スル公ノ信用ヲ確實ナラシメンコトヲ以テ主タル目的トシ内容ノ虛偽ナルコトヲ條件トシテ處罰スル場合ハ寧ロ例外ナリト解スヘキカ故ニ形式主義ヲ以テ正當ト信ス。(形式主義ハ現今我國ニ於ケル通説ナリ)

### 第三 文書偽造罪ノ構成要件。

一 目的物 本罪ノ目的物ハ文書及ヒ圖畫ナリ。學者此二ツヲ總稱シテ廣義ノ文書ト名ツク、共ニ吾人ノ思想ヲ記載シタル物體ナリ、唯二者ノ異ナル所ハ一ハ言語符號ヲ以テ記載シ他ハ形象符號ヲ以テ記載スルノ差アルノミ我刑法ハ言語符號ヲ以テ思想ヲ記載セル物ヲ文書ト稱シ圖畫ト區別ス

言語符號トハ  
發音シ得ヘキ  
モノヲ謂フ

左ニ文書及ヒ圖畫ノ何タルヤヲ詳論スヘシ

(4) 文書 文書トハ言語符號ヲ以テ思想ヲ記載セル物體ナリ。(一)言語符號ニハ文字ト準文字トアリ、文字ノ何タルヤハ特ニ説明ヲ要セス、準文字トハ電信符號盲人ノ使用スル凸凹符號速記符號等トス。(二)文書ハ思想ヲ記載セル物體ナルカ故ニ個々ニ文字又ハ準文字ヲ羅列シ又ハ思想ヲ表示スルノ準備トシテ作りタル草案ノ如キハ思想ノ表示ト見ルヲ得サルヲ以テ文書ニ非ス。(三)文書ハ又思想ヲ記載セル物體其モノナルヲ以テ其記載自體ヨリ思想ヲ認識シ得ルモノタルヲ要ス故ニ記載自體ヨリ思想ヲ認識シ能ハスシテ文字以外ニ存スル周圍ノ狀況ヲ綜合シテノミ一定ノ意味ヲ表ハスモノハ文書ニ非ス、例ヘハ名刺門札ノ如キハ其文字自體ハ其何人ナルヤヲ示スニ止マリ何等本人ノ思想ヲ表示セサルカ故ニ文書ニ非サルカ如シ、然レトモ一般ノ慣習上用ヒラルル節約式ニ依ル思想ノ記載ハ尙ホ文書タルヲ得ヘシ例ヘハ鐵道乗車券、電車切符、入場券ノ如キ是ナリ。(四)文書タル思想ノ記載ハ法律事實ニ關スルモノタルヲ要ス故



ニ法律事實ニ關係ナキ著書小説詩歌艶文等ノ如ク專ラ學問上又ハ感情上ノ思想ヲ表示セルコトヲ目的トスル文書ハ刑法上ニ所謂文書ニ非ス以上ノ要件ヲ具備スルトキハ記載セル材料ノ種類記載ノ形式等ハ法律ノ敢テ問フ所ニ非ス。

形象符號トハ物ニ象リテ作ラレタルモノヲ謂フ

(ロ) 圖畫 圖畫トハ形象符號ヲ以テ思想ヲ記載セル物體ナリ。圖畫ハ文書ト等シク思想ヲ表示スル手段トシテ記載セル物體ナルモ記載ノ方法ニ於テ文書ト異ナルノミ、而シテ法律上保護セララルル圖畫ハ法律事實ニ關スル證據タルヲ要スルコト文書ニ於ケルト異ナルコトナシ從テ單純ナル美術畫ノ如キハ本罪ニ於ケル圖畫ニ屬セス。

二 行爲 本罪ノ行爲ヲ分ケテ偽造、變造及ヒ行使ノ三種トナス。

文書ノ偽造トハ何ソヤニ付テハ前述セルカ如ク形式主義ヲ採ルト實質主義ヲ採ルトニ因テ結論ヲ異ニス、予輩ハ形式主義ヲ採ルカ故ニ以下其前提ノ下ニ之ヲ説明スヘシ。

(イ) 偽造 文書ノ偽造ノ意義ニ廣狹ノ二義アリ廣義ノ偽造トハ他人ノ作

文書ノ偽造トハ何ソヤ

成名義又ハ其内容ヲ偽ハリ新ニ文書ヲ作成スルヲ謂ヒ狹義ノ偽造トハ他人ノ作成名義ヲ偽ハリテ新ニ文書ヲ作成スルヲ謂フ、予輩ハ之ヲ廣義ニ解シ前者ヲ有形偽造ト謂ヒ後者ヲ無形偽造ト稱ス。

甲 有形偽造 有形偽造トハ他人ノ作成名義ヲ偽ハリテ文書ヲ新ニ作成スルヲ謂フ、例ヘハ他人ノ證書ヲ作ル權利ナキ某甲某カ乙某ノ名ヲ騙リテ乙某ノ借用證書ヲ新ニ作成スルカ如シ、苟モ他人ノ名ヲ騙リテ他人名義ノ文書ヲ作成スル以上ハ其内容カ眞實ト一致スルモ文書偽造タルニ缺クル所ナシ前例ニ於テ乙某カ實際某甲ノ作りタル借用證書ト同一ノモノヲ作ルヘキ場合ト雖モ某甲某ハ他人ノ文書ヲ偽造シタルモノトス、尙ホ他人名義ヲ偽ハルトキハ其偽ハラレタル他人カ實在人タルト否トハ罪ノ成立ニ關係ナシ其理由ハ前段ノ説明ヲ參照スヘシ然レトモ其偽ハラレタル人カ存在セサルコトヲ何人ニモ知り得ヘキ場合ハ此限リニ在ラス、例ヘハ大正五年一月一日ノ日附ヲ以テ伯爵伊藤博文、男爵桂太郎等ノ名ヲ以テ文書ヲ作成シタルカ如キハ偽造罪ヲ



構成セサルヘシ。

要スルニ當該名義カ普通一般人ヲシテ真正ノ文書ト誤認セシムルヲ得ルヤ否ヤヲ標準トシテ決スヘキモノナリ。

次ニ問題タルハ代理資格ヲ濫稱シテ文書ヲ作成スルトキハ有形偽造トシテ處罰スルヲ得ルヤ是ナリ、此ノ點ニ付テ學者間議論ノ存スル所ナレトモ予輩ハ自己ノ名義ヲ用ヒ文書ヲ作成シタル場合ト雖モ他人ノ代表者ナリト偽ハリタルトキ(例ヘハ、甲某代理人乙某ト記シタルカ如キ)ハ自己ノ文書ヲ作成シタルモノニ非スシテ他人ノ文書ヲ作成シタルモノナリ、何トナレハ文書ノ作成者ハ本人ノ代理人トシテ本人ノ名義ヲ表ハシ本人ノ爲メニ文書ヲ作成シタルモノニシテ其效力ハ直接本人ニ對シテ生スヘキ性質ヲ有スルモノナレハ他人ノ作成名義ヲ偽ハリタルモノト論斷スルニ充分ナレハナリ。

二 無形偽造 無形偽造トハ文書ノ内容ニ偽ハリアル場合ヲ謂フ換言スレハ真正ナル文書ニ於ケル虛偽ノ記載ナリ、即チ無形偽造カ有形偽

代理資格ノ濫稱ハ文書偽造ナリヤ

虛偽ノ記載

造ト異ナレハ自己ノ權限上文書ヲ作成スルコトヲ得ル者カ其内容ヲ偽ハル點ニアリ。我刑法ニ於テ虛偽ノ記載ヲ處罰スル場合ハ第五百十六條第五百十七條第六十條等特別ノ明文アル場合ニ限ルモノト解スヘキナリ。

茲ニ問題タルハ特定ノ權限ヲ有スル者カ權限ヲ濫用シテ新ニ文書ヲ作成スル行爲ハ罪ト爲ルヤ。例ヘハ會社ノ取締役カ自己又ハ他人ノ爲メニ業務ノ範圍外ニ於テ小切手ヲ振出し其取引銀行ヨリ金員ヲ引出シタルカ如キ是ナリ、此點ニ付テハ學說判例一致セサル所ナリト雖モ予輩ハ權限ヲ濫用シテ新ニ文書ヲ作成スルハ所謂作成名義ヲ偽ハリタルモノナレハ虛偽ノ記載ニ非スシテ有形偽造ナリ因テ本問ハ之ヲ積極ニ解スルヲ正當ト信ス(同說大審院判決、大場博士等)若シ夫レ特定ノ權利ヲ有スル者カ其權限ヲ濫用シ文書ヲ作製スル場合ハ常ニ虛偽ノ記載ニシテ有形偽造ニ非ストセハ公務員ノ爲ス虛偽ノ記載ハ法律ノ明文上當然之ヲ處罰シ得ルモ公務員以外ノ者ノ爲ス虛偽ノ記載

一定ノ權限ヲ有スル者カ權限ヲ濫用シテ新ニ文書ヲ作成スル行爲ハ罪ト爲ルヤ



小切手ハ有價  
證券ナリハ四  
二年判例有  
價證券ハ文書  
ノ一種ナリ

文書ノ變造ト  
ハ何ソヤ

ハ法律ニ明文ナキモノトシテ之ヲ不問ニ附スルノ結果ト爲リ立法ノ精神ニ反スルニ至ルヘシ此問題ニ對シ明治四十四年ノ大審院判決ニ於テ會社ノ取締役ハ其權限外ノ事項ニ付キ會社ヲ代表スルノ資格ヲ有セサレハ其權限ヲ踰越シテ會社ノ名義ヲ用ヒ小切手ヲ振出シタル行爲ハ有價證券偽造罪ヲ構成スルモノト判示セルハ予輩ノ所論ト一致スルモノニシテ正當ナル判決ナリ(有價證券偽造罪ノ說明參照)

(ロ) 變造 文書ノ變造ノ意義ニ關シ如何ナル程度ノ變更ヲ以テ變造ト爲スヤニ付テハ學說一致セサル所ナリト雖モ予輩ハ文書ノ變造トハ眞正ナル文書ニ對シ其文書ノ性質ヲ變更セサル範圍内ニ於テ其内容ヲ不法ニ變更ヲ加フルヲ謂フモノト解ス。故ニ例ヘハ金額三百圓ノ證書ヲ五百圓トスルハ變造ナルモ借用證書ヲ贈與證書ニ變更スルハ文書ノ變造ニ非スシテ偽造ナリトス(同說大審院判例大場博士等)然ルニ作成名義ヲ變更スルトキハ文書ノ偽造トナルモ他ヲ變更スルハ常ニ變造ナリトノ說(小崎學士)ナキニアラサルモ予輩ハ之ヲ採ラス而シテ其變更セラレタ

文書ノ行使ト  
ハ何ソヤ

ル内容カ眞實ニ合スルヤ否ヤハ罪ノ成立ニ關係ナシ。

(ハ) 行使 文書ノ行使トハ偽造又ハ變造ニ係ル文書ヲ眞正ナル文書トシテ證據ニ使用スルヲ謂フ。其偽造若クハ變造ニ係ル文書ハ自己ノ作成シタルモノナルト他人ノ作成シタルモノナルトヲ問ハス而シテ行使ハ偽造變造ニ係ル文書其物ヲ眞文書トシテ使用スルヲ要スルカ故ニ眞文書ノ寫本ナリト詐ハリ又ハ其内容ヲ單ニ朗讀スルカ如キハ行使ニ非ス又證據ニ使用スルヲ要スルカ故ニ保管ノ爲メ他人ニ交付スルカ如キハ行使ニ非ス次ニ使用トハ提示ヲ受ケタル他人カ其内容ヲ認識シ得ヘキ程度ニ措クヲ以テ充分トナスカ故ニ文書ノ種類ニ依リ或ハ他人ニ交付又ハ提示スルニ依テ使用ト爲ルコトアリ或ハ公務所又ハ會社等ニ備付クルニ依テ使用ト爲ルコトアルヘシ。

三 故意 故意ハ目的物ノ性質及ヒ行爲即チ偽造變造行使ノ觀念ヲ必要トスルハ勿論偽造變造ニ付テハ特ニ行使ノ目的アルコトヲ要シ行使ニ付テハ法律事項ニ關シテ證據ニ使用スルノ觀念アルコトヲ必要トス。



第四 本罪ノ體様

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪 第三章 偽造罪 第二節 文書偽造ノ罪 四八四

文書偽造罪ノ行爲ニハ偽造變造行使ノ三種アルコト前述セルカ如シ然ルニ  
刑法ハ本罪ノ物體タル文書ヲ標準トシテ規定セルヲ以テ予輩ハ法文ノ順序  
ニ從ヒ各體様ヲ說述セント欲ス。

一 詔書其他ノ大權文書ノ偽造罪(第四百五條)

本罪ハ行使ノ目的ヲ以テ御璽國璽若クハ御名ヲ使用シテ詔書其他ノ文書  
ヲ偽造シ又ハ偽造シタル御璽國璽若クハ御名ヲ使用シテ詔書其他ノ文書  
ヲ偽造シ或ハ御璽國璽ヲ捺捺シ又ハ御名ヲ署シタル詔書其他ノ文書ヲ變  
造スルニ因テ成立ス。(イ)御璽トハ天皇ノ印章ナリ(ロ)國璽トハ日本帝國ノ  
印章ナリ(ハ)御名ハ天皇ノ親署ナリ、文書ノ種類ハ詔書勅書上諭其他御璽國  
璽御名ヲ使用セル一切ノ文章ヲ謂フ(ニ)詔書トハ皇室ノ大事ヲ宣詔シ又ハ  
大權施行ニ關スル勅旨ヲ宣詔スル文書ヲ謂ヒ(ホ)勅書トハ文書ニ因リ發ス  
ル勅旨ニシテ宣詔セサル場合ノ文書ナリ(ヘ)上諭トハ憲法ノ改正皇室典範  
法律、勅令、國際條約、豫算等ノ公布ニ付キ附セラルル所ノモノナリ。

御璽ハ金材方  
形ニシテ一天  
皇ノ國璽ハ天  
方ニシテ天  
材方ニシテ天  
之璽トアリ、  
大日本帝國

詔書其他ノ文  
書偽造罪

公務文書ノ有  
形偽造罪

二 公務文書ノ有形偽造罪(第四百五條)

本罪ハ公務所又ハ公務員ノ作ルヘキ文書ヲ偽造又ハ變造スルニ因テ成立  
ス。公務所又ハ公務員ノ意義ニ付テハ總則ノ說明ヲ参照スヘシ、公務所又  
ハ公務員ノ作ルヘキ文書ヲ公務文書ト謂フ、公務文書タルニハ公ノ資格ア  
ル者カ其職權ノ範圍内ニ於テ一定ノ形式ニ從ヒ作成スルコトヲ要ス、故ニ  
公ノ資格ナキ者カ又ハ職權外ニ於テ作ラレタル文書其他一定ノ形式ニ欠  
缺アルモノノ如キハ公文書ニ非サルナリ。

公務文書トハ  
公文書ト同意  
義ナリ

三 公務員ノ無形偽造罪(第四百五條)

本罪ハ公務員カ其職務ニ關シ行使ノ目的ヲ以テ虛偽ノ文書ヲ作り又ハ之  
ヲ變造スルニ因テ成立ス。  
本罪ノ目的タル文書ハ公文書タルヲ要ス、而シテ本罪ノ行爲ハ文書ノ内容  
ヲ偽造シ又ハ變造スルニアルカ故ニ内容カ眞實ニ反スル場合ニ限り之ヲ  
處罰スヘキヤ明カナリ、是レ有形偽造ト異ナル點ナリ。

公務員ノ無形  
偽造罪

茲ニ問題タルハ公務員カ虛偽ノ意見判斷ヲ記載シタルトキハ本罪ヲ構成



公務員カ虚偽ノ意見判断ヲキハ記載タルトキハ偽造タルカ

公務員ヲシテ不實ノ記載ヲ爲サシムル罪

スルヤ否ヤ例ヘハ司法警察官カ事件ヲ檢事ニ送致スル場合ニ虚偽ノ意見判断ヲ記載シテ文書ヲ作成スルカ如シ此點ニ付テハ議論アル所ナルモ予輩ハ文書ハ思想ヲ記載セルモノナレハ思想ノ一部ナル意見判断等ノ如キモ亦文書ノ内容ヲ爲スモノト認ムルカ故ニ積極ニ解スルヲ相當ト信ス。

四 公務員ヲシテ無形偽造ヲ爲サシムル罪(第百五十七條)

本罪ハ公務員ニ對シ虚偽ノ申立ヲ爲シ公正證書ノ原本又ハ免狀鑑札旅券ニ不實ノ記載ヲ爲サシムルニ因テ成立ス。

本罪カ前第百五十六條ノ罪ト異ナルハ犯意ナキ公務員ヲ利用スル點ニアリ本罪ノ物體タルイ公正證書トハ廣ク權利義務ニ關スル一切ノ公文書ヲ包含ス例ヘハ公證人ノ作成スル公正證書戸籍吏ノ作ルヘキ身分登記簿不動産登記簿等ノ如シロ免狀トハ公務員カ一個人ニ對シ一定ノ權能ヲ附與スル證書ヲ謂フ例ヘハ辯護士醫師教員等ノ免狀ハ勿論官公立學校ノ卒業證書ヲモ包含スヘシハ鑑札トハ一定ノ行爲若クハ業務ヲ爲ス者ニ對シ行政警察ノ必要上交付ヒラル、モノヲ謂フニ旅券トハ外國ニ旅行スル者ニ

改正ノ趣旨

私文書ノ有形偽造罪

對シ附與スル所ノモノヲ謂フ。

本罪ニ付一言スヘキハ從來ヨリ本條第一項公正證書ノ原本不實記載ノ罪ハ其刑輕キニ失スト稱セラレ殊ニ戰時下ニ於テ臨時資金調整法ノ適用ノ結果會社ノ新設擴張等カ制限セラレタル爲メ登記簿上ニ殘存セル會社ノ商號其他ノ事項ニ付不實ノ變更登記ヲ爲シ又ハ實質ノ備ハサル會社ヲ軍需會社其他有望ナル會社ナルカ如ク整ヒ不法ノ利益ヲ圖ル犯罪ノ頻出スルニ鑑ミ今回ノ改正ニ際リ特ニ刑罰ヲ加重シタルノ點ニ在リ。(臨時資金調整法參照)

五 私文書ノ有形偽造罪(第百五十九條)

本罪ハ行使ノ目的ヲ以テ權利義務又ハ事實證明ニ關スル文書又ハ圖畫ヲ偽造又ハ變造スルニ因テ成立ス。

所謂權利義務ニ關スル文書トハ直接ニ權利義務ノ發生變更消滅等ノ效力ヲ來ス文書ヲ謂ヒ事實證明ニ關スル文書トハ事實證明ノ用ニ供セラルル文書ヲ謂フ他人ノ印章若クハ署名ヲ使用シタル場合ト否ラサル場合トニ因テ處罰ヲ異ニス。



六 私文書ノ無形偽造罪(第百六條)

本罪ハ醫師カ公務所ニ提出スヘキ診斷書檢案書又ハ死亡證書ニ虛偽ノ記載ヲ爲スニ因テ成立ス。本罪ノ主體ハ醫師ニ限ル(イ)診斷書トハ醫師カ診察ヲ爲シタル患者ノ病狀ヲ證明スル爲メ作成スル證書ヲ謂ヒ(ニ)檢案書トハ醫師カ人ノ身體ヲ検査シタル上其結果ヲ證明スル爲メ作成スル文書ヲ指ス(ハ)死亡證書トハ即チ死亡診斷書ヲ謂フ、醫師カ既ニ診察シタル者ノ死亡ヲ證明スル文書ナリ、人ノ死屍ヲ取調ヘ其死因ヲ記スハ檢案書ナリ、公務所ニ提出スヘキモノタルヲ要件トス。故ニ一私人ニ對シ虛偽ノ死亡證書ヲ提出シテ金員ヲ得タル場合ノ如キハ詐欺取財ヲ構成シ得ルモ本罪タラス

七 偽文書行使罪(第百五十八條)

即チ法律ハ偽造變造ノ公文書又ハ私文書ヲ行使スル場合ヲ處罰ス、然ラハ文書ヲ偽造變造シテ行使シタルトキハ如何ニ處分スヘキヤノ問題ヲ生ス、此場合ニハ刑法第五十四條第一項ニ依リ其最モ重キ刑ヲ以テ處斷スヘキモノトス。而シテ刑法ノ規定ハ偽造變造ノ刑期ト行使ノ刑期トハ何レモ同

一ナルヲ以テ(第百五十八條)刑法第十條ニ依リ犯情ニ依リ其輕重ヲ定ムヘキモノトス。而シテ通常ノ場合ニ於テ文書ノ偽造又ハ變造ト偽文書ノ行使トヲ比較スレハ後者ヲ以テ前者ヨリ犯情重シトセサルヘカラス。

第五 刑罰 本罪ノ刑罰ハ懲役禁錮又ハ罰金ナリ、詳細ハ前掲法文參照

第六 未遂 偽造變造ノ未遂ニ付テハ止タ公務員利用ノ無形偽造ニ付テノミ其未遂ヲ處罰ス、而シテ行使ニ付テハ總テ之ヲ處罰スヘキモノトセリ。

練習問題

(一) 文書偽造ノ觀念ニ關スル學說ヲ論評スヘシ。大正八年文官高等試驗

(解説) 文書偽造ノ觀念ニ付テハ形式主義ト實質主義トアリ而シテ現行法

ノ解釋トシテハ形式主義ヲ通説トスルコト前第二ニ之ヲ説ケリ。

(二) 文書偽造罪ヲ論セヨ。

(解説) 本問ニ付テハ第一文書偽造罪ノ意義ヲ舉ケ第二ニ文書偽造罪ノ要

件トシテ(一)目的物ノ文書ナルコト文書ニ公文書ト私文書トアルコト(二)

行爲ハ偽造スルコト偽造ニ有形偽造ト無形偽造トアルコト(三)本罪ハ行

昭和四年第五十二號試驗  
大正三年中央大學試驗



使ノ目的ヲ以テ偽造スルコトヲ要スルコト等ヲ論スヘシ。

(三) 文書ノ偽造、變造及ヒ毀棄ヲ區別スル標準如何。

大正十二年判檢事試驗  
大正十一年判檢事試驗

(解説) 本問ハ偽造、變造ノ區別及變造ト毀棄ノ區別ニ分チテ説明スヘシ。

一 文書ノ偽造トハ他人ノ作製名義ヲ僞ハリ新ニ文書ヲ作成スルヲ謂ヒ文書ノ變造トハ真正ナル文書ノ内容ヲ不法ニ變更スルヲ謂フ、故ニ兩者ノ區別ハ前者ハ新ニ文書ヲ作成スルニ反シ後者ハ既ニ成立セル文書ヲ變更スルニアリ、次ニ變造ハ文書ノ内容ノ一部ヲ變更スルニ在ルヲ以テ内容ノ全部ヲ新ニスル場合又ハ作成名義ヲ變更スルカ如キハ偽造ニシテ變造タラス。

二 文書ノ毀棄トハ文書ノ用ヲ失ハシムル行爲ナリ其一部タルト其全部ニ亘ルトヲ問ハス、故ニ例ヘハ證書面ノ文言ヲ抹消スルカ如シ、然ラハ文書ノ變造ト如何ナル點ニ於テ異ナルカ、固ヨリ文書ノ變造ハ廣キ意味ニ於テ毀棄ノ一種ナリト雖モ毀棄ハ其用ヲ失ハシムル行爲ナル

ヲ以テ其用ヲ失ハシムルニ至シテ其一部ノ毀損又ハ抹消ニ依リ文意ニ變更ヲ來ス意思ヲ以テスルトキハ毀棄ニ非スシテ變造ナリ。要スル毀棄ト變造トノ區別ハ變更ノ程度ト行爲者ノ意思ヲ標準トシテ決スヘキモノト信ス。

(四) 文書偽造罪ニ於ケル行使ノ意義及ヒ既遂ノ時期ヲ問フ。

明治四十年日本大學試驗  
大正四年山形縣警部試驗

(解説) 文書ノ行使トハ偽造又ハ變造ニ係ル文書ヲ真正ナル文書トシテ證據ニ使用スルヲ謂ヒ、而シテ之カ既遂ノ時期ハ文書ヲ他人ノ認識シ得ヘキ状態ニ置クヲ以テ足り實際ニ他人カ其内容ヲ認知シタルノ事實アルコトヲ要セス、故ニ例ヘハ偽造ニ係ル文書ヲ證據トシテ裁判所ニ提出シ又ハ辯護士ニ提示スルニ由テ行使ノ既遂ト爲ルカ如シ。

第三節 有價證券偽造ノ罪

有價證券ハ一種ノ文書ニ外ナラスト雖モ表面上ノ權利ノ行使又ハ處分ニ證



券ノ占有ヲ要件ト爲シ證券自體カ權利ナルカ如キ特質ヲ有シ經濟上ノ交通ニ於テ殆ント通貨ト同一ノ地位ヲ有スルカ故ニ有價證券ヲ以テ文書ノ一種トシテ保護スルヲ以テ充分ナリト爲セス特ニ一章ヲ設ケテ之ヲ保護セル所以ナリ。

第十八章 有價證券偽造ノ罪

第六十二條 行使ノ目的ヲ以テ公債證書、官府ノ證券、會社ノ株券其他ノ有價證券ヲ偽造又ハ變造シタル者ハ三月以上十年以下ノ懲役ニ處ス

行使ノ目的ヲ以テ有價證券ニ虛偽ノ記入ヲ爲シタル者亦同シ

第六十三條 偽造變造ノ有價證券又ハ虛偽ノ記入ヲ爲シタル有價證券ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シ若クハ輸入シタル者ハ三月以上十年以下ノ懲役ニ處ス

前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

刑法ノ規定ニ依レハ有價證券偽造ノ罪ハ(一)有價證券ノ偽造變造虛偽ノ記入ノ罪(二)其行使、交付、輸入ノ罪トヲ規定ス、

左ニ之ヲ分説スヘシ

第一 有價證券ヲ偽造變造シ又ハ虛偽ノ記入ヲ爲ス罪(第六十二條)

有價證券ヲ偽造變造シ又ハ虛偽ノ記入ヲ爲スノ罪

有價證券ノ種類

本罪ハ行使ノ目的ヲ以テ公債證書官府ノ證券會社ノ株券其他ノ有價證券ヲ偽造變造シ又ハ虛偽ノ記入ヲ爲スニ因テ成立ス。

有價證券ノ意義ハ曩ニ之ヲ説ケリ、刑法ハ有價證券ノ例トシテ公債證書官府ノ證券會社ノ株券ヲ示セリ、茲ニ官府ノ證券トハ大藏省證券郵便爲替證書ノ類ヲ謂フ、刑法例示以外ノ有價證券ハ商法ニ規定セル各種ノ手形、社債券、貨物引換證等アリ、次ニ有價證券ハ其性質上權利義務ニ關スル文書ノ一種ナルカ故ニ右ニ説明セル以外ニ於テ一般文書ノ要件ヲ具備セサルヘカラサルヤ明カナリ、而シテ本罪ハ行使ノ目的ヲ以テ有價證券ヲ偽造變造シ又ハ虛偽ノ記入ヲ爲スニ在リ、偽造變造ノ何タルヤハ文書偽造罪ノ説明ヲ參照スルニ因テ明カナリ。所謂虛偽ノ記入トハ眞實ニ反スル事項ヲ記入スルヲ謂ヒ例ヘハ裏書引受保證等ニ關スル虛偽ノ記入ヲ爲スカ如シ、他人ノ名義ヲ詐リ裏書記入ヲ爲シタル場合ノ如キハ普通ノ有形偽造タルヘキコト疑ナシト雖モ法律上所謂虛偽ノ記入ナリト觀ルヘシ。

第二 偽造ノ有價證券ヲ行使交付輸入スルノ罪(第六十三條)

偽造ノ有價證券ヲ行使交付輸入スル罪



本罪ハ偽造變造シ又ハ虛偽ノ記入ヲ爲シタル有價證券ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シ若クハ輸入ヲ爲スニ因テ成立ス。

行使ノ意義ニ付テハ文書ノ行使ニ付キ説明セル所ヲ交付及ヒ輸入ノ意義ハ通貨偽造罪ノ説明ヲ參照スヘシ、而シテ刑法カスノ如ク行使ノ外交付及ヒ輸入ヲ處罰スル規定ヲ設ケタルハ信用經濟ノ發達セル現今ノ狀態ニ於テ有價證券ノ流通殆ト通貨ト異ナル所ナクシテ危險少ナカラサルヲ以テ通貨偽造罪ノ規定ニ倣ヘタルモノナリ。

第三 刑罰 本罪ノ刑罰ハ三月以上十年以下ノ懲役ナリ、而シテ行使交付輸入ニ付テハ特ニ未遂罪ヲ處罰スルコトヲ認ム。

#### 練習問題

- (一) 會社ノ取締役カ取締役名義ヲ以テ小切手ヲ振出し其會社ノ取引銀行ヨリ金員ヲ引出シ之ヲ自己ノ爲メニ消費シタリ刑法上ノ責任如何。

大正三年度判檢事試験

解説 本問ニ付テハ學者間議論ノ存スル所ニシテ判例モ亦學說ト一致セ

スト雖モ有價證券偽造罪ヲ成立スヘキコトハ前第二節ニ説明セルカ如シ。尙ホ刑ノ適用ニ付テハ第五十四條ノ説明ヲ參照スヘシ。

- (二) 他人ノ印章又ハ署名ヲ偽造シタル者カ有價證券ヲ偽造シタル場合ニ於ケル刑法上ノ責任如何。

(解説) 本問ハ要スルニ牽連犯トシテ第五十四條ヲ適用スヘキヤ將タ有價證券偽造ノ單純一罪トシテ處分スヘキヤニ在リ、予輩ハ本問ハ單ニ有價證券偽造ノ一罪ノミヲ構成スルモノニシテ第五十四條ヲ適用スヘキモノニ非スト信ス、其理由ハ之ヲ社會取引上ノ實際ニ求ムルモノナリ、即チ實際ノ慣習上有價證券ノ作成ニ付テハ印章若クハ署名ヲ使用セサルコト絶無ナルヲ以テ印章及ヒ署名ハ有價證券ノ一要素ナリト解シ印章又ハ署名ノ偽造ハ當然有價證券ノ偽造中ニ包含セララルモノト解ス、判例モ亦同趣旨ナリ。(明治四十二年及ヒ明治四十三年大審院判決)

#### 第四節 印章偽造ノ罪







ル影蹟ヲ謂フ

署名トハ何ソ

本罪ノ物體タ  
ル印章及ヒ署  
名ノ種類

公務所ノ印章  
ト記號トノ區  
別如何

蓋シ本罪ノ處罰ハ信用ニ對スル危害ヲ防止セントスルニアルヲ以テ獨リ  
印類又ハ印影ノミヲ以テ印章ナリト解スルカ如キハ印章ニ關スル法益ノ  
保護ヲ薄弱ナラシムルノ虞ナシトセス是レ予輩カ印類及ヒ印影ノ二者ヲ  
以テ刑法ニ所謂印章ナリト解スル所以ナリ。

二 署名 署名トハ法律上關係アル事項ニ付キ證明ノ爲メ記載セル名義ナ  
リ。署名ノ本來ノ意義ヨリ言ヘハ署名ハ自署ノ意味ナルコト明カナルモ  
明治三十三年法律第十七號ハ商法中署名スヘキ場合ニ於テハ記名捺印ヲ  
以テ署名ニ代フルコトヲ得ト規定シ以テ自署ニアラサル署名ノ存在スル  
コトヲ認メラレタル以上ハ木版活字等ヲ使用シテモ亦署名偽造ヲ爲シ得  
ル場合アリト認ムルヲ相當トス。(反對說ハ刑法ニ所謂署名  
ハ自署タルコトヲ要スト)

三 本罪ノ物體タル印章及ヒ署名ハ(一)御璽國璽御名(二)公務所又ハ公務員ノ  
印章及ヒ署名(三)私人ノ印章若クハ署名ノ三種ニ分類ス。公務所ノ印章ニ  
ハ狹義ノ印章ト記號トノ區別アリ、此兩者ノ區別ノ標準ニ付テハ議論アリ、  
第一說ハ印章ノ内容タル符號ノ性質ヲ標準トシ即チ其符號カ發音シ得ハ

印章偽造ニ於  
ケル行爲

キ文字ナルトキハ狹義ノ印章ニシテ然ラサルトキハ記號ナリト第二說ハ  
印章ト使用者トノ關係ヲ標準トシ即チ印章カ使用者ヲ表示シ之ヲ代表ス  
ルモノナルトキハ狹義ノ印章ニシテ然ラサルモノハ記號ナリト、換言スレ  
ハ公文書ニ押捺シテ作成者ノ同一格ヲ表ハスヘキモノハ公用印章ニシテ  
產物商品什物其他文書又ハ有價證書以外ノ物ニ一定ノ文字又ハ符合ヲ押  
捺シ其物ノ上ニ附着セル位置狀態ニ依リ一定ノ證明ヲ認識セシムルモノ  
ハ公用記號ナリ、故ニ例ヘハ大林區又ハ小林區署ノ用ニ供スル<sup>㊦</sup>又ハ<sup>㊧</sup>印  
ノ如キモ亦記號ナリ、予輩ハ判例及ヒ多數說ニ贊シ第二說ヲ正當ト信ス。  
四、本罪ノ目的物タル印章又ハ署名ハ法律事項ノ證明ニ關スルモノタルコ  
トヲ要スルハ明カナリ、故ニ法律事項ニ關係ナキ印章若クハ署名ノ偽造ハ  
本罪ヲ構成セス例ヘハ文人墨客カ掛物又ハ額等ニ用フル落款或ハ雅號等  
ハ本罪ノ物體タラサルカ如シ

第二 行爲 本罪ニ於ケル行爲ハ偽造ト使用ナリ。印章若クハ署名ニハ變造  
ナシ蓋シ印章若クハ署名ノ變造ハ全然印章又ハ署名ノ效用ヲ失フヲ以テ毀



所謂偽造トハ何ソ

棄罪トシテ處罰スルヲ得レハナリ。

一、偽造 所謂偽造トハ權限ナキ者カ真正ナル印章若クハ署名ヲ作成スル行爲ナリ、真正ナル印章若クハ署名ノ要件ニ付キ實質主義ト形式主義トアリ、前者ハ偽造セラレタル印章若クハ署名ハ真正ナル印章若クハ署名ニ酷似スルモノタルコトヲ要シ且ツ其印章ノ所屬者若クハ署名者ノ實在ヲ必要ナリトス、之ニ反シ後者ニ從ヘハ單ニ印章若クハ署名ノ形式上ヨリ真正ナル他人ノ印章若クハ署名トシテ認メ得ラルルヲ以テ充分ナリトス、予輩ハ本罪ノ性質カ公ノ信用ソノモノヲ保護スルニアルカ故ニ形式主義ヲ以テ正當ト信ス、要スルニ偽造ノ要件トシテ通常一般人ヲシテ真正ナル印章若クハ署名ナリト誤信セシムル程度ニ在ルヲ以テ足ル、其程度ハ裁判官ノ決スヘキ事實問題ナリ、

二、使用 使用罪ニハ真正ナル印章若クハ署名ヲ不正ニ使用スル場合ト偽造シタル印章若クハ署名ヲ使用スル場合トアリ印章若クハ署名ノ不正使用ハ舊刑法ニ於テハ之ヲ盜用ト稱シタリ、新刑法ニ於テモ兩者其意義ヲ異

印章署名ノ使用トハ何ソ

ニスルヤ明カナリ

次ニ所謂使用トハ何ソヤニ付テモ學者間議論アル所ナリ然レトモ予輩ハ本罪ノ使用ヲ以テ印章若クハ署名ヲ其用法ニ從ヒ利用スルコト換言スレハ法律事項ノ證明ノ爲メニ物ノ上ニ印類ヲ押捺シ又ハ署名スルヲ謂フモノト解ス

第三 故意 本罪ノ故意ニ付キ注意スヘキハ一般ニ目的物ノ性質及ヒ行爲ヲ認識スルノ外偽造ニ付テハ特ニ行使ノ目的ニ出テタルコトヲ要件トス、故ニ目的ナキ偽造ハ本罪ヲ構造セス、

第四 刑罰 本罪ノ刑罰ハ懲役ナリ、刑量ニ付テハ前掲條文ヲ參照スヘシ而シテ偽造ノ未遂ハ之ヲ罰セサルモ使用ノ未遂ハ之ヲ處罰ス、是レ行爲ノ危險性ヲ斟酌シタルニ因ルモノトス、

練習問題

(一) 印章ノ意義ヲ説明シ公務所ノ印章ト記號トノ區別ヲ辨スヘシ、

大正五年日本大學試験



偽證及ヒ誣告  
罪ヲ設ケタル  
立法上ノ理由

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪 第四章 偽證及ヒ誣告ノ罪 第一節 偽證ノ罪 五〇二  
(解説) 本問ハ第一印章ノ意義第二公務所ノ印章ト記號トノ區別ノ二段ニ  
分チ解答ヲ爲スヲ順序トス而シテ何レモ學者間議論アル所ナルカ故ニ  
可成反對説ヲ駁スルト同時ニ自説ノ長所ヲ擧クルコトニ勉ムヘシ。  
(二) 他人ノ印章ヲ偽造シ之ヲ使用シテ文書ヲ偽造シタル者ノ處分如何  
(解説) 本問ニ付テハ前節有價證券偽造罪ノ説明ヨリ類推スルトキハ自ラ  
明瞭ナルカ故ニ茲ニ贅セス。

### 第四章 偽證及ヒ誣告ノ罪

偽證及ヒ誣告ノ罪ハ司法官廳又ハ懲戒官廳ニ對シテ虛偽ノ申述ヲ爲シ因テ  
官廳ヲシテ事實ノ判斷ヲ誤ラシメ延テ官廳ノ威信ヲ害スルノ危險アルヲ以  
テ刑法ニ於テ特ニ之カ規定ヲ設ケタル所以トス。

#### 第一節 偽證ノ罪

刑法ハ第六十九條乃至第七十一條ニ於テ偽證ノ罪ヲ規定セリ、即チ

##### 第二十章 偽證ノ罪

第六十九條 法律ニ依リ宣誓シタル證人虛偽ノ陳述ヲ爲シタルトキハ三月以  
上十年以下ノ懲役ニ處ス

第七十條 前條ノ罪ヲ犯シタル者證言シタル事件ノ裁判確定前又ハ懲戒處分  
前自白シタルトキハ其刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得

第七十一條 法律ニ依リ宣誓シタル鑑定人又ハ通事虛偽ノ鑑定又ハ通譯ヲ爲  
シタルトキハ前二條ノ例ニ同シ

右ノ規定ニ依リ本罪ノ定義ヲ示セハ左ノ如シ

偽證罪トハ宣誓シタル證人鑑定人又ハ通事カ虛偽ノ陳  
爲スニ因テ成立スル犯罪ナリ。

左ニ要件ヲ分説スヘシ。

第一 主體 本罪ノ主體ハ法律ニ依リ宣誓シタル證人鑑定人又ハ通事ナリ。  
法律ニ依リ宣誓ヲ爲ストハ即チ法律カ宣誓セシメテ眞實ヲ聞クヘキコトヲ  
要求シタル場合ナリ、故ニ例ヘハ宣誓セシテ陳述ヲ爲ス事實參考人又ハ軍  
人軍屬ト爲ルニ當リ誠意ヲ守ルヘキコトヲ宣誓シタル者カ特別ノ宣誓ナク

偽證罪ノ意義  
及ヒ要件

偽證罪ノ主體



虚偽ノ陳述ヲ爲スカ如キハ本罪タラス、而シテ宣誓ハ通常裁判所若クハ特別裁判所ニ於テ爲シタルト將タ行政官廳ニ於テ爲シタルトヲ區別セス尙ホ其事件カ民事タルト刑事タルト將タ懲戒處分事件タルトヲ問ハス、宣誓ノ形式ハ現行法上一定セスト雖モ證人ハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ附加セサル旨鑑定人ハ公平且正實ニ鑑定スヘキ旨通事ハ正實ニ通譯スヘキ旨ヲ當該官廳ニ對シテ誓フ以テ例ト爲ス。

次ニ問題タルハ法律上宣誓能力ナキ者カ宣誓能力アルカ如ク詐ハリ宣誓ヲ爲シタル場合ニ本罪ヲ構成スルヤ否ヤ、此點ニ付テハ學者間議論アル所ナレトモ予輩ハ之ヲ積極ニ解スルヲ正當ト信ス、此問題ニ對シ大審院カ證人トシテ適法ニ宣誓シタル後虚偽ノ陳述ヲ爲シタル所爲ハ偽證罪ヲ構成ス而シテ被告カ其宣誓ノ當時現ニ證人タル資格ヲ有シタルト否トハ犯罪ノ成立ニ何等ノ影響ナシト判示セルハ予輩ノ意ヲ得タルモノトス、(明治四十三年大審院判決錄一五七三頁參照)

第二 行爲 本罪ノ行爲ハ證人ニ付テハ虚偽ノ陳述ヲ爲スニ在リ、鑑定人ニ付

宣誓能力ナキ者カ如ク詐ハリ宣誓ヲ爲シタルト構成スルヤ

偽證罪ノ行爲

虚偽ノ陳述

虚偽ノ鑑定

テハ虚偽ノ鑑定ヲ爲スニ在リ、通事ニ付テハ虚偽ノ通譯ヲ爲スニ在リ、(一)虚偽ノ陳述トハ證人カ係争事實ニ關シ自己ノ實驗ニ反スル事實ヲ供述スルヲ謂フ、例ヘハ見タルコトヲ見サルト謂ヒ、聞キタルコトヲ聞カスト答フルカ如シ、(二)虚偽ノ鑑定トハ鑑定人カ鑑定事項ニ關シ不公平且不正實ニ意見ヲ述フルヲ謂フ、例ヘハ死屍ヲ鑑定スル場合ニ自己ハ他殺ト信スルニ拘ハラズ自殺ト述フルカ如シ、(三)虚偽ノ通譯トハ一方ノ表示シタル思想ヲ故意ニ變更シテ他方ニ通達スルヲ謂フ、而シテ何レモ宣誓ヲ爲シタル後ニ於テ行爲ヲ爲シタルコトヲ要ス、而シテ宣誓者ノ申述カ虚偽ナルヤ否ヤハ申述全體ヲ綜合シテ判断スヘキモノトス。

第三 故意 本罪ノ故意ハ宣誓ヲ爲シタルコト及ヒ自己ノ陳述鑑定通譯シタル事實カ虚偽ナルコトヲ認識スルヲ要ス、但シ他人ヲ害シ又ハ自己ヲ利スルカ如キ目的ノ有無ハ故意ノ要件ニ非ス、是レ誣告ト異ナル所ナリ。

第四 刑罰 刑罰ハ三年以上十年以下ノ懲役ナルモ犯人ニ於テ裁判確定前又ハ懲戒處分前自白シタルトキハ刑罰ヲ減免セララルコトヲ得。







第四 刑罰ニ付テハ偽證罪ト同一ナルカ故ニ説明ヲ省ク。

練習問題

(一) 偽證罪ノ成立要件ヲ説明スヘシ。

明治四十三年  
大正二十二年  
福島縣文官試驗  
警視廳警部試驗  
兵庫縣警部試驗

(解説) 本問ハ第一ニ偽證罪ノ定義ヲ掲ケ第二ニ本罪ノ要件ヲ分析シテ説明スルニ在リ。(前第一節ヲ参照スヘシ)

(二) 偽證罪ト誣告罪トノ異同ヲ説明スヘシ。

大正三年  
明治大學試驗

(解説) 本問ハ之ヲ異點ト同點トニ分テ解答ヲ試ムヘシ。

一 兩者ノ同點

(イ) 兩者其罪ノ性質ヲ同フス、即チ何レモ司法官廳又ハ懲戒官廳ニ對シテ虛偽ノ申述ヲ爲シ因テ事實ノ判斷ヲ誤ラシメ延テ其信用ヲ害スルニアリ。

(ロ) 兩者刑罰ヲ同フス即チ共ニ三年以上十年以下ノ懲役ナリ、而シテ裁

判確定前又ハ懲戒處分前自首シタルトキハ其刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得。

二 兩者ノ異點

(イ) 兩者其主體ヲ異ニス、即チ偽證罪ハ宣誓シタル證人鑑定人又ハ通事ニ限ルモ誣告罪ハ何人ト雖モ主體タルコトヲ得。

(ロ) 誣告罪ハ客體ニ付キ刑事事又ハ懲戒ノ處分ヲ受クル能力アルコトヲ要スルモ偽證罪ニハ斯カル制限ナシ。

(ハ) 行爲ニ付キ偽證罪ハ既ニ繫屬セル事件ニ付キ宣誓シタル者カ虛偽ノ申述ヲ爲スニアルモ誣告罪ハ新ニ處分ヲ受ケシムル爲メ進テ虛偽ノ告知ヲ爲ス點ニ於テ異ナル。

(ニ) 犯意ニ付キ偽證罪ハ犯人ニ於テ目的ノ有無ヲ問ハサルモ誣告罪ハ常ニ被誣告者ヲ陷害スル目的ニ出テタルコトヲ要スル點ニ於テ異ナル。

尙ホ微細ナル點ニ於テ異同アルモ茲ニ説明セス。



(三) 誣告ヲ爲シタル者カ其事件ノ證人トシテ虛偽ノ陳述ヲ爲シタル場合ノ處分如何。  
明治四十四年中央大學試驗  
大正二年日本大學試驗

(解説) 本問ハ先ツ證人カ訊問セラレタル事項ニ關シ自ラ訴追セラレルノ虞アルトキハ虛偽ノ證言ヲ爲スモ偽證罪ヲ構成セサルヤ否ヤノ先決問題ノ見解如何ニ因テ結論ヲ異ニスヘシ予輩ハ苟モ宣誓シタル證人カ虛偽ノ陳述ヲ爲シタル以上ハ如何ナル事情ニ因ルト雖モ偽證罪ヲ構成スルニ充分ナルカ故ニ本問ハ偽證罪ト誣告罪ノ俱發ナリト信ス。

### 第五章 風俗ヲ害スル罪

本章ニ於テハ法典第二十二章猥褻姦淫及ヒ重婚ノ罪第二十三章賭博及ヒ富籤ニ關スル罪第二十四章禮拜所及ヒ墳墓ニ關スル罪ヲ説明スルヲ目的トス此等ノ犯罪ハ何レモ社會ノ風俗ヲ害スル點ニ於テ共通ノ性質ヲ有スルモノトス蓋シ習俗ノ良否又ハ風紀ノ張弛ハ内ニ於テハ國利民福ニ付キ至大ノ關係ヲ有スルト共ニ外ニ對シ一般國民ノ品性ヲ表彰スルモノナルヲ以テ各國

風俗ヲ害スル罪ノ概念

ノ法律ニ於テ社會ノ風俗ヲ以テ獨立ナル法益ト爲シ特ニ刑罰制裁ヲ加ヘテ之ヲ保護セル所以ナリ。

### 第一節 猥褻姦淫及ヒ重婚ノ罪

本罪ハ風俗ヲ害スル罪ノ一種ニ屬シ殊ニ個人ノ性交上ノ自由又ハ婚姻上ノ權利ヲ侵害スルノ性質ヲ有スルモノナリ本罪ニ關スル刑法ノ規定ヲ示セハ左ノ如シ。

#### 第二十二章 猥褻姦淫及ヒ重婚ノ罪

第七十四條 公然猥褻ノ行爲ヲ爲シタル者ハ科料ニ處ス

第七十五條 猥褻ノ文書、圖畫其他ノ物ヲ頒布若クハ販賣シ又ハ公然之ヲ陳列シタル者ハ五百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス販賣ノ目的ヲ以テ之ヲ所持シタル者亦同シ

第七十六條 十三歳以上ノ男女ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ以テ猥褻ノ行爲ヲ爲シタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス十三歳ニ滿タサル男女ニ對シ猥褻ノ行爲ヲ爲シタル者亦同シ

第七十七條 暴行又ハ脅迫ヲ以テ十三歳以上ノ婦女ヲ姦淫シタル者ハ強姦ノ



罪ト爲シ二年以上ノ有期懲役ニ處ス十三歳ニ滿タサル婦女ヲ姦淫シタル者亦同シ

第七十八條 人ノ心神喪失若クハ抗拒不能ニ乘シ又ハ之ヲシテ心神ヲ喪失セシメ若クハ抗拒不能ナラシメテ猥褻ノ行爲ヲ爲シ又ハ姦淫シタル者ハ前二條ノ例ニ同シ

第七十九條 前三條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第八十條 前四條ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

第八十一條 第七十六條乃至第七十九條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス

第八十二條 營利ノ目的ヲ以テ淫行ノ常習ナキ婦女ヲ勸誘シテ姦淫セシメタル者ハ三年以上ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十三條 有夫ノ婦姦通シタルトキハ二年以下ノ懲役ニ處ス其相姦シタル者亦同シ

前項ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ之ヲ論ス但本夫姦通ヲ縱容シタルトキハ告訴ノ效ナシ

第八十四條 配偶者アル者重ネテ婚姻ヲ爲シタルトキハ二年以下ノ懲役ニ處ス其相姦シタル者亦同シ

猥褻罪ノ種類

第一

猥褻罪(第七十四條乃至第七十六條)

猥褻罪ハ更ニ(一)公然猥褻ノ行爲ヲ爲ス罪(二)猥褻物ニ關スル罪(三)強制猥褻ノ罪トニ分類スルヲ得ヘシ。

一 公然猥褻ノ行爲ヲ爲ス罪(第七十四條)

猥褻行爲トハ淫慾ヲ興奮シ又ハ之ヲ満足セシムル目的ニ出テタル行爲ニシテ覺知者ヲシテ醜耻ノ念ヲ生セシムルモノヲ謂フ。例ヘハ交接姦姦手淫ノ如キハ勿論局部ヲ露出スルカ如キ是ナリ而シテ本罪ノ成立要件トシテ公然ナルコトヲ必要トス。

二 猥褻物ニ關スル罪(第七十五條)

本罪ハ猥褻ノ文書圖畫其他ノ物ヲ頒布シ若クハ販賣シ又ハ之ヲ公然陳列シ又ハ販賣ノ目的ヲ以テ所持スルニ因テ成立ス。(イ)頒布トハ多數人間ニ配布スルヲ謂ヒ(ロ)販賣トハ多數ノ賣却ヲ目的トスル讓渡行爲ヲ謂フ(ハ)陳列ハ公然ナルコトヲ要ス而シテ如何ナル物ヲ猥褻物ト謂フヲ得ルヤハ事實各場合ニ付テ決スヘキ問題ナリ。

三 強制猥褻ノ罪(第七十六條)

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪

第五章 風俗ヲ害スル罪 第一節 猥褻姦淫及ヒ重婚ノ罪



本罪ハ十三歳以上ノ男女ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻行為ヲ爲スニ因テ成立ス、即チ本罪ハ特定人ニ對シ暴行脅迫ヲ手段トシテ猥褻行為ヲ爲スヲ特色トス、十三歳未滿ノ男女ニ對スル場合ハ同一ニ取扱ハル。

第二 姦淫ノ罪(第百七十七條至第百七十三條)

姦淫罪ハ更ニ分テ(一)強姦罪(二)姦淫勸誘罪(三)姦通罪トニ分類スルヲ得。

一 強姦罪(第百七十七條至第百八十一條)

本罪ハ直接ニ個人ノ性交上ノ自由ヲ侵害スルモノナリ、而シ本罪ノ被害者ハ婦女ニ限ル、強姦ノ手段トシテ暴行脅迫ヲ加ヘ若クハ人ノ心神喪失又ハ抗拒不能ニ乘シ或ハ心神喪失抗拒不能ノ状態ヲ惹起スルコトヲ要件トス、本罪ノ未遂ハ之ヲ罰ス、而シテ強姦行為ノ既遂ノ時期如何ニ付テハ議論アルモ陰陽ノ交合即チ男子ノ生殖器ノ没入ヲ以テ既遂ト爲スヲ穩當トス、次ニ本罪ハ被害者ノ告訴ヲ俟テ之ヲ論ス。

二 姦淫勸誘罪(第百八十二條)

本罪ハ營利ノ目的ヲ以テ淫行ノ常習ナキ婦女ヲ勸誘シテ姦淫セシムルニ

姦淫罪ノ種類

強姦ノ既遂ノ時期

勸誘トハ婦女ノ對シテ姦淫ノ決意ヲ爲サ

レムヘク誘致スルヲ謂フ淫行ノ常習ナキ者トハ概シテ婦女ヲ指ス

姦通罪ノ要件

因テ成立ス。故ニ本罪ハ營利ノ目的アルコト及ヒ淫行ノ常習ナキ婦女ニ對スルコトヲ要件ト爲ス、淫行ノ常習アリヤ否ヤハ事實認定ノ問題ナリ、故ニ娼妓密淫賣等ヲ含マサルヤ勿論ナリ。

三 姦通罪(第百八十三條)

本罪ハ有夫ノ婦カ夫以外ノ男子ト合意上ノ姦淫ヲ爲スニ因テ成立ス、姦夫ニ付テモ亦本罪ヲ成立ス。本罪ノ要件中注意スヘキハ有夫ノ婦トハ戶籍上ノ人ノ妻タルコトヲ要ス、故ニ所謂内縁ノ妻ニ對シテハ本罪ヲ成立セズ、婚姻ハ戶籍吏ニ届出ツルニ因テ成立ス。

茲ニ問題タルハ姦夫姦婦ノ一方ノミ他人ノ妻タルコトヲ認識スル場合ニ本罪ヲ成立スルヤ否ヤ、此點ニ付テハ學者間議論ノ存スル所ナリト雖モ予輩ハ其認識ヲ有スル者ノ方面ニ於テノミ本罪ノ成立ヲ認ムルコトヲ妨ケスト解ス。

本罪ハ處罰ノ條件トシテ本夫ノ告訴アルコトヲ要スルト同時ニ本夫ニ於

所謂姦容トハ本夫カ妻ノ姦



通ヲ許スノ  
示トアリ

民法第七百六  
十六條配偶者  
アル者ハ重婚  
テ婚姻ヲ爲ス  
コトヲ得スト  
規定セリ

賭博及ヒ富籤  
ニ關スル罪ヲ  
認メタル理由

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪

第五章 風俗ヲ害スル罪  
第二節 賭博及ヒ富籤ニ關スル罪

五一六

テ姦通ヲ縱容シタルトキハ告訴ノ效ナキモノトス。

### 第三 重婚ノ罪(第一百八十四條)

重婚罪ハ配偶者アル者カ重ネテ婚姻ヲ爲スニ因テ成立ス。配偶者トハ夫婦ノ一方ヲ謂フ、内縁ノ妻ハ所謂配偶者ニ非ス、而シテ配偶者アルコトヲ知りテ婚姻シタル者モ同様ニ處罰ス。

本罪ヲ認メタル理由ハ民法ニ於テ一夫一婦ノ制度ヲ認メタルニ由ルモノトス。

### 第四 刑罰ニ付テハ前掲條文ヲ參照スヘシ。

## 第二節 賭博及ヒ富籤ニ關スル罪

賭博及ヒ富籤ハ或方法ニ依リテ任意ニ自己ノ財産ヲ處分スルモノナルカ故ニ個々ノ行爲ニ就テ考フレハ敢テ國家ノ利益ヲ害スルモノニ非ス又一個人ノ利益ヲ害スルモノニ非ス然レトモ賭博及ヒ富籤賣買ノ性質トシテ行爲者ニ於テ一獲千金ノ僥倖ヲ期待シ其生業ヲ抛テ之ニ深耽スルノ傾向ヲ有スル

ノミナラス一朝事齟齬スルトキハ忽チニシテ倒産ノ悲運ニ遭遇スルノ危険アルモノナリ、故ニ若シ之ヲ不問ニ附センカ國民ノ勤勉心ヲ失ハシメ眞摯ナル正業ニ從事スルノ美風良俗ヲ危害スルヲ以テ特ニ刑法ニ於テ之ヲ嚴禁セ

ル所以ナリ。

### 第二十三章 賭博及ヒ富籤ニ關スル罪

第一百八十五條 偶然ノ輸贏ニ關シ財物ヲ以テ博戲又ハ賭事ヲ爲シタル者ハ千圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス但一時ノ娛樂ニ供スル物ヲ賭シタル者ハ此限ニ在ラス

第一百八十六條 常習ト、テ博戲又ハ賭事ヲ爲シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス賭博場ヲ開張シ又ハ博徒ヲ結合シテ利ヲ圖リタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

第一百八十七條 富籤ヲ發賣シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス  
富籤發賣ノ取次ヲ爲シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス前二項ノ外富籤ヲ授受シタル者ハ三百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

本罪ハ第一賭博ニ關スル罪第二富籤ニ關スル罪トニ分テ之ヲ説明スヘシ。

### 第一 賭博ニ關スル罪(第一百八十五條)

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪

第五章 風俗ヲ害スル罪  
第二節 賭博及ヒ富籤ニ關スル罪

五一七

賭博罪ノ意義  
及ヒ要件



賭博トハ財物ヲ賭シテ偶然ノ勝負ヲ決スル行爲ヲ謂フ。故ニ本罪ハ二人以上ノ主體アルコトヲ要件トス即チ本罪ハ所謂必要の共犯ノ一種ナリ。左ニ要件ヲ分説スヘシ。

一 賭博ハ偶然ノ勝負ヲ決スルコトヲ要ス。勝負ヲ刑法ハ輸贏ト稱ス其勝負ハ偶然ナルコトヲ要ス。偶然トハ關係者ノ何レニ勝負アルカ豫メ知ルコトヲ得サル事項ヲ謂フ故ニ賭博ハ競技ト區別セサルヘカラス、競技ニ於ケル勝敗ハ主トシテ當事者ノ技能ノ熟練或ハ力量等ニ因テ勝負ヲ決スヘキモノニシテ偶然ノ事項ニ關スルモノニ非サルヲ以テ賭博トハ其性質ヲ異ニス、例ヘハ圍碁將棋競馬等ニ於テ競技者カ財物ヲ賭スルカ如シ、而シテ偶然ノ事項ナリヤ否ヤハ各場合ニ付テ決スヘキ事實問題ナリ。

二 賭博ハ互ニ財物ヲ賭シテ偶然ノ勝敗ヲ争フコトヲ要ス。刑法ハ財物ヲ以テ博戲又ハ賭事ヲ爲シタル者云々ト規定シ財物ノ提供カ本罪ノ要件タルコトヲ明カニセリ、財物ノ何タルヤハ既ニ財產罪ノ章ニ於テ説明セリ、而シテ賭博罪ハ財産上ノ危險ヲ防止スル爲メ處罰スルモノナルヲ以テ賭物

輸ハ負ノ意ニシテハ勝ハ勝ノ義ナリ

財物ヲ賭スルハ行爲者カ互ニ目的物ヲ交付スル合意ヲ附スル

博戲ト賭事トノ區別

賭博罪ノ體様

單行犯トハ一回ノ行爲ニ因テ犯罪ト爲ルモノヲ謂フ

第二 賭博罪ノ體様

一 單純賭博罪(第一百五條)

ノ財産的價値ノ多少ハ本罪ノ成立ニ影響ナシ是レ但書ニ於テ一時ノ娛樂ニ供スル物ヲ賭スルカ如キハ此限リニアラスト規定セルヨリ觀ルモ其趣旨ヲ知ルニ難カラス。

財物ヲ賭スル方法ニ博戲ト賭事トアリ、刑法ハ之カ區別ヲ認メタルモ法ノ適用上敢テ實益アルモノニアラス、然レトモ茲ニ之ヲ一言スレハ博戲ハ關係者自身ノ動作ノ結果ヲ以テ勝負ヲ決シ賭事ハ此動作以外ノ事實ヲ以テ勝負ヲ決スルモノナリト解スルヲ正當ト信ス。

二 常習賭博罪(第一百八十六條)

本罪ハ右ニ説示セル要件ヲ充スニ因テ成立スル單行犯ナリ、故ニ刑罰ハ輕キ千圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス。

本罪ハ常習トシテ賭博ヲ爲スニ因テ特ニ刑ヲ加重セララルモノヲ謂フ。故ニ本罪ハ單純賭博罪ノ要件ノ外反覆シテ賭博行爲ヲ爲ス習癖アルコト



賭博ノ常習ト  
ハ反覆シテ賭  
博行爲ヲ爲ス  
習癖ヲ謂フ

賭博開張又ハ  
賭博結合罪

ヲ要件トス、而シテ如何ナル場合ヲ以テ常習賭博ト認ムヘキヤハ其認定材  
料ヲ仔細ニ觀察シテ之ヲ判定スヘキモノトス、此點ニ關シ大審院カ賭博ノ  
前科ノ事實ハ必スシモ常ニ之ニ依テ其後ノ賭博行爲ヲ常習犯ト認メサル  
ヘカラサルニアラサルト同時ニ前科アル事實ニ依リ常習犯ヲ認ムルモ不  
法ニ非スト判示セルハ右ノ趣旨ヲ明カニセルモノト謂フヘシ。(大正三年  
れ第四四三號判決參照)

三 賭場開張又ハ博徒結合罪(第百八十六條第二項)

本罪ハ賭博場ヲ開張シ又ハ博徒ヲ結合シテ利ヲ圖ルニ因リテ成立ス。  
賭博場ヲ開張スルトハ賭博者ヲ誘引シテ賭博ノ場所ヲ供給シ寺錢其他ノ  
名稱ヲ以テ利益ヲ收受スル行爲ヲ謂フ。  
博徒ヲ結合スルトハ賭博常習者ノ團體ヲ組織シ自ラ親分トシテ利益ヲ圖  
ルカ如キヲ謂フ。  
二者共ニ利益ヲ圖リタルコトヲ要件トスルト同時ニ現實ニ利益ヲ取得ス  
ルコトハ罪ノ成立要件ニ非ス。

第三 富籤ニ關スル罪(第百八十七條)

富籤ニ關スル罪ハ富籤ヲ發賣、取次又ハ授受ヲ爲スニ因テ成立ス。

左ニ要件ヲ分説スヘシ

一 富籤ニハ二様ノ意義アリ、即チ第一ノ意義ニ於テ富籤トハ抽籤ニ依リ當  
籤者ニ一定ノ財物ヲ給付スヘキ約束ヲ以テ多數人ヨリ財物ヲ醜集スル手  
段トシテ作ラレタル符票ヲ謂ヒ、第二ノ意義ニ於ケル富籤トハ一方ノ當事  
者カ多數人ヨリ財物ヲ醜集シ抽籤ノ方法ヲ以テ當籤者ニ其醜集財物ノ一  
部ヲ分配スル行爲其モノヲ謂フ、此意味ニ於ケル富籤ト賭博トノ間ニ如何  
ナル差異アリヤハ學說ノ岐カルル所ナルヲ以テ練習問題ノ題下ニ之ヲ説  
明スヘシ。

二 本罪ノ行爲ハ發賣、取次、授受ノ三種ナリ。(一)富籤ノ發賣トハ富籤ヲ發行  
スルノ義ニシテ興行者ニ於テ第一ノ意義ニ於ケル符票ヲ賣却スルヲ謂フ。  
(二)富籤ノ取次トハ富籤發賣者ノ爲メニ賣買ノ仲立即チ周旋ヲ爲スヲ謂  
フ。(三)富籤ノ授受トハ發賣及ヒ取次以外ノ交付收受ヲ指スモノトス即チ

富籤ニ關スル  
罪  
富籤トハ何ソ  
ヤ  
財物ヲ醜集ス  
ル者ヲ富籤興  
行者ト稱シ財  
物ヲ醜出スル  
者ヲ富籤發賣  
者ト謂フ



富籤ノ買受又ハ其買受ケタルモノノ賣却ヲ以テ適例トナス。次ニ本罪ノ構成ニ關シ注意スヘキハ富籤ニアリテハ發賣者以外ノ者ニ於テ其醜出シタル財物ニ付キ損失ヲ受クヘキ者アルコトヲ特質トスルカ故ニ普通商店ニ於テ所謂福引ヲ爲サシムルカ如キハ富籤ニ非サルナリ。唯富籤類似ノ行爲トシテ行政上ノ取締ヲ受クルニ過サルナリ。明治四十二年內務省令第二十九號參照)

第四 刑罰ニ付テハ前掲條文ヲ參照スルニ因テ明瞭ナルカ故ニ茲ニ贅セス。

練習問題

(一) 賭博ト富籤トノ區別ヲ説明スヘシ。  
明治四十一年高等文官試驗  
大正二年五月岐阜縣警部試驗

(解説) 賭博トハ財物ヲ賭シテ偶然ノ輸贏ヲ爭フ行爲ヲ謂ヒ富籤トハ一方ノ當事者カ多數人ヨリ財物ヲ醜集シ抽籤ニ依リ當籤者ニ一定ノ財物ヲ給付スル方法ニ依リ財物ノ得喪ヲ目的トスル雙方行爲ヲ謂フ。而シテ兩者ノ區別ノ標準ニ付テハ學說判例一致セサル所ニシテ或ハ財物ヲ喪失スルノ危險カ一方ニアルト雙方ニアルトヲ以テ區別ノ標準トスル說ト或ハ抽籤

ノ有無ヲ以テ之カ區別ノ標準トスル說等アリ。然レトモ予輩ハ之カ區別ニ付テハ危險カ一方ナルヤ雙方ナルヤノ點及ヒ抽籤ノ有無トノ二點ヲ標準トシテ決スルヲ相當ト信ス。之ニ對シ最近ニ於ケル同趣旨ノ判例アリ。大正三年七月れ第一六九三號大審院判決)

第三節 禮拜所及ヒ墳墓ニ關スル罪

禮拜所及ヒ墳墓ニ關スル罪  
ヲ認メタル立  
法者ノ根據

本罪ハ宗教上ノ利益ヲ害スル行爲ナリ。凡ソ信教ノ自由ハ憲法ノ保障スル所ニシテ各人ハ自己ノ欲スル所ニ從ヒ信教ヲ奉シ他ヨリ妨害セラレサルニ因テ宗教上ノ利益ヲ有スルモノナリ。而シテ各人互ニ他人ノ信教ノ自由ヲ妨害セサルコトハ宗教上ニ於ケル善良ノ風俗ナリ。故ニ刑法ハ宗教上ニ於ケル善良ノ風俗ヲ保護スル爲メ本罪ヲ設ケタル所以トス。

第二十四章 禮拜所及ヒ墳墓ニ關スル罪

第百八十八條 神祠、佛堂、墓所其他禮拜所ニ對シ公然不敬ノ行爲アリタル者ハ六月以下ノ懲役若クハ禁錮又ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

說教、禮拜又ハ葬式ヲ妨害シタル者ハ一年以上ノ懲役若クハ禁錮又ハ百圓以下



ノ罰金ニ處ス

第百八十九條 墳墓ヲ發掘シタル者ハ二年以下ノ懲役ニ處ス

第百九十條 死體、遺骨、遺髮又ハ棺内ニ藏置シタル物ヲ損壞、遺棄又ハ領得シタ者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

第百九十一條 第百八十九條ノ罪ヲ犯シ死體、遺骨、遺髮又ハ棺内ニ藏置シタル物ヲ損壞、遺棄又ハ領得シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

第百九十二條 檢視ヲ經スシテ變死者ヲ葬リタル者ハ五十四以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

本罪ハ便宜上禮拜所ニ關スル罪ト墳墓ニ關スル罪トニ分テ説明スヘシ。

禮拜所ニ關スル罪

第一 禮拜所ニ關スル罪(第百八十九條)

禮拜所ニ關スル罪ハ(一)禮拜所ニ對スル不敬罪(二)說教禮拜又ハ葬式ヲ妨害スル罪トヲ包含ス。

一 禮拜所トハ公衆カ信教上ノ赤誠ヲ捧クル場所ヲ謂フ。法律ノ例示スル神祠佛堂墓所ハ勿論耶蘇教會堂天理教ノ會堂其ノ他ヲ總稱ス。禮拜所ニ對スル不敬行爲ハ公然爲スコトヲ要件トス。所謂不敬ノ行爲トハ禮拜所ノ神

聖威嚴ヲ冒瀆スヘキ一切ノ行爲ヲ謂フ。故ニ如何ナル行爲カ不敬ナルヤハ具體的ニ決スヘキ問題ナリ。

二 說教禮拜葬式ヲ妨害スルトハ說教禮拜葬式ノ平穩ナル執行ヲ妨クル一切ノ行爲ヲ謂フ。而シテ妨害ハ現在タルコトヲ要スルト同時ニ必スシモ其執行ヲシテ不能ニ終ラシメタルコトヲ要件トセス。尙ホ妨害ノ手段ハ物質的タルト精神的タルトヲ問ハス。

墳墓ニ關スル罪

第二 墳墓ニ關スル罪(第百八十九條至第百九十二條乃)

墳墓ニ關スル罪ハ(一)墳墓ヲ發掘スル罪(二)死體遺骨等ニ關スル罪(三)變死者密葬ノ罪トヲ包含ス。

一 墳墓發掘罪(第百八十九條)

本罪ノ物體ハ墳墓ナリ。墳墓トハ人ノ死體遺髮遺骨等ヲ葬リタル場所ヲ謂フ。然レトモ歷代天皇ノ御墳墓ニ付テハ第七十四條第二項ノ特別罪ヲ成スヘキカ故ニ本罪ノ物體タラス。行爲ハ發掘ナリ。發掘ハ不法タルヲ要スルカ故ニ豫審ノ必要上又ハ官ノ許可ヲ得テ發掘スルカ如キハ罪ト成ラ







下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

法令ニ因リ拘禁セラレタル者ヲ看守又ハ護送スル者被拘禁者ニ對シ暴行又ハ  
凌虐ノ行爲ヲ爲シタルトキ亦同シ

第九十六條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較  
シ重キニ從テ處斷ス

第九十七條 公務員又ハ仲裁人其職務ニ關シ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ要求若ク  
ハ約束シタルトキハ三年以下ノ懲役ニ處ス請託ヲ受ケタル場合ニ於テハ五年  
以下ノ懲役ニ處ス

公務員又ハ仲裁人タラントスル者其擔當スヘキ職務ニ關シ請託ヲ受ケテ賄賂  
ヲ收受シ又ハ之ヲ要求若クハ約束シタルトキハ公務員又ハ仲裁人ト爲リタル  
場合ニ於テ三年以下ノ懲役ニ處ス

第九十七條ノ二 公務員又ハ仲裁人其職務ニ關シ請託ヲ受ケテ第三者ニ賄賂  
ヲ供與セシメ又ハ其供與ヲ要求若クハ約束シタルトキハ三年以下ノ懲役ニ處  
ス

第九十七條ノ三 公務員又ハ仲裁人前二條ノ罪ヲ犯シ因テ不正ノ行爲ヲ爲シ  
又ハ相當ノ行爲ヲ爲ササルトキハ一年以上ノ有期懲役ニ處ス

公務員又ハ仲裁人其職務上不正ノ行爲ヲ爲シ又ハ相當ノ行爲ヲ爲ササリシコ  
トニ關シ賄賂ヲ收受、要求若クハ約束シ又ハ第三者ニ之ヲ供與セシメ其供與ヲ

要求若クハ約束シタルトキ亦同シ

公務員又ハ仲裁人タリシ者其在職中請託ヲ受ケテ職務上不正ノ行爲ヲ爲シ又  
ハ相當ノ行爲ヲ爲ササリシコトニ關シ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ要求若クハ約束  
シタルトキハ三年以下ノ懲役ニ處ス

第九十七條ノ四 犯人又ハ情ヲ知リタル第三者ノ收受シタル賄賂ハ之ヲ沒收  
ス其全部又ハ一部ヲ沒收スルコト能ハサルトキハ其價額ヲ追徵ス

第九十八條 第九十七條乃至第九十七條ノ三ニ規定スル賄賂ヲ供與シ又  
ハ其申込若クハ約束ヲ爲シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ五千圓以下ノ罰金ニ  
處ス

右ノ規定ニ依レハ所謂瀆職罪ニハ(一)職權濫用罪ト(二)賄賂罪トヲ包含ス

第一 職權濫用罪(第九十三條乃至第九十六條)

本罪ノ體様ニ四アリ、左ニ順次之ヲ説明スヘシ。

一 職權濫用ノ強要罪(第九十九條)

本罪ノ主體ハ公務員ナリ、公務員ノ何タルヤハ茲ニ再說セス。職權ヲ濫用  
スルトハ職務ヲ不法ニ行使スルヲ謂フ換言スレハ公務員カ故意ヲ以テ職  
務ヲ濫用スルヲ謂フ。而シテ本罪ノ行爲ハ職權ヲ濫用シテ義務ナキコト

職權濫用ノ罪  
要罪



ヲ行ハシメ又ハ行フヘキ權利ヲ妨害スルニ在リ。義務ナキコトヲ行ハシムルトハ例ヘハ裁判官カ期限ノ到來セサル債務ノ履行ヲ債務者ニ強制スルカ如シ。行フヘキ權利ヲ妨害スルトハ權利ノ行使ヲ不能又ハ困難ナラシムルコトヲ總稱ス。

二 職權濫用ノ逮捕監禁罪(第四百九條)

本罪ノ主體ハ裁判、檢察、警察ノ職務ヲ行ヒ又ハ之ヲ補助スル者ニ限ル。(一) 裁判ノ職務ヲ行フ者トハ判事領事等ニシテ其補助者ハ書記領事館員等ナリ(二) 檢察ノ職務ヲ行フ者トハ犯罪檢舉ノ職務ニ従事スル官吏ヲ謂フ、檢事ノ如シ(三) 警察ノ職務ヲ行フ者トハ警察官憲兵將校下士等ヲ謂フ、巡查憲兵卒ハ其補助者ナリ。是等ノ公務員ハ職務上一般ニ人ヲ逮捕監禁スヘキ命令ヲ發シ又ハ其命令ヲ執行スヘキ職務ヲ有スルヲ以テ其職權ノ濫用ハ個人ノ自由ニ對シテ頗ル危険ナルカ故ニ第二百二十條ノ逮捕監禁罪ニ比シ重ク處罰スル所以ナリ。

三 公務員ノ暴行陵虐罪(第四百九條)

本罪ノ主體ハ前條ニ述ヘタル者及ヒ法令ニ因リ拘禁セラレタル者ヲ看守又ハ護送スル者ニ限ル。本罪ノ客體タル者ハ刑事被告人其他ノ者及ヒ被拘禁者ナリ。本罪ノ行爲ハ暴行又ハ陵虐ナリ。暴行トハ身體ニ對スル不法ノ腕力ニシテ陵虐トハ陵辱苛酷ノ行爲ヲ謂フ例ヘハ飲食衣服ヲ撤去シ又ハ必要ノ睡眠ヲ禁シ或ハ婦女ニ醜辱ヲ加フルカ如キハ陵虐ノ甚シキモノナリ。刑事被告人ニ對スル暴行陵虐ハ多クハ罪狀ヲ自白セシムル手段トシテ行ハルモノナレトモ本罪ヲ構成スヘシ。

四 結果犯 前段ニ説明セル逮捕監禁暴行陵虐ノ行爲ヲ爲スニ因テ死傷ニ致シタルトキハ傷害罪ニ比較シ重キニ從テ處斷セラル。

第二 賄賂罪(第九十七條乃至第九十八條)

本罪ヲ分テ收賄罪ト贈賄罪ノ二トナス。左ニ之ヲ分説スヘシ。

一 收賄罪(第九十七條乃至第九十八條)

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪 第六章 濫職ノ罪

刑事被告人  
ハ刑事被告人  
被疑者トシテ  
取調ヘラフ受  
取調者ヲ指ス

職權濫用ノ逮捕監禁罪

公務員ノ暴行陵虐罪



收賄罪ハ公務員又ハ仲裁人カ其職務ニ關シ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ要求若クハ約束スルニ因テ成立スル犯罪ナリ。

(イ) 本罪ノ主體ハ公務員又ハ仲裁人ナリ。仲裁人トハ當事者間ノ争ヲ判斷スル爲メ仲裁手續(民訴七八六)ニ從ヒ其他法令ニ依リ其職務ヲ採ルモノヲ指稱ス、故ニ單純ナル事實上ノ仲裁人ヲ包含セス(大正五年一月二十五日判決)而シテ本罪ハ所謂職務犯ナルカ故ニ公務員又ハ仲裁人カ其職務ニ關シテ犯スコトヲ要件トス、其職務ニ關シテトハ公務員又ハ仲裁人ノ職務行爲ノ關係ニ於ケルコトヲ意味ス故ニ如何ナル行爲カ職務行爲ニ關係アリヤ否ヤハ各公務員ノ種類又ハ其地位權限等ニ就キテ具體的ニ判斷セサル可カラス。

此點ニ付キ注意スヘキ判例アリ。

(一) 判例ハ「賄賂ノ對價タル給付カ公務員又ハ仲裁人ノ職務執行タル行爲ニ屬セサルモ其職務執行ト密接ノ關係ヲ有スル場合ニ於テハ職務ニ關シテ收賄若クハ贈賄ノ行爲アリト謂フヲ妨ケス」(大正二年十二月九日判決) 又(二)其職務ハ現ニ執行シ得ヘキモノタルコトヲ要セス苟モ其權限ニ屬スルニ於テハ期限又ハ未必的ナル將來ノ出來事ニ係ル場合ニ於テモ尙賄賂罪ノ成立アリ」(明治四十三年七月八日判決、明治四十五年二月一日判決、大正五年六月三日判決) 又(三)判例ニ其職務ニ關スル以上ハ「事ヲ枉クルノ處分(不正)ヲ爲スニ關スルヲ必要トセス正當ナル職務行爲ニ關シテモ賄賂罪ノ成立アリ」(大正五年六月十三日判決、同年十月二十四日判決) 尙(四)判例ニ「凡ソ收賄罪ハ利益ト職務行爲トノ間ニ給付及反對給付トノ關係アルヲ以テ足ルモノニシテ公務員カ職務ニ關シ關係者ノ請託ヲ容レタルコトヲ要セス」(大正三年

判例第五七四號判決) 然レトモ請託ヲ受ケタル場合ニハ刑罰ヲ加重セラル(第一百九十七條後段) 若シ夫レ不正行爲ヲ爲ス請託ヲ受ケタルトキハ特ニ加重罪タル第九十七條ノ三ノ第二項ノ刑ニ處セラル。

尙本罪ハ現在ノ公務員又ハ仲裁人タルト未來ニ公務員又ハ仲裁人タルトス者(第九十七條第二項) 將タ過去ニ於テ公務員又ハ仲裁人タリシ者(第九



七條ノ三)トヲ問ハス本罪ノ成立アルモノトセリ、而カモ其賄賂ハ公務員又仲裁人自身ニ之ヲ利得スルヲ要セス第三者ニ對シテノ賄賂ノ供與又ハ要求若クハ約束第七條ノ二モ亦本罪ヲ成立セシム。

(ロ) 本罪ノ行爲ハ賄賂ノ收受要求又ハ約束ナリ。賄賂ノ目的タル利益ニ關シテハ學說ノ岐カルル所ニシテ或ハ收受ノ目的ト爲ルヘキモノタルコトヲ要スルカ故ニ財物ニ限ルトノ說アルモ予輩ハ不法ノ報酬タルヘキ一切ノ利益ハ賄賂タルヲ得ヘク必スシモ交付又ハ收受ハ賄賂ノ要件ニ非スト信ス。之ニ關シ大審院ハ苟モ人ノ慾望ヲ充スニ足ル有形無形一切ノ利益ハ經濟上ノ價值ヲ有スルト否トヲ問ハス皆賄賂ナリト判示セリ、(大正三年九月第二三八號判決故ニ金錢其他ノ財物ハ勿論藝妓ノ演藝響應情交ノ承諾ノ如キモ亦然リ、大正四年七月九日判決他人ニ一定ノ地位ヲ供與スル旨ヲ約束スルモ亦賄賂罪ヲ構成スト判示シタリ、(大正四年六月一日判決)

賄賂ノ收受トハ賄賂タル情ヲ知テ其交付ヲ受クルコトヲ謂ヒ、要求トハ

自ラ進テ賄賂ノ提供ヲ求ムルヲ謂ヒ、約束トハ後日ニ於ケル賄賂ノ受授ヲ約スルヲ謂フ。而シテ何レモ職務ニ關スル不正ノ報酬タルコトヲ要件トス。

(ハ) 犯意 本罪ハ故意犯ナルカ故ニ一般原則ニ從ヒ犯罪構成要件タル事實ノ認識ヲ必要トス、即チ公務員又ハ仲裁人タルコトノ資格ノ認識ハ勿論其職ニ關シテ賄賂ヲ收受、又ハ要求若クハ約束等各種行爲ノ認識並ニ因果關係ノ認識ヲ必要トス、尙請託ヲ受ケタル場合ニハ請託ヲ受ケタルコトノ認識ヲ要件トス。

## 二 本罪ノ體様

收賄罪ハ前述ノ如ク公務員又ハ仲裁人ノ地位利用罪ナルカ故ニ必スシモ地位ノ現在タルコトヲ要セス未來ノ地位ヲ利用スルト又過去ノ地位ヲ利用スルト將タ第三者ノ地位ヲ利用スルトヲ問ハサルヲ以テ收賄罪ハ種々ノ體様ニ於テ現ハルルカ故ニ便宜上左ニ條ヲ逐フテ説明スヘシ。

(一) 第九十七條 本條第一項ハ現在ノ公務員又ハ仲裁人カ其職務ニ關



シ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ要求シ若クハ約束スルニ因テ成立スル犯罪ナリ。本罪ハ所謂單純收賄罪ト稱スルヲ得ヘシ。而シテ刑罰ハ三年以下ノ懲役ナリ、若シ關係者ヨリ請託ヲ受ケタル場合ニハ特ニ加重セラレテ五年以下ノ懲役ニ處ス。而シテ請託トハ俗ニ「頼ミ込ム」ノ義ニシテ例ヘハ許可認可ノ申請トカ又ハ検査ヲ大目ニ見テ戴キタイトカ云フカ如キヲ指ス、從テ請託ハ必シモ不正行爲ニ限ラス正當ナル職務行爲ニ關スルモ前示加重罪ノ成立ニ影響ナシ、若シ不正行爲ヲ爲ス請託ヲ受ケタルトキハ別罪ヲ構成スヘシ(第九十七條ノ第三項)

本條第二項ハ未來ノ公務員又ハ仲裁人ニ付テノ收賄罪ヲ規定ス、即チ公務員又ハ仲裁人タラントスル者其擔當スヘキ職務ニ關シ請託ヲ受ケテ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ要求若クハ約束ヲ爲シタルトキ其者カ公務員又ハ仲裁人ト爲リタルコトヲ條件トシテ成立スル犯罪ナリ。而シテ本罪ノ刑罰ハ三年以下ノ懲役ナリ。若シ夫レ本罪ノ成立セサル場合ニハ一定ノ條件ノ下ニ詐欺取財罪ヲ構成スルコトアルヘシ、例ヘハ地位利用詐

欺ノ如シ。

(二) 第九十七條ノ二 本條ハ公務員又ハ仲裁人カ其職務ニ關シ請託ヲ受ケテ第三者ニ賄賂ヲ供與セシメ又ハ其供與ヲ要求シ若クハ其供與ノ約束ヲ爲スニ因テ成立スル犯罪ナリ。所謂本罪ハ第三者ノ地位利用罪ナリ。本罪ノ特色ハ公務員又ハ仲裁人カ其職務ニ關シテ請託ヲ受クルモ自身ニ於テハ賄賂ヲ利得セサル點ニ在リ。蓋シ其公務員又ハ仲裁人ハ其職務ニ關シ請託ヲ受ケタル事項ニ關シ直接ニ利得セサルモ或反面ニ於テヨリ以上ノ利益ヲ得ル場合アルカ故ニ自身ニ於テ賄賂ヲ利得スルト殆ント擇フ所ナキヲ以テ特ニ本條ヲ設ケタルモノナリ。例ヘハ或公務員カ自己ノ屬スル團體ノ首長ヲ兼ヌル場合ニ其團體ニ對シ寄附名義ヲ以テ財物ヲ贈賄セシメタルカ如シ、又例ヘハ府縣會議員カ選舉區ノ關係者ヨリノ請託ニ基キ議會ニ或種ノ提案ヲ爲シタル際ニ於テ他ノ硬骨議員ノ反對ヲ緩和センカ爲メ其議員ニ對シ賄賂ヲ供與セシメ因テ該議案ノ通過ヲ圖リタル場合ノ如シ。



(註) 茲ニ所謂第三者トハ如何ナル者ヲ指スカニ付テハ異説アルモ予輩ハ單リ公務員又ハ仲裁人ニ限定スルノ必要ナク請託ヲ受ケタル公務員又ハ仲裁人ニ於テ苟モ其請託ヲ果スニ付キ便宜的地位ニ在ル者ナランニハ廣ク公務員又ハ仲裁人以外ノ者ヲモ包含スヘキモノト解ス本罪ノ刑罰ハ三年以下ノ懲役ナリ。

(三) 第九十七條ノ三 本條ノ罪ハ第一項、第二項、第三項ニ依リ其體様ヲ異ニス。左ニ説明セン。

(イ) 本條第一項ハ公務員又ハ仲裁人カ前二條即チ第九十七條ノ罪又ハ第九十七條ノ二ノ罪ヲ犯シタル結果不正ノ行爲ヲ爲シタルトキ又ハ相當ノ行爲ヲ爲ササルトキノ處罰ヲ規定シタルモノナリ。本項ハ一種ノ結果的加重罪ナリ。所謂不正ノ行爲ヲ爲ストハ公務員又ハ仲裁人カ其職務ニ關スル權限外ノ行爲ヲ爲スヲ謂フ。例ヘハ刑務所ノ看守カ第九十七條第一項ニ該當スル賄賂ヲ收受シ因テ其拘禁者ヲ無斷ニ解放シタルカ如シ、次ニ相當ノ行爲ヲ爲ササルトハ公務員

又ハ仲裁人カ職務上爲シ得ル行爲ヲ爲ササル場合ヲ謂フ。例ヘハ遞信省ノ官吏カ賄賂ヲ受ケナカラ贈賂者ノ爲メニ特別ナル便宜ヲ圖リ新設電話ノ加入權ヲ許可スルモ敢テ職務上差支ナキニ拘ハラヌ之ヲ許可セサル場合ノ如シ。

本罪ノ刑罰ハ一年以上ノ有期懲役ナリ。

(ロ) 本條第二項ハ公務員又ハ仲裁人カ其職務上不正行爲ヲ爲シ又ハ相當ノ行爲ヲ爲ササリシコトニ關シ賄賂ヲ收受、要求、若クハ約束シタル場合ト及ヒ公務員又ハ仲裁人カ其職務上不正行爲ヲ爲シ又ハ爲ササリシコトニ關シ第三者ニ賄賂ヲ供與セシメ又ハ賄賂ノ供與ヲ要求シ若クハ其供與ノ約束ヲ爲シタル場合ノ處罰ニ關スル規定ナリ。故ニ本項ノ前段ハ公務員又ハ仲裁人自ラ賄賂ヲ利得スル場合ニシテ後段ハ第三者ヲシテ賄賂ヲ利得セシムル場合ナリ。而シテ本罪カ第九十七條ノ罪又ハ第九十七條ノ二ノ罪ト異ナル所ハ第九十七條ノ罪又ハ第九十七條ノ二ノ罪カ單ナル請託ニ關ハルニ反シ本罪ハ職



務上不正行爲ヲ爲シ又ハ相當ノ行爲ヲ爲ササリシコトニ關ス、ノ點ニ在リ。不正行爲ヲ爲スノ意義ニ付テハ既ニ說ケリ、然ラハ所謂相當ノ行爲ヲ爲ササリシコトニ關シトハ何ソ、相當ノ行爲トハ職務上爲スヘキ行爲(與ヘラレタル行爲)ヲ指ス。抑モ公務員又ハ仲裁人ハ國家ノ機關トシテ國家ノ權威權力及機能ヲ發揮セシムルカ爲メ身ヲ廉潔ニ持シ公平忠實勤勉ニ各自ノ職務ヲ適正ニ行使セサル可カラス、然ルニ公務員又ハ仲裁人カ私情ニ狩ラレ故意ヲ以テ不當ニ其職務ヲ拒否シ又ハ拋棄シ若クハ滯滞セシムルカ如キコトアランカ是レ即チ所謂相當ノ行爲ヲ爲ササリシコトニ該當スルモノニシテ延テ國家ノ威信ヲ損シ權力機能ノ圓滑ヲ阻害スル結果ヲ來スヘキナリ、故ニ改正法ハ特ニ積極的不正行爲ト共ニ消極的ニ相當ノ行爲ヲ爲ササリシコトニ關シ重キ處罰ヲ規定シ由テ以テ公務員ノ廉潔ヲ確保シ官紀ノ振肅ヲ希圖シタル所以ナリ。相當ノ行爲ヲ爲ササリシコトニ關シノ例ヲ舉クレハ犯罪檢舉ノ職ニ在ル官吏カ關係者ノ請託ヲ受ケテ其檢舉ニ手

心ヲ加ヘ被疑者ヲ拘留セス又ハ濫リニ釋放シタルコトニ關シ賄賂ヲ收受要求若クハ約束シタル場合ノ如シ。而シテ本罪ノ刑ハ前項ノ罪ト同シク重キ一年以上ノ有期懲役ナリ。

(ハ) 本條第三項ハ公務員又ハ仲裁人タリシ者其在職中請託ヲ受ケテ職務上不正行爲ヲ爲シ又ハ相當ノ行爲ヲ爲ササリシコトニ關シ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ要求シ若クハ約束シタルニ因テ成立スル犯罪ナリ。而シテ本罪ハ前項ノ犯罪ト内容ニ於テ殆ント異ナル所ナキモ本罪ノ特色ハ過去ノ公務員又ハ仲裁人カ其在職中ニ於テ請託ヲ受ケテ關係者ノ爲メニ職務上不正行爲ヲ爲シ又ハ相當ノ行爲ヲ爲ササリシコトニ關シ賄賂ヲ收受シ又ハ要求若クハ約束シタルモノナルカ故ニ其賄賂ハ一種ノ事後ノ報酬(謝禮)ニ該當スルモノナリ。從テ本罪ノ刑罰ハ事後ノ報酬タル情狀ヲ考慮シ前項ノ刑ヨリ輕キ三年以下ノ懲役ナリ。

三 賄賂ノ沒收又ハ其價額ノ追徵(第七百九十四條)

收賄罪ニ因リテ犯人ノ收受シタル賄賂又ハ收賄罪タルノ事情ヲ知リタル



第三者ノ收受シタル賄賂ハ之ヲ沒收ス。若シ其全部又ハ一部ヲ沒收スルコト能ハサルトキハ其部分ニ付テノ價額ヲ追徴ス。其執行ハ強制執行ノ方法ニ依ル(刑訴第五百五十三條第二項)

(註) 刑法總則第十九條ハ沒收又ハ追徴スルコトヲ得ト規定セルカ故ニ

沒收又ハ追徴ノ範圍ニ付キ裁判官ニ自由裁量ノ餘地ヲ存スルモ收賄罪ニ付テハ必ス沒收又ハ追徴セサル可カラス。

價格ノ追徴ニ付テハ大審院ニ於テ種々ノ判例アリ(總則第十九條ノ說

明參照)

#### 四 贈賄罪(第一百八條)

本罪ハ前顯第九十七條乃至第九十七條ノ三ニ規定セル收賄罪ト相表裏スルモノニシテ所謂必要の共犯ノ關係ニ立ツモノトス。判例ハ之ヲ以テ共犯ナリトシ刑訴第二十八條第二項ノ適用アルモノトス(明治四十三年七月五日判決)

本罪ノ行爲ハ賄賂ヲ供與シ又ハ其申込若クハ約束ヲ爲ストアリ、賄賂ヲ

供與シトハ其相手方又ハ第三者ニ提供スルヲ謂ヒ、申込トハ賄賂ノ供與ヲ申入ルルコトヲ謂ヒ、約束トハ賄賂ノ供與ヲ約スル行爲ヲ謂フ。本罪ノ刑ハ三年以下ノ懲役又ハ五千圓以下ノ罰金ナリ。

(註) 舊法ハ贈賄罪ニ對シ自首ニ因ル刑ノ減刑又ハ免除ヲ認メタルモ新法ハ必要ナシトシテ之ヲ廢セリ。

#### 練習問題

(一) 收賄罪ヲ説明スヘシ。

(解説) 本問ハ改正法前ノ問題ナルカ故ニ改正法ノ問題トシテハ廣キニ失

ス、併シ收賄罪ハ刑法中重要ナル地位ヲ占ムルカ故ニ不斷ノ注意ヲ要ス

(二) 賄賂ノ意義ヲ説明スヘシ。 大正元年 靜岡縣警部試驗

(解説) 賄賂ノ何タルヤニ付テハ前章第二收賄罪ノ説明中ニ説キタルヲ以テ參照スヘシ。

(三) 官吏職務上ノ囑託ヲ受ケ其報酬トシテ某婦女ヲ妾ト爲スコトヲ約シタリ官吏ヲ如何ニ處分スヘキカ。 明治四十三年 明治大學試驗



(解説) 本問ハ前提トシテ妾ト爲ルコトハ賄賂ト謂フヲ得ルヤ否ヤニ因テ結論ヲ異ニス、予輩ハ曩ニ説明セルカ如ク苟モ人ノ欲望ヲ満足スルニ足ルヘキ有形無形ノ一切ノ利益ハ財産上ノ價值ヲ有スルト否トヲ問ハス皆賄賂ナリト解スルカ故ニ本問ニ所謂妾ト爲ルノ約束ハ收賄罪ノ物體タリ得ルモノトス、果シテ然ラハ本問ハ第九十七條ノ收賄罪ノ要件ヲ充實スルヤ明カナリ、依テ該官吏ヲ同條ニ照シテ處斷スルヲ相當トス。

### 第七章 國家ノ存立ヲ危フスルノ罪

凡ソ國家ハ一定ノ領土ニ定着セル人民ヲ唯一ノ主權ニ依リテ統治セラレル政治的團體ナルヲ以テ主權者及ヒ領土ニ對スル危害カ國家ノ存立ヲ危フスルヤ勿論ナリ、而シテ現今ニ於ケル國家ハ國際法上ノ主體トシテ他國ト和親交通ヲ爲スカ故ニ國交ヲ害スル行爲モ亦國家ノ存立ニ危害ヲ與フルモノトス、是ニ於テカ刑法ハ第一章皇室ニ對スル罪第二章内亂ニ關スル罪第三章外患ニ關スル罪第四章國交ニ關スル罪等ヲ規定シ以テ國家ノ存立ヲ危害スル

國家ノ存立ヲ危フスル罪ノ概念

行爲ヲ處罰セリ。

左ニ節ヲ分テ之ヲ説明スヘシ。

### 第一節 皇室ニ對スル罪

我大日本帝國ハ上ニ萬世一系ノ皇室ヲ戴キ下ニ義勇忠孝ノ國民ヲ以テ組織シ團結セル世界無比ノ國體ニシテ天皇即國家トモ稱スヘキ大國是ナルカ故ニ皇室ト帝國トノ關係ハ相互ニ密接シテ寸毫モ分離スヘカラサル特別ノ歷史的觀念ナリ、從テ皇室ノ安危ハ直接間接ニ帝國ノ存亡ニ關スルヤ必セリ、是レ我カ刑法カ特ニ諸外國ノ立法ト其ノ趣キヲ異ニシ最モ嚴格ナル規定ヲ設ケテ刑法典中ノ第一位ニ置キタルト同時ニ普通人ニ對スル犯罪ト區別シ特別罪トナセル所以ナリ。

本罪ニ關スル刑法ノ規定ヲ示セハ左ノ如シ、

#### 第一章 皇室ニ對スル罪

##### 第七十三條

天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子又ハ皇太孫ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪

第七章

國家ノ存立ヲ危フスルノ罪

第一節

皇室ニ對スル罪

五四五

皇室ニ對スル罪ノ概念



加ヘントシタル者ハ死刑ニ處ス

第七十四條 天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子又ハ皇太孫ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

神宮又ハ皇陵ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者亦同シ

第七十五條 皇族ニ對シ危害ヲ加ヘタル者ハ死刑ニ處シ危害ヲ加ヘントシタル者ハ無期懲役ニ處ス

第七十六條 皇族ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者ハ二月以上四年以下ノ懲役ニ處ス

皇室ニ對スル罪ハ危害罪ト不敬罪トノ二種ヲ包含ス。

左ニ要件ヲ分説スヘシ。

第一 客體 本罪ノ客體ハ天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子、皇太孫及ヒ其他ノ皇族ナリ、尙ホ右ノ外不敬罪ノ客體ハ神宮及ヒ皇陵ノ二者ヲ包含ス。

一 天皇トハ皇室典範ノ規定ニ依リテ皇位ヲ繼承シ給ヘル在世ノ天子ヲ奉

稱シ、太皇太后トハ先々帝ノ皇后ヲ、皇太后トハ先帝ノ皇后ヲ、皇后トハ現在

ノ天皇ノ皇后ヲ、皇太子トハ皇室典範ノ規定ニ依リ儲嗣タルヘキ皇子ヲ、皇

太孫トハ皇太子ノ在ラサル場合ニ於テ儲嗣タル皇孫ヲ奉稱ス、其他ノ皇族

トハ皇太子妃、皇太孫妃、親王妃、内親王、王及ヒ王妃ヲ奉稱ス。

二 神宮トハ皇祖ヲ奉祀セル伊勢大廟ヲ意味ス、皇陵トハ歷代天皇ノ御陵ヲ

謂ヒ皇族ノ御陵ヲ包含セス。

第二 行爲 行爲ハ危害ト不敬トノ二種ナリ

一 危害罪 危害トハ生命身體又ハ自由ニ對スル侵害ノ義ニシテ法律ハ現

實ニ危害ヲ加ヘタル場合ト危害ヲ加ヘントシタル場合トヲ同一ニ處罰ス

而シテ、天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子又ハ皇太孫ニ對シテ爲シタルトキ

ハ死刑ニ處シ其他ノ皇族ニ對シテ爲シタルトキハ實害ト危險トヲ區別シ

死刑又ハ無期懲役ニ處ス。

二 不敬罪 不敬トハ皇室ノ尊嚴ヲ冒瀆スヘキ一切ノ行爲ヲ謂フ、如何ナル

場所如何ナル方法ニ於テ爲スヲ問ハサルカ故ニ普通ノ誹毀侮辱罵詈訾嘲笑

ノ如キハ勿論一般ノ慣習上皇室ノ尊嚴ヲ冒瀆スヘキ行爲ハ不敬ノ行爲ナ

リ

危害罪

不敬罪



リ、神宮皇陵ニ對シテハ毀壞汚損等ヲ包含ス、而シテ不敬カ天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子又ハ皇太孫ニ對スルトキハ三年以上五年以下ノ懲役ニ其  
他ノ皇族ニ對スルトキハ三月以上四年以下ノ懲役ニ處ス。

第三 故意 本罪ハ故意犯ナルカ故ニ客體ニ付テノ認識及ヒ之ニ對シテ危害又ハ不敬ヲ加フルノ認識ヲ必要トス、故ニ若シ客體ノ認識ナキトキハ他罪ヲ構成スルモ本罪タラス。

### 第二節 内亂ニ關スル罪

内亂罪ハ朝憲紊亂ノ目的ヲ以テ暴動ヲ爲スニ因テ成立スル犯罪ナリ 凡ソ一國ノ政治的秩序ハ内部ヨリノ侵害ト外部ヨリノ攻撃トニ因リテ破壊セラ  
ルモノトス、外部ヨリノ攻撃ハ即チ外患ニシテ内部ヨリノ侵害ハ所謂内亂  
ナリ、内亂罪ハ斯ク國家ノ存立ヲ危フスルコト甚タシキカ故ニ其豫備陰謀及  
ヒ幫助ヲモ處罰スヘキ旨ヲ規定セリ試ミニ本罪ニ關スル規定ヲ示セハ左ノ  
如シ

内亂罪ノ觀念

#### 第二章 内亂ニ關スル罪

第七十七條 政府ヲ顛覆シ又ハ邦土ヲ僭竊シ其他朝憲ヲ紊亂スルコトヲ目的トシテ暴動ヲ爲シタル者ハ内亂ノ罪ト爲シ左ノ區別ニ從テ處斷ス

- 一 首魁ハ死刑又ハ無期禁錮ニ處ス
- 二 謀議ニ參與シ又ハ群集ノ指揮ヲ爲シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ禁錮ニ處シ其他諸般ノ職務ニ從事シタル者ハ一年以上十年以下ノ禁錮ニ處ス
- 三 附和隨行シ其他卑ニ暴動ニ干與シタル者ハ三年以上十年以下ノ禁錮ニ處ス 前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス但前項第三號ニ記載シタル者ハ此限ニ在ラス
- 第七十八條 内亂ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲シタル者ハ一年以上十年以下ノ禁錮ニ處ス
- 第七十九條 兵器、金穀ヲ資給シ又ハ其他ノ行爲ヲ以テ前二條ノ罪ヲ幫助シタル者ハ七年以下ノ禁錮ニ處ス
- 第八十條 前二項ノ罪ヲ犯スト雖モ未タ暴動ニ至ラサル前自首シタル者ハ其刑ヲ免除ス

内亂罪ノ要件

#### 第一 内亂罪ノ要件

一 主體 内亂罪ノ主體ハ本罪ノ性質上多數人ノ存在スルコトヲ要ス。如何ナル程度ノ人數ヲ必要トスヘキヤハ裁判官ノ判斷ニ因テ決スヘキ事

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪

第七章 國家ノ存立ヲ危フスルノ罪 第二節 内亂ニ關スル罪



實問題ナリ。

朝憲紊亂ノ目的トハ何ソ

内亂罪ノ既遂未遂ノ限界

二 行爲 本罪ノ行爲ハ暴動ナリ。暴動トハ多數共同シタル暴行脅迫ナリ、必スシモ戰爭狀態ニ至ルコトヲ要セス、本罪ノ暴行ハ廣キ意義ヲ有シ殺傷放火掠奪等朝憲紊亂ノ目的ヲ達スルニ必要トスル總テノ行爲ヲ包含ス。

三 暴動ハ朝憲紊亂ノ目的ヲ以テ爲スコトヲ要ス。即チ本罪ハ目的罪ナリ故ニ此目的ナキトキハ騷擾罪其他ノ犯罪ヲ成立シ得ヘキモ本罪ヲ構成セス。朝憲紊亂トハ政府ノ顛覆邦土ノ僭竊等ノ如キ憲法ニ定マレル國家ノ政治的秩序ヲ紊亂スル行爲ヲ謂フ例ヘハ立憲政體ヲ變更シテ專制政體ト爲シ又ハ君主ヲ廢シテ共和團體ト爲サントシ又ハ一地方ニ據リテ天子ト僭稱スルカ如キ是ナリ。

第二 本罪ノ既遂ハ朝憲紊亂ノ目的ヲ以テ暴動ヲ爲シタル時ニ成立ス、故ニ暴動ヲ爲サントシテ之ニ著手シタルモ未タ遂ケサルトキハ未遂ナリ。  
第三 刑罰 刑罰ハ加擔行爲ノ程度ニ因リテ差異アリ、首魁トハ暴動團體ノ所謂大將ナリ、謀議ニ參與シタル者トハ作戰計畫ヲ爲ス者ナリ、群集ヲ指揮スル

内亂罪ノ豫備陰謀及ヒ幫助

者トハ一部ノ隊長ヲ謂ヒ、附和隨行スル者トハ兵卒ノ地位ニアル即チ陣笠連ヲ總稱ス。

第四 内亂罪ノ豫備陰謀及ヒ幫助

内亂罪ノ豫備トハ暴動ノ準備行爲ニシテ兵器金穀ヲ調達スルカ如キヲ謂ヒ陰謀トハ二人以上内亂罪ヲ起スコトヲ謀議スルヲ謂フ、次ニ内亂罪ノ幫助トハ内亂罪ヲ容易ナラシムル爲メ兵器金穀ヲ資給シ其他ノ便宜ヲ與フルカ如キヲ謂フ、而シテ此等ノ行爲ヲ爲スモ暴動ニ至ラサル前ニ自首シタルトキハ其刑ヲ免除セラル、是レ内亂罪ノ法益カ重要ナルカ故ニ速ニ之ヲ鎮壓セントスル政策ニ基因スルモノニ外ナラス。

第三節 外患ニ關スル罪

外患罪ノ觀念

外患ニ關スル罪ハ對外關係ニ於ケル國家ノ存立ヲ危フスルモノニシテ、内亂罪ニ對應スル觀念ナリ、而シテ内亂罪ノ多クハ其動機カ愛國ノ至情ヨリ發露スルモノナレトモ外患罪ハ外部ニ對スル國難ヲ醸シ殊ニ賣國貪利ノ目的ニ

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪 第七章 國家ノ存在ヲ危フスルノ罪 第三節 外患ニ關スル罪 五五一



出ツルヲ以テ通例トス是レ一名反逆罪ノ稱アル所以ナリ、又本罪ハ敵國關係ノ發生又ハ存在ヲ條件トシテ成立スルモノナルカ故ニ單純ニ外交關係ニ於テ帝國ヲ害スル行爲ハ本罪タラス。尙ホ新刑法ハ舊刑法ト異ナリ内國人タルト外國人タルトヲ問ハス本罪ノ主體タルヲ得ヘシ。試ミニ刑法ノ規定ヲ示セハ左ノ如シ

第三章 外患ニ關スル罪

第八十一條 外國ニ通謀シテ帝國ニ對シ戰端ヲ開カシメ又ハ敵國ニ與シテ帝國ニ抗敵シタル者ハ死刑ニ處ス

第八十二條 要塞、陣營、軍隊、艦船其他軍用ニ供スル場所又ハ建造物ヲ敵國ニ交付シタル者ハ死刑ニ處ス

兵器、彈藥其他軍用ニ供スル物ヲ敵國ニ交付シタル者ハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス  
第八十三條 敵國ヲ利スル爲メ要塞、陣營、艦船、兵器、彈藥、汽車、電車、鐵道、電線其他軍用ニ供スル場所又ハ物ヲ損壞シ若クハ使用スルコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス

第八十四條 帝國ノ軍用ニ供セサル兵器、彈藥其他直接ニ戰闘ノ用ニ供ス可キ物ヲ敵國ニ交付シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス

第八十五條 敵國ノ爲メニ間諜ヲ爲シ又ハ敵國ノ間諜ヲ補助シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ五年以上ノ懲役ニ處ス

軍事上ノ機密ヲ敵國ニ漏洩シタル者亦同シ

第八十六條 前五條ニ記載シタル以外ノ方法ヲ以テ敵國ニ軍事上ノ利益ヲ與ヘ又ハ帝國ノ軍事上ノ利益ヲ害シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

第八十七條 前六條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第八十八條 第八十一條乃至第八十六條ニ記載シタル罪ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第八十九條 本章ノ規定ハ戰時同盟國ニ對スル行爲ニ亦之ヲ適用ス

外患ノ分類

戰端開始罪

外患ニ關スル罪ハ(一)戰端開始罪(二)抗敵罪(三)敵國幫助罪(四)間諜並ニ機密漏洩罪(五)補充罪ヲ包含ス。左ニ之ヲ分説スヘシ。

第一 戰端開始罪(第八十一條)

本罪ハ外國ニ通謀シテ帝國ニ對シ戰端ヲ開カシムルニ因テ成立ス。通謀ト



ハ外國ト互ニ謀議スルヲ謂フ、而シテ本罪ハ帝國ニ對シ開戦セシムルコトヲ要件ト爲スカ故ニ通謀ヲ爲スモ未タ其外國ト帝國トノ間ニ戰端ヲ開カサル間ハ本罪ノ既遂ト爲ラス、

第二 抗敵罪(第八十一條後段)

本罪ハ敵國ニ與シテ帝國ニ抗敵スルニ因テ成立ス。(一)敵國トハ戰爭ノ對手國ニシテ所謂與スルトハ敵國ト合同スルヲ謂フ、(二)抗敵トハ帝國ニ敵對スルヲ謂フ必スシモ實戰ニ參加スルヲ要セス。

第三 敵國幫助罪(第八十二條乃至第八十四條)

敵國幫助ハ軍用物又ハ戰用物ヲ敵國ニ交付シ又ハ敵國ヲ利スル爲メ之ヲ毀棄スルニアリ。本罪ニ付キ注意スヘキハ第八十三條ノ罪ハ行爲者ニ於テ敵國ヲ利スルノ目的ヲ有シタルコトヲ要件トスルカ故ニ若シ此ノ目的ナキトハ本罪ヲ構成セ

ス。

第四 間諜並ニ機密漏泄罪(第八十條)

(一)敵國ノ爲メニ間諜ヲ爲ストハ敵國ニ通知スル目的ヲ以テ陰密ニ或ハ虛偽ノ口實ヲ以テ帝國ノ軍事上ノ機密ヲ探知シ若クハ軍事上ニ涉ル圖書物件ノ類ヲ收集スルヲ謂フ、(二)間諜ヲ幫助スルトハ間諜ヲ爲ス者ヲ誘導指示藏匿其他間諜ヲ容易ナラシムル一切ノ行爲ヲ意味ス、(三)軍事上ノ機密ヲ漏泄スルトハ軍事ニ利害關係ヲ有スル秘密事項ヲ敵國ニ告知スルヲ謂フ。

第五 補充罪

刑法第八十六條ハ以上説明シタル行爲ノ外如何ナル方法ヲ以テスルモ敵國ニ軍事上ノ利益ヲ與ヘ又ハ帝國ノ軍事上ノ利益ヲ害シタル行爲ヲ處罰スヘキ旨ヲ規定セリ。刑法カ特ニ概括的ノ規定ヲ設ケタル理由ハ法益重大ニシテ微細ノ侵害モ其害ノ及フ所大ナルヲ以テ其違算ナカランコトヲ期セルモノトス。

第六 外患ニ關スル罪ハ何レモ事體極メテ重大ナルヲ以テ未遂ハ勿論其豫備及ヒ陰謀ヲ處罰スヘキモノト爲セリ(第八十七條)

第七 戰時同盟國ニ對スル行爲(第八十條)

外患罪ノ未遂豫備及ヒ陰謀

間諜並ニ機密漏泄罪

敵國幫助罪

抗敵罪



戰時同盟トハ意  
守同ニトス  
義守同ニトス  
ハ共同ニトス  
ニ共同ニトス  
ハ共同ニトス  
ニ共同ニトス  
ハ共同ニトス  
ニ共同ニトス

國交ニ關スル  
觀念

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪 第七章 國家ノ存立ヲ危フスルノ罪 第四節 國交ニ關スル罪

五五六

外患罪ノ規定ハ戰時同盟國ニ對スル行爲ニモ適用スヘキコトヲ規定セリ。  
戰時同盟國トハ帝國ト第三國ト戰爭中帝國ト共同シテ戰闘ニ從事スル同盟  
國ヲ謂フ。

第八 刑罰 外患罪ノ刑罰ト内亂罪ノ刑罰トハ其種類ヲ異ニス是レ本罪カ非  
愛國心殊ニ賣國奴ノ性質ヲ有スルニ因ルモノナレハナリ、詳細ハ前掲條文ヲ  
對照スヘシ。

### 第四節 國交ニ關スル罪

現今文明國ニ於テハ外國ト和親交通ヲ爲スニ因テ自國ノ安全ヲ保持スルヲ  
本則トス、外國トノ戰爭ハ國家ノ自衛上ノ最後ノ手段ナリ從テ國家ハ外國ト  
ノ修好和親ヲ害スル行爲ハ常ニ之ヲ防遏スルノ政策ヲ講セサルヘカラス是  
レ本罪ノ規定ヲ設ケタル所以トス。

#### 第四章 國交ニ關スル罪

第九十條 帝國ニ滞在スル外國ノ君主又ハ大統領ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘ

ル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

帝國ニ滞在スル外國ノ君主又ハ大統領ニ對シ侮辱ヲ加ヘタル者ハ三年以下ノ  
懲役ニ處ス但外國政府ノ請求ヲ待テ其罪ヲ論ス

第九十一條 帝國ニ派遣セラレタル外國ノ使節ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタル  
者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

帝國ニ派遣セラレタル外國ノ使節ニ對シ侮辱ヲ加ヘタル者ハ二年以下ノ懲役  
ニ處ス但被害者ノ請求ヲ待テ其罪ヲ論ス

第九十二條 外國ニ對シ侮辱ヲ加フル目的ヲ以テ其他ノ國旗其他ノ國章ヲ損壞  
除去又ハ汚穢シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス但外國  
政府ノ請求ヲ待テ其罪ヲ論ス

第九十三條 外國ニ對シ私ニ戰闘ヲ爲ス目的ヲ以テ其豫備又ハ陰謀ヲ爲シタル  
者ハ三月以上五年以下ノ禁錮ニ處ス但自首シタル者ハ其刑ヲ免除ス

第九十四條 外國交戰ノ際局外中立ニ關スル命令ニ違背シタル者ハ三年以下ノ  
禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

右ノ規定ニ依レハ國交ニ關スル罪ハ(一)外國ノ代表者ニ對スル罪(二)直接外國  
ニ對スル罪(三)局外中立命令ニ違反スル罪トニ分類スルヲ得ヘシ。

#### 第一 外國ノ代表者ニ對スル罪(第九十條 第九十一條 第九十二條)

刑法各論 第二篇 公共ノ法益ニ對スル罪 第七章 國家ノ存立ヲ危フスルノ罪 第四節 國交ニ關スル罪

五五七

外國代表者ニ  
對スル罪



本罪ハ客體ニ對シテ暴行脅迫又ハ侮辱ヲ爲スニ因テ成立ス。  
左ニ要件ヲ分説セン。

- 一 客體 本罪ノ客體ハ帝國ニ滞在スル外國ノ君主又ハ大統領若クハ帝國ニ派遣セラレタル外國ノ使節ナリ。君主大統領ハ帝國ニ滞在スル現在ノ主權者タルコトヲ要シ使節ハ特ニ帝國ニ派遣セラレタルコトヲ要ス其使節ハ儀式上ノ使節タルト外交上ノ使節タルトヲ問ハス而シテ使節ハ外國ノ使節タルカ故ニ羅馬法王ノ使節ハ之ヲ除外スヘキモノトス何トナレハ羅馬法王ハ羅馬舊教寺院ノ主宰ニ過キスシテ國家ニ非サレハナリ。
- 二 行爲 本罪ノ行爲ハ暴行脅迫又ハ侮辱ナリ。行爲ノ種類ニ因テ刑罰ヲ異ニス而シテ暴行トハ人ノ身體ニ對スル不正ノ腕力ニシテ脅迫トハ害惡ノ通知ニ因テ人ヲシテ畏怖ノ念ヲ生セシムルヲ謂ヒ侮辱トハ尊嚴品位ヲ蹂躪スル一切ノ行爲ヲ謂フ。
- 三 本罪中侮辱ニ付テハ訴追條件トシテ外國政府又ハ被害者ノ請求ヲ待テ其罪ヲ論スヘキモノトセリ是レ侮辱ハ比較的輕微ナル犯罪ナレハ請求ナ

直接外國ニ對スル罪

第二 直接外國ニ對スル罪 第九十二條 第九十三條

ケレハ特ニ罰スルノ必要ナケレハナリ

直接外國ニ對スル罪ハ(一)外國ノ國章ヲ損壞除去又ハ汚穢スルノ罪(二)外國ニ對シ私ニ戰爭ヲ爲スノ罪トニ區別スルヲ得ヘシ

一 外國ノ國章ヲ損壞除去又ハ汚穢スル罪ハ外國ニ對シテ侮辱ヲ加フルノ目的ヲ以テ爲スコトヲ要件トス、故ニ侮辱ノ目的ナキトキハ本罪タラス尙ホ目的物ハ外國ノ國章ナリ、國章トハ一國ノ權威ヲ表彰スル徽章ヲ總稱ス刑法ハ國旗ヲ以テ其一例トス、國章ハ外國所屬ノモノタルコトヲ要スルカ故ニ外國ノ君主其他ノ來遊ニ際シ歡迎ノ爲メ個人ノ掲揚スル外國國旗ノ如キハ之ヲ除去シ又ハ汚穢スルモ本罪タラス、本罪ハ訴追條件トシテ外國政府ノ請求アルコトヲ要ス。

二 外國ニ對シ私ニ戰鬥ヲ爲スノ罪ハ其目的ヲ以テ豫備又ハ陰謀ヲ爲スニ因テ成立ス。私ニ戰鬥ヲ爲ストハ個人カ宣戰ノ大權ニ因ル命令ヲ受ケスシテ擅ニ戰鬥行爲ヲ爲スヲ謂フ、但自首シタル者ハ其刑ヲ免除セラル。



第三 局外中立命令ニ違反スル罪(第九十條)

外國交戦ノ際トハ外國ト外國トニ於テ戰爭中ナルコトヲ意味ス、此場合ニ國家カ何レノ國家ニモ加擔セスシテ局外中立ヲ守ルヘキ必要アルトキハ人民ニ對シテ局外中立ヲ守ルヘキコトノ命令ヲ發スルヲ常トス、故ニ此命令ニ違反スルトキハ犯罪タリ、是レ局外中立ノ違反ハ國交ヲ危害スルカ故ナリ。

第八章 國權ニ對スル罪

本章ハ法典第五章公務ノ執行ヲ妨害スル罪第六章逃走ノ罪第七章犯人藏匿及ヒ證憑湮滅ノ罪ヲ説明スルヲ以テ目的トス、此等ノ犯罪ハ何レモ國權ノ作用ヲ直接間接ニ侵害スル點ニ於テ共通ノ性質ヲ有ス。  
左ニ節ヲ分テ各犯罪ノ要件ヲ説明スヘシ。

第一節 公務ノ執行ヲ妨害スル罪

本罪ハ舊刑法ノ如ク官吏ト謂ハスシテ廣ク公務員ト稱スルヲ以テ苟モ法令

ニ依リ公務ヲ行フ者ニ對スル妨害行爲ハ總テ本罪トシテ處罰ス、蓋シ公務ヲ執行スル點ニ於テ官吏タルト其他ノ公務員タルトニ區別ナキカ故ニ何レモ之ヲ保護スルノ必要アルヲ以テナリ。

第五章 公務ノ執行ヲ妨害スル罪

第九十五條 公務員ノ職務ヲ執行スルニ當リ之ニ對シテ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

公務員ヲシテ或處分ヲ爲サシメ若クハ爲ササラシムル爲メ又ハ其職ヲ辭セシムル爲メ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタル者亦同シ

第九十六條 公務員ノ施シタル封印又ハ差押ノ標示ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ封印又ハ標示ヲ無効タラシメタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第九十六條ノ二 強制執行ヲ免ルル目的ヲ以テ財産ヲ隱匿、損壞若クハ假裝讓渡シ又ハ假裝ノ債務ヲ負擔シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第九十六條ノ三 偽計若クハ威力ヲ用ヒ公ノ競賣又ハ入札ノ公正ヲ害スヘキ行爲ヲ爲シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ五千圓以下ノ罰金ニ處ス  
公正ナル價格ヲ害シ又ハ不正ノ利益ヲ得ル目的ヲ以テ談合シタル者又同シ